

あかりとマキの正妻戦 争

左右田五木呂

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『あー!! 何でマキ先輩がこんな時間から学校にいるんですか!?!』

『……そういうあかりさんこそ、何で高等部棟にいるのさ』

継星あかりと弦巻マキは顔を合わせるなり今日もケンカを始める。

あかりの大好きな従姉であり、マキにとっては仲のいい親友である結月ゆかりにとつて、どちらが一番かを巡った熾烈な争い。

二人の過熱した争いは、遂に平和な学園を巻き込んだ一大イベントへと突入する。

『おっしや! それならここに二人のうちどつちが結月ゆかり書記にふさわしいか……』

弦巻マキと継星あかり両名による『正妻戦争』の開始を宣言するツ!!』

勝負の行方は――

『……もう、好きにしてください……』

――そして意思を無視され、景品扱いされるゆかりの明日はどっちだ！

*P i x i vとの同時投稿になります

目次

ケンカするほど仲が悪い | 1

結月ユカリの憂鬱 | 15

正妻戦争、開幕 | 24

一戦目 | 弦巻マキは勉強がお嫌い

36

一戦目 | 偽装中学生あかり | 47

二戦目 | あかりの弁当は肉飯増し

62

二戦目 | マキさんは料理上手 | 82

三戦目 | ゲーセンでの決戦 (前半戦)

99

三戦目 | ゲーセンでの決戦 (後半戦)

130

勝負の終わり

ゆかりの選択

勝負の裏側と小さな一歩

170 152 148

ケンカするほど仲が悪い

「私はあの人が好きだ」

「僕はあの子が好きだ」

「先輩の一番は私なのに、私が離れなければならなかった間隙を縫って勝手に一番の親友だなんて自称しているあの人が好きだ」

「親戚かなんだか知らないけれど突然に表れたと思ったら、いきなり僕の親友にベタベタしようとするあの子が好きだ」

「同じ学年だからって違うクラスなのに隙あらば先輩のところに行こうとしてるのは、流石に迷惑だと思う。先輩にもクラスの中での関係がある訳で……私だって抑えてるのに」

「高等部と中等部で時間割は違うし、別に家が近いわけでもないのにわざわざ毎朝一緒に登校しようとするのはやりすぎじゃない？ そりゃあ僕は朝あんまり得意なほうじゃないけど、親友の為なら絶対起きれる!! ……筈だ」

「それに、わざわざ見せつけるようにして修学旅行で一緒に買ったとかいうキーホルダーをつけてるのも気に食わない。私は年齢的にも時期的にも先輩と一緒に修学旅行

に行けたはずがなくて、そんな事実を改めて突き付けられているようで」

「それに、お菓子や小物なんかのちよつとした好みにあの子が関わっていたりすると、どうしようもないけど妬ましい。僕が会おう以前の親友にとって、あの子がどれだけ大きな存在か思い知らされるようで」

「実際年齢差というのはなかなか埋めようがない。今の家族のような関係が嫌いなわけではないけれど、あの人とのように対等な友達、という奴になるのはどうしても難しい」

「第一年下の親戚と何の血縁もない他人、その違いは大きいと思う。どうしても僕じゃあの子相手に見せるような遠慮のない関係にはなれないだろう」

「そもそもあの引越しさえなければ私も先輩と離れる必要なんてなかったわけで、そうだったらあの人の方が今みたいに割り込んでくるようなことも無かったはずなのに」

「もし仮に僕のほうがあの子より早く親友と出会ってさえいれば、あの子が付きまといてくるような事にならなかつたんじゃないだろうか」

「そんな訳で私は——」

「だから、僕は——」

弦巻マキが嫌いだ」

継星あかりが嫌いだ」

「あー!! 何でマキ先輩がこんな時間から学校にいるんですか!」

「……そういうあかりさんこそ、何で高等部棟にいるのさ」

早朝の精華学園高等部棟二階、A組教室前の廊下。まだ朝礼が始まるまでは随分と時間がある為か、生徒たちが駄弁つたりスマホでゲームに興じたりと各々の時間を過ごし、のどやかな空気が流れていたそこに突如、場違いなピリピリとした声が二つ響き渡った。

一体何事かと生徒たちのにぎやかな騒めきはびたりと止まり、視線が声の主である二人へと集まる。

一人は丁度階段を登ったあたりのところで、中等部の制服であるセーラー服のスカートを翻し、幼さの残る頬を膨らませてもう一人に向かって人差し指を突きつける白い三つ編みの少女。

それに十メートルほど離れて相対するのは高等部生であろう、ブレザーの上着を腰で巻き、仁王立ちして不満そうに腕を組む、長い金髪の女子生徒。

共に美少女、美人と言って差し支えない二人のにらみ合いは、それこそ映画のワンカットにでもすれば映えるのかも知れないが、ここは狭い学校の廊下だ。二人によつて生み出される緊張感にたちまち場は満たされ、そんな悠長なことは言つていられそうにもない。

現に二人の姿を認めた生徒たちの中には「おい、あれ弦巻さんだよな?」「え? 何、何があつたの?」と不安そうにしている者もいる。

だが意外にもそのような生徒は一部であり、大多数は「ああ、あの二人ね……」「またやつてんのかあの二人」と少し呆れたようにしながらも緊張の糸を僅かに緩め、二人の様子を観劇でもするかのように遠巻きに眺め始めた。

そしてあくびをしながら歩いていたために、周りから少し遅れて二人の睨み付けるような視線に挟まれていると気付いた男子学生が、慌てて壁際へと飛び退る。そしていよいよ二人を遮るものがなくなつたところで、「あかりさん」と呼ばれた中等部生の少女が、威嚇するように二つの三つ編みを揺らして戦端を開いた。

「マキ先輩は知らないでしょうけど私はいつもこれ位の時間には学校へ来てますし、ここにいたつておかしくないですから。それよりも! 遅刻魔なマキ先輩がこんな朝早くから学校にいる方がおかしいじゃないですか!」

そう言われた金髪の高等部生は思い当たる節があるのか、少しバツが悪そうに「うっ」

と呻いて目をそらす。だがすぐにやられっぱなしではいられないと考え直したのか、一つ咳払いしてから再び中等部の子へ細く尖らせた視線を戻した。

「……別にいいじゃないか、僕だつて偶には朝早く来るものがあつたつてさ。いつもより遅く来るよりはいいでしょ？ あ、後それから僕は遅刻魔じゃないから！ ギリギリなだけで一応ちゃんと間に合つてはいるから!!」

「……いや、あれ完全にお情けかけてもらつてますからね？ 昨日とか完全に生活指導の先生、校門を閉めてる途中で先輩の姿が見えたからつて、手を止めてよそ見しながら口笛吹いてましたからね？」

「な?! 何でそれをあかりさんが知つてんのさ!?!」

「何でも何も……中等部棟は校門の正面ですし私の席は窓際ですから、毎朝駆け込んでくるマキ先輩の姿は見たくなくても見えてしまうので。ああ、そういえば一昨日は風紀委員の方に頭を下げこんで何とか通してもらつてましたねえ……。それから一週間ほど前には——」

「う、うがあああああああ」

自らの宿敵に毎朝自分の情けない姿を見られていたことに、マキは声にならない叫びをあげて金髪をワシヤワシヤと掻き巻る。

そんな彼女の背後から一人の男子生徒が「大丈夫つす、弦巻さん！ 弦巻さんが朝弱

いのはみんな知ってますから!!」と声をかけ、それに同調するように「そうだよ、今更そんな事気にしない気にしない!」「朝弱い弦巻さんも素敵だと思いまーす!」など、好き勝手な声援(?)が飛ぶ。

「うー…うるさーい!!」

さつきまでの凜とした鋭い目つきから一転、今やちよつと涙ぐんでいるマキは後ろの生徒たちに向かって吠える。

廊下を満たしていた緊張感は完全になくなったわけではないが、先ほどまでと違って少しコミカルな雰囲気混じっていて、先ほどまで大丈夫かと心配していた一部の生徒たちもなんとなく、目の前のこれが深刻な事態ではないと察し始めた。

「くくっ! あーもう、僕のことはいいんだよ! それよりもあかりさん!! 中等部生の君が高等部棟に理由もなくこうやって来ている方が問題じゃないの?!」

話題をそらすように勢いよく言いきって、彼女はバン! と折り目を入れておいた生徒手帳のページを開き、あかりに見せつける。

「校則の()にあるでしょ『中等部生は高等部棟に、あるいは高等部生は中等部棟に理由なくむやみに立ち入ってはならない』って!」

それを聞いて今まで主導権を握っているという余裕に満ちていたあかりの表情に、僅かながら動揺が浮かんだ。

「そんな事書いて………むう」

自身の生徒手帳を開き先ほどの一文を見つけたのか、今度は明らかに曇った彼女の表情を見て、マキは先輩げもなく「いよっ！」とこぶしを握った。

何せ頭の回転が違うためか、目の前の中等部生にはいつもいいように言い負かさかかっているのだ。正直周囲からの助言がなければ、今まで何度言い負かされてしまっているだろうか分からない。まあ、その対価として先ほどのように茶化される場合もあるのだが。

閑話休題。そんな彼女に一泡吹かせる為に今まで色々と考えを巡らせ、そしてつい昨日。何か校則で使えるものはないかという思い付きのもと、折り目のない学生手帳を開いて眠気と戦いながらこの反撃の一手を見つけたのだ。それがこうして決まったわけで、ガッツポーズも己む無しであろう。

だが、よしこれで今日こそこの子を出し抜いて……と勝ちを確信してしまつたのがフラグになつてしまつたらしい。

生徒手帳に目を走らせていたあかりの目がある一点を見たところでぴたりと止まり、不敵に細められる。

「ふふ、マキ先輩にしてはなかなか考えたじゃないですか……ですが！ その校則の四つ先にはこうもあります『中等部、高等部生の別なく親交を深め、様々な意見に触れる

ことで価値観を広げ、人間性成長の糧とすること」と！　そして私は先輩方と交流を深めるために高等部へ来ている、つまり校則にも書いてある正当な理由でもって高等部棟へ立ち入ってるのです。……さあ、私がここに居るのに何か問題がありますか？」

「え!?　ほんとだ……あれ、じゃあ問題ない……う？」

それはこじつけもいいところの無茶苦茶な論法だったが、あまりにも堂々としたあかりの態度はその無茶を押し通して、それっぽさを生み出していた。

そんな詭弁についてうっかり説得されかけたマキの背後から何時ものように援護が飛ぶ。

「あかりさんが交流を深めようとしているのは主に一人じゃない！　それじゃあ価値観を広げることはできないと思います!!」

「っ！　そうそうそれ！　僕はそれが言いたかったんだよ！　あかりさんも少しは一人にこだわらないで、もっと他の人とも交流を深めるべきじゃないのかな？」

さも自分が思いついたかのように背後の女子生徒の言葉を引き継いで、マキはうんうんと深く頷く。

「いやいや、私はちゃんと中等部の方に友人がいますから。むしろ、特定の一人にこだわってるのはマキ先輩の方ではないんですか？　現に、最近毎日のように先輩と一緒にお昼ご飯を食べようと食堂で待ち伏せていますよね、あれこそ協定違反では？」

ぎくうっ！ と一瞬固まった後、マキは露骨に視線をそらしながらぎこちなく笑う。

「ハハハ、イツタイナンノコトカナー」

「下手っ！ 私が言うのも何ですけど、流石にマキ先輩ウソが下手すぎやしませんか!？」
先輩との仲を邪魔してくる敵だということも忘れて、あかりが突っ込んでしまうほどのすがすがしい棒読みだった。

「ソナナコトナイ、マキサンウソツカナイ」

露骨に一人称まで変わってるじゃないかとか、なんか抑揚がなさ過ぎてよく回転寿司店にいる接客ロボットの声みたいになってる、とか色々突っ込みたいところはあつたが、突っ込んだら負けだとそれらを胸の奥に押し込んであかりは尋ねる。

「じゃあ、昨日は何で食堂の入り口で食品サンプル見るふりしながらちらちらと周りうかがっていたんですか？」

「……………」

「昨日は食べたいメニューがあるけど、手持ちのお金がなかったから誰か知り合いにかしてもらえないかなーって探してたんだよ！」

「ソウイウコトダヨー」

答えたのはやはり弦巻ではなくその後ろにいる男子生徒の一人である。マキは棒読みで同調しただけ。

「……じゃあ、一昨日食堂の入り口付近のテーブルに座って素うどんに一切手をつけずにずーっと粘ってたのは？」

「それは、猫舌だから冷めるのを待ってたんじゃない？」

「ソウソウソウダヨー」

「いや、十分も放置してたら冷めるどころか伸びきってますよね、うどん」

そう冷静に突っ込んだつもりもありのあたりであったが、それは言い換えれば少なくとも十分はマキの姿を見ていたということに他ならず。

「実はあかりさん弦巻さんと仲良くしたいのに素直になれないからこうやって突っつかっ……ヒイ!？」

そんな風にからかおうとした男子学生にギリリと暗く輝く四つの瞳が突き刺さる。

「わあ。面白い冗談ですね、その先輩？ それはつつこみ待ちと言うことでいいんですかね？」

そういういながら不満顔の継星はシャドーボクシングを始め

「それは流石に僕も怒るよ？」

弦巻は言葉とは真逆に満面ののっこりとした笑顔を浮かべる。

「す、すいませんでしたー!!」

二人とも年下どころか、片方に至っては中等部だということも忘れて、男子学生はキ

レイな土下座を決めた。

どうやらそれで二人の矛先は彼から目の前の相手に戻ったようで、再び互いににらみ合うと、今度は弦巻の方が追及に回る。

「とうか！ 協定違反と言えば、あかりさんだつて毎日のように図書館で時間潰して高等部の授業が終わるのを待っているらしいじゃんか！ そっちの方が協定違反じゃないの？」

「違いますよ！ 自分がそうだからと言つてそれを他人にも当てはめないで下さい！

私が放課後図書館にいるのはちゃんとした理由があるからです!!」

「ふーん、じゃあそのちゃんとした理由って何さ？」

「万年赤点で勉強する気のないマキ先輩には関係ない理由ですよ」

「なあ!? ベ、別に勉強する気がないのは関係ないでしょ？ ちょっと帰国子女だからって勉強ができると思つて!!」

「言つておきますけど、私が勉強出来るのと帰国子女なのに因果関係はありませんからね。そうやって自分の努力不足を環境のせいにしてるからマキ先輩は赤点なんですよ」

「……む、むぐぐ」

実際に勉強していない自覚のあるマキはそれに言い返せず言葉につまる。

マキの取り巻きである生徒たちも正直彼女の成績についてはどうやっても庇えず、気

まずそうにそっぽを見た。

それを見た周りの生徒たちも「ああ、今日はあかりの勝ちかと」徐々に散開しようとし始めた——だがその時。

「むぎぎぎ………。いや、いいもん。もし今度赤点取ったら親友に教えてもらおうから！」
「な——！」

半ばやけくそになってついそう口にしたマキだったが、言ってしまった後で存外悪い考えでもないかもと思い直す。

「……いや、そうだよ。それでいいじゃん！ うん、これならもつともな理由で親友に会えるじゃん」

「いや、いやいやいや！ それこそ協定違反でしょう?! 勉強教えてもらおうなら先輩じゃなくてもいいじゃないですか!! それのどこがもつともな理由なんですか!?!」

「いやだって『あかりさんがいない間』よく二人で勉強会とかしてたから。二人でどつちかの家に集まって、お菓子をつつきながら勉強して、偶には話し込んで全然大丈夫でできなかった日とかもあつたりして、そんなときはじゃあまた明日やりましょうとか……」

滔々と『親友』との思い出を語り続ける弦巻マキに対して、継星あかりはフルフルと震えながらだんだん涙目になってくる。

「ぐぬぬ……なんですかそれ！　ずるい！　ずるいですよマキ先輩！　何ですかその素敵イベント!!　私だって先輩と勉強会とかしてみたのに、なんで勝手にやってるんですか！」

「そんなこと言われても、ねえ？　その時あかりさんは海外に行ってたんだから無理に決まってるじゃん。あ、そういえばいつもは教えてもらってばっかりの僕だったけど、音楽のテスト前には楽譜の読み方とか教えてあげたりして……知ってる？　親友が悩んでるのから一転、分かったって時の笑顔がすごくかわいくてさー」

「ぬあー!!　そんな詳細に語らないでください！　とにかく勉強会なんて絶対私は認めないですからね!!　そんなのどう考えたって協定違反です！」

あかりは地団駄を踏みながら、マキを指さす。

因みに二人の会話に出てくる『協定』とは、二人の言う親友にして先輩との関わり方を色々と定めたルール群……平たく言ってしまえばお互い抜け駆けしないように定められた不文律だ。お互い泥棒猫のような真似はやめて、淑女らしく堂々と争おうという所から「淑女協定」という名前がついているが、そんな長つたらしい言葉使つてられないのでも協定と略されてしまっている。ただそんな呼び方の雑さに反して、協定が定める内容は多い。

最初こそ『付きまとうような行動をやめる』という一文だけだったが、継星あかり

がルールの裏を突くような手段で『先輩』に会おうとしたり、弦巻マキが天然交じりでルールの間隙を掻い潜ろうとしたりしているうちに、いつの間にか結構な数のルールが出来てしまっているのだった。

例えば件の相手について二人とも名前を呼ばず「先輩」、「親友」と呼んでいるのもそんなルールの一つ故であり、これの為に最近ではまともに会うことはおろか学校で名前を呼ぶことすら稀になってしまっているのだ。

結月ユカリの憂鬱

さて、そんな風にいつ終わるとも知れない争いを繰り広げている二人は完全に忘れてしまっているが、二人が火花を飛ばしているここは学校の廊下である。それも朝とくれば、当然何も知らないままにここへ踏み込んでしまう不幸な人間もいる訳で。

丁度階段を登ってきていた一人の男子学生がうっかり廊下へと片足をかけ……ただならぬ空気に巻き込まれるまいと慌てて階段へと引つ込んだ。

「朝から何やってんだよ……って、うん？」

しかし何か引つかかることがあつたのか、頭だけひよっこり出して廊下を覗き込み、一緒に歩いてきた悪友に尋ねる。

「なあ、今喧嘩してるのってあの弦巻さんだよな？」

悪友は彼の後ろから廊下を覗き込み

「うん？ ああ、せやな。あの軽音の弦巻マキやな」

微妙に胡散臭い関西弁をしゃべるそいつは、うんうんと首肯した。

そう、この学園で弦巻マキといえば『あの弦巻マキ』で通じるくらいの有名人だ。

なにせ彼女の所属する第二軽音楽サークルは学園内のみならず、地域コミュニティにも名の通った有名音楽サークルである。毎年行われる学園祭のライブでは満席御礼は当たり前、この前にはついに地元商店街での学外ライブまで依頼されるほどの知名度があるといえば、その一端が伝わるだろう。

事実先ほどから彼女の周りで言い争いに茶々を入れたり加勢している生徒というのは大抵彼女のファンであり、どこで二人の争いが起こってもどこからともなく一定の人数が集まるあたり、彼女の人気が分かるというものだ。

「……じゃあ、その弦巻さんとあんな風にケンカしてるあの中等部生の子は誰なんだよ。一度弦巻さんと直接話したことあるけど、何かあの人スターのオーラみたいなものがあるじゃん？ それにもひるまず、取り巻きの人数にも臆す事無くあんな風にやりあえるとか、ただものじゃないだろ」

「まあ、あの子はあの子で急激に中等部の方の人気を獲得してる子やから、ただものじゃないと言えばただものじゃないわな」

「その言い方だとやっぱり知ってるんだろ？」

「まあ『精華学園新聞部部长に知らんことなど殆ど無い』ってな！ あの子の名前は継星あかり、一か月前にこの学園に転入してきた中等部三年生やな」

「一か月前って、六月くらいか？ なんかもまた中途半端な時期に来たもんだな」

「なんでも今までアメリカにおつたらしいからな、いわゆる帰国子女ゆう奴や。向こうとこつちでは学期がちゃうし、向こうの学校でキリいいとこまで終わらせて来たんちゃう?」

「ふーん、ということは継星つて子の方が弦巻さんに突つかかつてる感じなのか? 正直、弦巻さんは誰かに喧嘩を吹っ掛けに行くような性格じゃあないだろ?」

彼の言う通り、普段の弦巻マキはかなり穏やかな性格だ。学園で絶大な人気を誇るはその音楽の実力のみならず、彼女の人当たりがいい性格も理由の一つである。

だが、それに答える悪友は難しい顔をする。

「うーん、どつちもどつちつてところやろなあ……あれは。あかりちゃんがマキさんに仕掛けに行くこともあるけど、マキさんからあかりちゃんに仕掛けに行くことも割とあるしなあ」

男子学生は弦巻マキが自分から喧嘩を吹っ掛けに行くというのを聞いて意外そうな顔をしたが、まあ弦巻さんだつて人間だし、反りの合わない相手だっているだろうと思ひ直した。

「そんなもんか。で、結局あの二人は何で争つてるんだよ?」

悪友はその質問を聞くと、露骨ににやりと唇をゆがめる。

「普段は喧嘩もしなさそうな女子が二人で回り巻き込んでまで争うとる。それだけで答

えは分かつとるようなもんやないか」

「……何だよ、その煙に巻いたような答えは。美少女通のお前と違つて俺はただの一男子学生だつての、そんなこと言われても分からなからいんだからはつきり言つてくれよ」

「ほーん、ええんか？ 折角友人が傷つかんようばかりして言つたんやけど、はつきり言つてしても」

「ん!? いやちよつと待てそれつて……」

普段争わなさそうな女子二人が争つていて、その理由を聞いたら自分が傷つく……？
与えられたピースを元に男子学生はしばらく考えて――

「――もしかして、異性絡みとかそういう？」

「……ま、一人を巡つてあの二人が争つてゐるつてことは言つとくわ」

「うわあ……まじか……」

男子学生の顔が絶望に染まる。彼も弦巻マキのファンが一人であり、そして彼女を異性として意識している少なくとも一人であったのだ。

勿論、自分なんかがああ弦巻マキと釣り合わないことは重々承知の上である。だが、それでももしかしたらと勝手に希望を抱いて妄想を膨らませ、そして現実を知りこつやつて傷ついてしまうのが男心という奴なのだ。

しばらく落ち込んでいた彼であったが、少しづつ立ち直るのに伴つて湧いてきたの

は、弦巻マキが熱を上げているというまだ見ぬ存在に対しての苛立ちであった。

「……なあ、因みにそいつはどんな奴なんだよ？ 『新聞部部长』のお前なら知ってるんだろ？」

本当にそいつは弦巻マキに釣り合う資格があるようなやつなのか？ もしそうじゃないなら絶対阻止してやる、とまるで男親のような事を考えつつ、悪友が必ず答えてくれるようにおまじないを交えて訊く。

案の定悪友は『新聞部部长』という肩書に口元を緩めて「しゃあないなあ……」と口を開こうとして——後ろから聞こえた階段を登る足元に言葉を切つて振り返り

「ああ、丁度件のお方が来はったで」

と後ろを指さした。

その指さす先にいたのは廊下から聞こえる騒ぎに眉根を寄せる紫髪の一——

「つて生徒会の結月じゃねーか！ 二人が争つてる理由は男だろ？」

「いや？ 自分よう思い出してみ？ 一言でも男が原因やて言うたか？」

「は？ いやお前……」

言つてない。

「そういえばこいつはそれっぽい事は言ってるけど、一言も男だとは断言してない。

「ま、二人が争つとる原因はどっちが結月の一番親しいやつかつちゅうこつちやな」

にやにや笑う『悪友』に対して男は悪態をつく。

「……俺、お前の事嫌いだよ。お前の事は絶対友人とは認めねえ、お前は『悪』友だ」

「おう、そんなに褒められるなんて嬉しいなあ」

「褒めてねえ！」

廊下から聞こえる喧騒とそんな階段での男子生徒と悪友のやり取りを聞いて、結月ゆかりは確信する。

（ああ、またあの二人がやっているのか）と。

ため息をつきながら廊下へと上がり、一生徒会役員の顔を身に着けて声を張った。

「朝から一体何の騒ぎですかこれは?!」

全校集会で鍛えられたよく通る声が、廊下の騒がしい空気を風ぐ。

「ゆかりおね——！……先輩」

「ゆかりn——！……さん」

久しぶりに彼女と会えた喜びに一瞬顔をほころばせる二人であったが、ゆかりの顔が不機嫌なものであることに気づいてすぐに申し訳なさそうな顔へと変わる。

「……はあ、二人ともまたですか」

「だって、マキ先輩が……」

「だって、あかりさんが……」

そう不満げに互いを指さす二人を見て、再びゆかりは溜息を吐く。彼女が二人の争いを見たのは凡そ一週間ぶりほどだが、この分だと自分の知らないところでもしよつちゆうやっていったのだろうな、と。

「二人とも、自分たちが学園内で目立つ存在だつてことが分かつてますか？　ほかの生徒の模範になるような行動を——なんてお堅いことは言いませんけど、こんな風に他の生徒を巻き込むようなケンカは流石に生徒会の一員として見逃すわけにはいきません」
改めてしよんぼりとするマキとあかり、そんな二人を見るゆかりの表情もどことなく悲し気に萎れる。

彼女だつて久しぶりに会えた二人に思う所が無いわけではなかったが、生徒会の一人としての立場があるのだと自分に言い聞かせ、一先ず原因を聞こうと声のトーンを落とした。

「そもそも、今回のケンカの原因は何ですか」

「それは……ゆかりさんが今日は生徒会で早く来るつていうからもしかしたら今日は会えるかもつて思つて頑張つて早起きしたら糺……あかりさんがいて——」

「私は学校に来たら今日が生徒会の集まりだって聞いて、もしかしたら高等部まで来たらゆかりおねえ……先輩に合えるかもって思ったら弦……マキ先輩がいて——」

「……それで、お互い相手がいたからとかいう理由でケンカしたと？」

「だって、高等部棟に中等部生がいるなんておかしいでしょ！」

「遅刻魔がこんな朝早くからいるなんておかしいじゃないですか！」

結月ゆかりは痛くなつてきた頭に手を添える。

確かに二人が当初から、あかりが学園に転入してきた時から水と油だという事は察していた。だが、最初はここまででもなかったはずだと思ふのだが……。

それに、ここまで仲が悪い癖にお互い下の名前で呼び合っているのもどうなのか。

いや、少しでも二人の仲が良くなればと思つて互いに下の名前で呼んでみるよう提案した覚えは確かにあるが、そこだけ律義に守つてたつてどうしようもない。

「……二人とも、どうしてもお互い仲良く——は無理としても、せめて争わないようにすることはできないんですか？」

ゆかりとしてはかなり妥協しての提案であつたのだが、それでも二人の反応は芳しくない。

「そもそもあかりさんがもう少しゆかりにベタベタしないでくれるなら、別に僕だってここまで言わないんだけどね……」

「何を言ってるんですかマキ先輩？ それは私とお姉ちゃんにとつての適正距離です！
まあ？ そのことを理解して自分の立場をわきまえるのなら、少しは先輩として敬意
をもって振舞ってあげてもいいですけど？」

再び二人の間にピリピリとした空気が漂い始め、ゆかりは本格的にどうしたものかと
頭を抱える。

正直自分にとつて大切な存在である二人が争っているというだけでも、争いごとを好
まない結月ゆかりとしては心中穏やかではないのだが、さらにその理由が自分であると
なれば猶更である。

(……やっぱり、私が二人と距離を取る以外にないんでしようかね)

あまり考えたくない最終手段をつい思い浮かべてしまい、ゆかりは三度目のため息を
つきつつ二人に聞こえないよう小声で現実逃避する。

「誰かこの二人を何とかしてくれませんか……」

と、そんな誰かに聞こえたかも怪しい独り言に対して、ドン！ と一つの影が廊下へ
と躍り出た。

「ふーっはっはっは！ そういう事なら、ここはどうやらウチの出番みたいやなあ！」

突如廊下に響き渡ったやたら胡散臭さの漂うエセ関西弁に、争っていた二人の、結月
ゆかりの、そしてその場にいた全員の視線が階段付近に立つ一人の姿に集まる。

正妻戦争、開幕

そこに立っていたのは先ほど廊下で男子学生と話をしていた悪友であり――

「あなたは……『非公式』新聞部の琴葉茜さん？」

「だーっ！ 非公式のどこを強調せんでもええつちゆうねん！」

バシン！ と、茜は相手が生徒会役員であることも気にせずゆかりに突っ込みを入れる。

「あー！ 何ゆかりお姉ちゃん叩いてるんですか！」

「新聞部か何だか知らないけど、ゆかりんに手を出すなら相手するよ？」

突っ込まれた結月ゆかりよりも先に反応する二人にひらひらと手を振り、飄々とした様子で茜は続ける。

「落ち着きいや、これくらいコミュニケーションの一部やん？ そんなに怒らんでも

……あーなるほど、自分ら自分が愛しのゆかりさんに触れんからウチに妬いとるんやな

？ こーんな風に」

「きや?!」

そうわざとらしく言うが早いかゆかりに後ろからじゃれて抱き着く茜に、二人の髪が

怒りでザワリと揺れる。

「マキ先輩、今だけは協力しませんか？ ああ赤いのにちよつとわからせてあげましょう」

「そうだねあかりさん、今だけは君に同意するよ」

そう言つてシヤレになつてない怒りを向けられた茜はだが、やつぱりおちやらけたように「おー怖いわー」と言いながらぱつと手を離して結月ゆかりの後ろに隠れた。

「ちよ、ちよつと二人とも落ち着いて」

盾にされたゆかりが彼女を突き出すわけにもいかず二人を押しとどめている間に、茜はひらりと更に後ろへ飛び下がって二人を更に煽るように、にひつと啜う。

「まあ、否定できずにそうやって怒るあたりで答えは聞けたようなもんやけどな」

その言葉にいよいよ怒りをあらわにする二人だったが、続く彼女の言葉はそんな怒りをも忘れさせるほど思いもよらないものだった。

「まーまー落ち着きいな二人とも、ウチは別に煽つとる訳や無くて、以前みたいにゆかりさんと気軽に会えるよう、二人に協力したいだけやがな」

思つていもないなかつた提案に二人はピタリと動きを止める。

「どういふことですか？」

興味を持った様子の二人に茜は楽しそうにうんうんと頷いてから、ゆつくりと話し始

める。

「聞いてもらえるみたいで何より何より。ま、簡単に言うことやな、今お二人さんが結月つちちゃんと会えない主な原因は二人の間で色々取り決めがあるからやる？ お互い出し抜かんように」

当然のように頷く二人と「え、何ですかそれ知らないんですけど?!」と今更ながら最近二人に会うことができなかった理由を知って驚きを隠せないゆかり。

「そしてその取り決めがあるんは、どっちが結月つちちゃんにとつての一番か決まってないから……出し抜かれて相手が一番になって欲しい無いから。つまり、見方を変えればどっちが一番か決めてしまえば、この問題は解決するとは思わんか？」

「ちよ、ちよつと何勝手なこと言ってるんですか!? 二人とも私にとって大切な存在で、そんな優劣をつけるような真似は……!」

ゆかりが抗議するものの、二人は茜の言葉に興味を引かれているようで勝手に話を広げ始める。

「まあ確かに、僕としてはあかりさんがちゃんと控えるべき時にはちゃんとゆかりにくつつくの控えてくれれば、別にゆかりんに近づくなんてことは思っていないし、あかりさんが自分の立場を認識するのにいいアイデアだと思っただけ」

「その言葉そっくりお返ししますよマキ先輩。確かに今までそこがはつきりとしていな

かったから揉めていたのは事実、ちやんとマキ先輩が従妹水入らずの時間を守ってくれれば、私だって文句がある訳じゃありませんから」

「ちよ、ちよつと二人とも——?!」

「ここに集まつとる皆も何だかんだ言つて見守つとるつちゆう事は、毎日のようにこうして争っている二人、どっちが意中の相手を射止められるか興味あるんとちやうか?」

一人止めようとするゆかりに対して、茜は周りの生徒たちすらも巻き込み始める。

「まあ弦巻さんがあそこまで入れ込むなんて初めて見るし……」 「ここまで散々学園巻き込んでるんだから確かになあ……」

元々精華学園がそこその進学校ということもあり、大した問題もイベントも起こらずに来た中で、こうして学園中で交わされてきた二人の争いは一つのイベントのようになってしまっていた為だろう。

ざわざわとそんな意見が伝播していき、完全に場の空気は決まってしまった。

「せやろせやろ? ほなお二人さんは乗り気みたいやし、この勝負うちら新聞部が預からせてもらつて、皆には号外発行して結果を伝えさせてもらうで! お二人さんも、皆もええよな?」

「勿論!」

「私も異議なし!」

二人の同意に続いて生徒たちの中からも「おう」や「さんせい」という声、支持を示す拍手が聞こえてくる。

「おっしや！ それならここに二人のうちどつちが結月ゆかり書記にふさわしいか……弦巻マキと継星あかり両名による『正妻戦争』の開始を宣言するツ!!」

「おおー!! と琴葉茜による巧みなマイクパフォーマンス（いつの間にか握っていた）で廊下のボルテージは最高潮に達する。……約一名を除いて。

「わ、私は認めませんからねツ！ こんな形で人間関係に優劣をつけようだなんて！ それに第一そのせ、正妻戦争とかいう名前は何なんですか!?!」

少し涙目になりつつ講義をするゆかりに対して茜は、まるで長年の友人がするように肩へと手をかけて

「まーまー落ち着きいな結月っちゃん。今回のイベントには自分の協力も不可欠なんやから」

「誰が結月っちゃんですか！ それに私はこんな学園を乱すようなことに協力する気はありませんからね！」

「まあまあ、協力言うても難しい話とちやう。今回の戦いはマキやんときずつち、どつちが結月っちゃんにふさわしいかつちゆう勝負や。そしたらその勝負内容はウチらが勝手に決めても二人とも納得できんやろ？ やからせやな……結月っちゃんがどうい

人に憧れるかとか、どんな風な人をカッコいいと思うかとか、一緒にいたい人の条件とか聞かせてくれるだけでいいんや」

その言葉に二人も興味津々といった感じで、ゆかりの顔を覗き込む。確かに勝負も大事であったが、彼女がどのような人を好むのかという情報は二人にとって垂涎ものだ。だが――

「今の話を聞いてそんな事教えるわけないでしょう!」

ゆかりはその要求を一蹴する。その理由の一つは、個人情報をこんな大勢が目にする前で話したくなんてないという人間として当然の感情であったが、同時にここで自分が言わなければ、二人が茜に躍らされて争うことを阻止できるのではという希望もあった。

「そうか、そらならしゃあないか……」

案の定トーンダウンした茜にゆかりが安堵しようとした時だった。彼女の顔がニヤリと歪む、それはまるでそうなることがあらかじめわかっていたかのように。

「そんなら葵―― おるかー?」

「そんな大声で呼ばなくても私ならここにいますよ、姉さん」

いつからそこにいたのだろう、結月ゆかりに肩を回す琴葉茜と逆サイドに彼女そっくりの、だが彼女の目が覚めるようなピンク色の髪とは真逆の、透き通るような青髪の女

生徒がそこに立っていた。

「きゃ!？」

「おう、わが妹ながら相変わらずの神出鬼没っぷりやな」

突如逆耳から聞こえた声にゆかりは驚きの悲鳴を上げ、同じく彼女の顔を覗き込んでいた二人もその存在に今まで気づかなかつたのか一歩引くが、茜はまるでいつものように平然としている。

「それで、結月ゆかりの好みについての調査はどうや?」

「勿論滞りなくここに」

現れた時から一切表情を変えずどこか眠たげな表情のまま、葵はブレザーの裏からスツとボイスレコーダーを取り出して、何の躊躇もなく再生ボタンを押す。

「——そういえばさ、ゆかりちゃんはどうな感じの人がタイプなの?」

「えー、何ですかいきなり?」

聞こえてきたのはやたらハイテンションな女子の声と結月ゆかりの声。

その最初のやり取りでゆかりは思い当たるところがあつたのか、慌てて葵からレコーダーを奪おうとするが、茜が彼女を拘束し、その間に残像が掻き消えるようにして葵は後ろへ逃れる。因みに味方の筈であるあかりとマキもこっそり彼女を止める側に回っていた。

無情にも音声レコーダーは会話を流し続ける。

「いやただのガールズトークみたいなのやっ？ ほら、ゆかりちゃん結構人気あるのに誰とも付き合わないなーって」

「そんな私が人気だなんて無いですよ。確かに話しかけてくる男子もいますけど、大抵はマキさん関連のお話ですし。それに、私にはまだそういうのはイメージができないですしね」

因みに本人は気づいてないが、彼女に話しかける大抵の男子は彼女目当てで話しかけている。ただ、誰よりも彼女にお熱な二人のせいでもともと情報収集することも能わず、やむを得ず共通の話題として弦巻マキの事を話に出しているだけだ。

「えー……つまんなーい」

「そんな事言われましても……」

「そうだ！ じゃあさじゃあさ、どういう感じの人がカッコいいとかあるの？」

「うーん、そうですねえ……あ。私、数学が苦手なので数学ができる人とかカッコいいと思いますよっ」

そこで葵が一時停止をかけ、阿吽の呼吸で茜が人差し指を立てて宣言する。

「という訳で結月ちゃんの好み一つ目は、数学ができる人や」

「いや、これはそういう話じゃないですよ！ これは——」

結月ゆかりは必死の抵抗を試みるがそんなこと聞こえているのかいないのか、もう既に二人は神妙な顔をして勝負について考え込んでいた。

「オツケーやな？　じゃあ続きいくでー」

そして容赦なくICレコーダーの一時停止が解除される。

「いやそういう事じゃなくってさー……じゃあほら、どういう人にあこがれるーとかは？」

「そうですね、私も料理はしますけどやっぱ毎日は大変なので、弁当を毎日作ってくる人たちはすごいと思うし憧れますね」

「だからそういうのじゃなくって——」とICレコーダーはまだ再生を続けているが、今度はそのままで茜が二本目の指を立てる。

「そして二つ目は弁当を作れる人や、本来毎日ってことやけどそれやと時間がかかるし、どっちが美味しい弁当を作ってこれるかかって勝負に変えさせてもらうつもりやけどな」

「まあ普段から作ってる方が美味しいものが作れるってことでもいいんじゃないかな？　僕はそれでいいよ」

「私も異存はありません」

今度もゆかりが何か反論していたがもはや二人の耳には届いておらず、それどころか勝手に勝負内容を決めている有様だ。

そしてICレコーダーの会話もいよいよ話題の核心へ踏み込んでいく。

「結局！ もしも彼氏にするならどうという人がいいのかって事よ！ さあ、どうなのさ?!」

勝負の話題に盛り上がっていた二人も、今だけは呼吸すらひそめて答えを待つ。

「うう……。そう、ですね……。やっぱり趣味が似ている人、でしょうか。私はゲームが好きなので、一緒に楽しめるような人がいいですかね」

それは一見すれば逃げる為に口をついたその場しのぎの答えであるようにも聞こえるが、実のところ彼女の本心に近い答えであることはゆかりの様子を見ていればすぐに分かった。

「……もう、好きにしてください……………」

なにせICから聞こえる、自分の声で語られた少し子供っぽいパートナーの理想像に、彼女は両の手で覆った顔を俯かせていたからだ。

そんなゆかりを無視して茜は三本目の指を立てる。

「三つ目はゲームがより好きな方、これも好きなら上手くなるまでやってると考えて、ゲームがうまい方っていう条件に変えるで。——って訳で！ 正妻戦争は数学、弁当、ゲームの三本勝負で決定や！」

おおー、と再び廊下が湧く。

「勝負期間は明日木曜日から三日間！　そして結果発表は日曜日、結月ちゃんに一緒にいて楽しかった、あるいはこれからも一緒にいてほしい相手に対して、このペアチケを-UAチケを使って遊園地に誘って貰う！」

茜はこの学校ではデートスポットとして定番である、近場の遊園地招待券を頭上にかざして宣言する。

それを聞いたあかりとマキは互いに目配せし、溢れる闘志をぶつけ合った。何せこの勝負、目の前にいる不倶戴天の敵との決着がつくばかりか、実質愛しの結月ゆかりとのデートもついてくるのだ。やる気にならないわけがない。

そんな二人の様子に茜の口元が満足げに弧を描く。

「まあこの勝負のスポンサーとして、後でお二人さんにはしっかりと色々と話聞かせて貰うけどな！　それじゃあウチは結月ちゃんと勝負内容について詰めるから、明日の勝負について詳しくは昼休みに伝えるで」

彼女はそういうと葵と一緒に、色々暴露されてまな板の上の鯉のようになった結月ゆかりの両脇を抱え、廊下の生徒たちと呼びかける。

「それから集まって貰うとる皆！　学園のアイドルたる弦巻マキと中等部に突如現れた新星継星あかり、二人による美人書記である結月ゆかり争奪戦の結果はウチら精華学園新聞部が徹底的に取材するんで、掲示板は要チェックやで！　それから今なら電子版も

絶賛公開中や、こっちは掲示板より早く月曜の零時に結果を公開するんで、是非とも『精華学園新聞部』で検索してみてやー！」

盛大に自分たちの宣伝をしながら、心ここにあらずなゆかりを引つ張つて廊下の奥へと赤青の双子は消えていく。

こうして結月ゆかりを巡った弦巻マキと継星あかり兩名のバトルは、学園全体の一番の関心ごとになってしまったのだった。

一戦目「弦巻マキは勉強がお嫌い

「うあー！ さっぱり分かんないんだけど!!」

結月ゆかり争奪戦の勝負が決まったその夜、自室で頭を捻っていたマキは叫びながらベッドにダイブした。

同時に投げ捨てられた分厚い数学の参考書がくるくると宙を舞い、彼女に続くようにして頭の上へと――

「あ痛あつ!？」

幸いにして角がぶつかるとは無かったものの。約一キロほどの重量はあろうかという本の直撃に視界を白黒させながら、弦巻マキは恨めし気に自分の横へと転がった参考書を睨み付けた。

自分が勉強嫌いだからだろうか、その厚みを見ていると気が遠くなりそうだったし、重さだつて一キロどころか十キロはありそうに見える。

「まあでもこの本全部が範囲って訳じゃないんだし……何よりゆかりちゃんの為だしもう少し頑張るかあ……」

寝転がったままではあったが参考書を再び開きながら、昼休みに新聞部から伝えられ

た勝負内容について思い返す。

——「明日の数学勝負、内容が決まりましたのでお伝えします」

「うわ!?!」　び、びっくりした……」

相変わらずどこかぼんやりとして眠そうな眼の青髪、確か琴葉葵と言っただろうか？　昼休みに教室を出るなり話しかけてきた彼女に危うく心臓が止まりかけたマキは、しっかりと勝負内容を聞くために少し待ってと彼女を手で制しながら息を整える。

「——それで、どういう勝負になったのさ？」

気づけば自分の周りには生徒や教室の級友達も息を潜めて勝負内容を聞こうと集中しているようで、あたりには妙な静粛さと緊張感が漂っていた。

「はい、勝負名『先生、私に優しく教えて〜ドキドキあのコ部屋で始まる恋のレッスン』です」

「は?..」

何だその本屋のちよつといかがわしいコーナーに置いてありそうなタイトルは、とマキは思わず脱力する。

というか周りで聞き耳を立てていた男子学生の中には思わずっこけている者まで

いた。

あまりにも案の定な反応にだが、やっぱり葬は表情を変えずに続ける。

「我が家の姉のネーミングセンスが壊滅的で誠に申し訳ありません。一応私の方からも『それはない、本当に姉さんが私の姉なのか疑わざるを得ない』と忠告したのですが、朝の時点でこの勝負名を決めていたと言つて聞かず……。次以降の勝負に関しては余計な名前を付けないようにときつく言いつけておきましたし、勝負内容に関しては全うなものかどうか今回ばかりは目をつぶっていただけと幸いです」

そう言いながらも相変わらずの無表情に近いが、眉がちよつとハの字に寄りそうにプルプルしているあたり、彼女も嫌なのだろう。出来る限りネーミングには突っ込まないようにしてマキは尋ねる。

「分かったよ。それで結局、明日の勝負はどういうものになるの?」

「お心遣いに感謝します。それで肝心の勝負内容ですが、来週数学の授業で小テストがありますよね?」

「えっ!? そんな話聞いてな……あー、そういえば前回の数学寝てたかも……」

「……まあ、あるんです。そこで、お二人には結月ゆかりさんに対してその小テスト範囲について教えて貰い、より分かりやすく教えることが出来た方が勝利となります」

「えーっと、因みにテストの範囲って……」

「いつも通り前回の小テスト以降の……ああ、世間一般には場合の数と呼ばれている範囲ですね」

これまでの会話でマキの頭の具合を察したのか、葵は言い直す。

「ああ、そういうえばそんな感じの範囲だったような……？」

確か、ややこしい二乗とかグラフとかが出てこなかったから最初はこれなら僕でも分かるかもと思つた覚えがある。まあ、なんとというかいつもの通り話を聞いてると眠くなってきて、結局分からなかったのだが。

ただ見方を変えればどうせ数学なんてどこの範囲でも結局そんなものだし、今回の勝負ではあの頭が痛くなつてくる数式群を見なくていいのだからとマキは楽観的に見方を変えて、葵に了承したと伝えたのだった。

——「あー……でもやっぱりわかんないー……」

先ほどページを開いてから五分とたたず、再び参考書をぼーいと放り投げながらマキはため息をついて、書きかけの新譜やギター誌の散らばる勉強机の一角に置かれたシヨートケーキをフォークで崩し、口に運ぶ。

「あー……やっぱり頭を使った後の甘いものは美味しいなー……」

そんな世の学業に励む学生たちを敵に回すような事を宣いながらしみじみとケーキ

を咀嚼するマキ。

因みにこのケーキは彼女が買ってきたものではなく彼女の父謹製の一品で、普段は彼の経営する喫茶店でもあつという間に売れ切ってしまう為、娘の彼女といえどもなかなか食べられない貴重な逸品だ。

その裏には、勉強方面に関しては半ばあきらめかけていた娘が人生で初めて自分の小遣いを削つてまで参考書を買ひ、勉強に励もうとしているということに思わず涙腺が緩みながらも、それを男親として何とか表に出さないように……だが何とか応援したい！ という父の気持ちが進められていたわけだが、それを弦巻マキが知ることはない。

だが、ケーキによる糖分補給が完全に無駄だったわけではないようで、ふと彼女の頭に一つの閃きが去来する。

「あれ？　そういえばあの子中学生だよ、まだこの範囲勉強してないんじゃない……？」

それだけではない、勝負内容が決まったのは今日の昼で勝負は明日の放課後、そういう間がある訳ではない。そこまで思い至った瞬間、彼女の生クリームが薄くついた唇がニヤリと弧を描く。

「そうか！　今回の勝負、言つてしまえば一夜漬け勝負なんだ……！」

あかりが優秀だという噂は聞いたことがあるが、そうは言つても相手は中学生、今回

の範囲はまだ習っていない筈だ。それに対してこっちは毎回定期考査を（赤点ギリギリとはいえ）一夜漬けで乗り越えてきている。

しかも今回買った参考書は本屋の店員に聞いて教えて貰った、有名なシリーズの一番難しいらしい赤くて厚い本だ。あまりの厚さに思わず本屋では覚えるのが大変そうと買うのを散々躊躇したが、これを覚えてしまえばどんな問題にも対応できる……と思う。

数学勝負と聞いた時には絶望しかなかったが、これなら何とかなるかもしれない。

「後はあの子がどれだけ一夜漬けでやってくるかってことだけど……」

考えて、あかりについて自分がほとんど知らないことに気づく。彼女が勉強できるという話だって、噂半分に聞いた情報と彼女の態度からそうだろうという半ば推定みたいなものでしかない。

とはいえあくまで弦巻マキにとって彼女は自分と結月ゆかりの間に突如割り込んできた邪魔者でしかなく、今まで彼女自身について知ろうとしたことが無かった為にそれも当然と言えば当然なのだが。

そこまで考えて、今はそんな事より目の前の勝負だと彼女は頭を振った。

見出した一筋の光明の下、視点を変えて再び参考書を開く。さっきまでのように理解しようとして解説を読むのではなく、いつものように答えを出すための丸暗記をするために。

「あの、マキさん……大丈夫ですか？」

「……？ ああ、うん大丈夫だよウブ……」

翌日の放課後、集合場所であるゆかりの家の前にやって来たマキの有様は酷いものだった。目元には黒々としたクマが浮かんでおり、何時もの底抜けに元気な様子は微塵も見えない。

何せ昨日の夜は貫徹するつもりだったのにうつかり三時を回ったあたりで寝落ちしてしまい、その遅れを取り戻すため、そして覚えた内容を忘れないようにするため授業中も教科書の下で参考書を広げていたのだ。

おかげで何とか全範囲の問題を一通りさらうことには成功しているが、その記憶もいつまでもつか分らない。さっさと勝負を始めたいマキだったが、そこにいつも通りのあかりが口をはさむ。

「あの……本当に大丈夫なんですかマキ先輩？ 何だったら勝負の日をずらしてもいいんですよ？」

それは勝負相手のあかりをしても不安になるほど憔悴した様子のマキを心配しての

言葉だったのだが、寝不足で判断力不足な彼女には余裕のある煽りにしか聞こえない。

「ふーん、随分とあかりさんは余裕みたいだけど、そっちこそ他人を心配してて大丈夫？

対して勉強してないみたいだけどそんなだと僕が勝たせてもらうよ？」

「なっ!?! 心配して損しました!! そっちがやる気なら別に今からで大丈夫です! 吠

え面かかせてやりますからさっさと始めましょう」

いつものように継星あかりとピリピリし始めようとしたところで、パンパンと手が打ち鳴らされる。

「二人とも落ち着いてください、お昼にメールで送ったようにあんまりそうやって勝負外で争うなら、この話無かったことにさせてもらいますからね? ……それにマキさん

とは久しぶりの、あかりちゃんとは初めての勉強会ですから楽しまないともつたいたくないですか?」

久しぶりの勉強会、そう言われた弦巻マキは今までの苦々しい表情を崩してにへらと口元を緩める。

今の今までいかにして継星あかりに勝つかという勝負のことばかりが頭を占めていて肝心の『結月ゆかりと勉強会をする』という所がおざなりになっていたのだった。

(確かに、ゆかりちゃんとの勉強会とか久しぶりだなあ)

勿論勝負を投げるつもりはないが、せっかくの機会だ。結月ゆかりの言う通り楽しま

なければ損でしかない。

視線を横に彷徨わせれば、どうやら継星あかりも心は同じようだ。どちらともなく頷いて休戦協定を結び、結月ゆかりに笑顔を向ける。

「まあ、ゆかりちゃんがそういうなら……ただ、勝負の結果だけははっきりさせて貰うよ」

「確かにお姉ちゃんの言う通りです！ ほら見てください、ドーナツ買ってきたのでこれを食べながら勉強しましょう!!」

そう言う継星あかりの両手をよく見れば一度家に帰ったのだからか学校指定のカバンはなく、両手にドーナツの箱が握られていた。というかそれ以外……たとえば勉強道具だのなんだのを持っているようにはどう頑張っても見えない。

「わあ、ありがとうあかりちゃん！ それじゃあ紅茶でも淹れて一緒に食べましょうか。マキさんはどうします？ 紅茶で大丈夫ですか？」

「え？ ああ、うん」

あまりに身軽すぎる勝負相手の様子に、マキは半ば上の空に相槌を打ちながら考え続ける。

（どう見ても筆記用具すら持っているようには見えないんだけど、もしかして勝負を諦めてる……？ いやでもそんな性格には見えないし……まさか、ドーナツで好感度を稼

いで有利になるように?)

楽しそうに家へと入っていく二人を追いながらそんな考えに至る。

(だってどう見ても夜遅くまで勉強しているようには見えないし、高校生の僕でも面倒だった範囲を中学生が出来なくてもおかしくはない。となるとやっぱりドーナツを使つた買取作戦……?)

普段ならまさかと冗談で終わるようなその考えはだが、今の睡眠不足で思考力ガタ落ちのマキにとつては説得力のある内容のように思われた。

(それならこの勝負、貰つた!)

ニイツと二人の背後で勝利を確信した笑みを浮かべて拳を握りしめる。なぜならこの勝負を判定するゆかりは勝負ごとに関してもフェアで、そういつた不正行為を嫌っているからだ。

ゲーム、特に対戦系のを好む結月ゆかりにとつてチートや改造と言つた不正行為は最も忌むべき行為らしい。

正直ゲームといえは音ゲーやRPGなど、一人で楽しむものだというマキにとつてはあまりイメージ出来ない話題ではあつたが、これまで彼女に何度もそのことに対する愚痴を聞かされてきた身として間違いないと断言できる。

にもかかわらずあかりがドーナツ賄賂なんて手を使つてきたということは……

(そんなことも知らないなんて、従姉妹失格じゃないかな?)

勝利への確信に加え、あかりに対する優越感に今までの疲れも忘れて満面の笑みを浮かべながら、マキは結月家の玄関をくぐる。

尤も、すぐにこの勝負が楽なものではないということを知ることになるのだが……。

一戦目 偽装中学生あかり

「だから円形に並べるときには——……えっと、並べるものの個数から一引いた数から一までを順に掛けていけば出来る……ハズ」

「……マキちゃん、本当にそれあつてますか？」

「待つて、今確認して……うん、あつてる」

自信なさげに教えるマキに対してゆかりが不安気に尋ね、マキはそのたび参考書を開いて確認する。

さつきからそんな光景が繰り返されてもうどれくらいになるだろうか、楕円形のテーブルの上にノートや筆記具と一緒に並べられたアイステイの氷が溶ける頃、マキの頭は知恵熱で沸騰しそうになっていた。

(説明するのつてこんなに難しいんだ……)

氷のせいでキンキンに冷えた紅茶を一息におおつて脳を冷やし、頭を押さえる。

何時ものテスト勉強ならとにかく覚えて、後は覚えている範囲で答えを書いて——それだけでも大変だと思つていたが、教えるというのは難易度が違う。

合つてるか分からないけど、なんとなく見たことがある問題になんとか覚えてる

式を入れて、といういつもの方法では説明にならない。

一々問題の文章をちゃんと読み、それが参考書のどの問題にあたるのか結び付けて、その解き方を思い出し——とそのプロセスを考えるだけでもすでに頭が痛い。

しかも——

「因みに何で一引いた数を順に掛けるのかつて分かります？ 何となく覚えてるだけだ

とこの次にある数珠順列？ とかいうのと解き方が混じりそうじゃないですか」

「え……いや、それは……ごめん、わかんない……」

そう、先ほどからゆかりの質問に対して何一つ答えられていないのだ。

正直自分だって丸暗記だからどうしてそうなるのかなんてものは理解していない訳で、理解していないものを説明できるわけがなかった。

ゆかりは「そうですか、分からないなら仕方ないですよね」とカバーしてくれようとしているが、それが逆に申し訳ない。

(それにしても——)

ため息をつきたくなるほどどかしい現状から逃げるようにして、あかりの方を横目で見る。

彼女は先ほどから一言もしゃべらずにこちらの様子を興味深げに見ながら、もしゆもしゆとオールドファッションを口に運んでばかりだった。

買ってきたドーナツ二箱のうち一箱はまるつと彼女自身のものらしい。確かに自分も甘いものは好きだが、彼女に次々と食べられていくドーナツ達を見ているとそれだけで胸焼けしそうになるペースだ。

だが、体系に見合わず健康家だった事以上に意外だったのは、あかりが簡単なところで我先にと割り込んで教えようとしなかったことである。

教え始める前までは、あまり勉強していなさそうな彼女が唯一ポイントを稼げそうな最初の簡単なところを譲って、後の難しい問題を自分が解説してゆかりから「凄い！」となるつもりだったのだが、目の前の少女は座るなりドーナツにかじりつくばかりで一切説明しようという気が感じられない。

尤も自分の力ではその計画は不可能だというのは今まで散々思い知ってきたわけなので、簡単などころを自分が解説出来（……たと思いたい）てよかったといえよよかったのだが、このままではワンサイドゲームというか不戦勝のようでなんだか勝った気がしない。

こんなことなら交互に教えていく形にでもすればよかっただろうか、とも考えるが今更だ。ならばせめて答えられないだろうとは思いますが、一応彼女も参加させようとあかりに水を向ける。

「そういうえば、あかりさんは今の所説明できたりする？」

しかし、彼女の言葉は意外なものだった。

「なるほど、そこを説明するには異なる n 個のものを並べる場合 n から一まで順に掛けるという所の原理を理解している必要がありますけどそこはオーケーですか？」

「私はそこは大丈夫ですね」

「え？ それは……そうなるからそうなんじゃないの？」

つい動揺して自分の理解度の低さをあらわにしてしまった事に、弱点をさらけ出してしまったことに、やらかしたと後悔する。

だが、あかりはいつものようにそこを突いてくるでも勝ち誇ったようなそぶりを見せる訳でもなく「じゃあそこから説明しますね」と目を輝かせて楽しそうな笑顔を浮かべる。

「じゃあ、たとえばこの五つのミニドーナツをマキ先輩が食べるとします。さあ、どれから食べますか？」

そういつて彼女はドーナツの箱から五種類の球状ドーナツが入った紙皿を取り出した。

「えつと、じゃあこの黄色いやつがついたのかな」

思わぬ展開と、それ以上に初めて自分に向けられるあかりの表情に少し戸惑いながら、マキは深く考えずにそのうちの一つを指さす。

あかりはそれをピックにさして、同じく箱から取り出した紙ナプキンの広げてその上に乗せて

「じゃあ、今マキ先輩は何個のドーナツからこの一個を選びました？」

「そりゃ五つだよ」

「そう、つまり今マキ先輩は最初に食べるドーナツを五つから選んだわけです」

馬鹿にしたように当り前な質問に少しムツとして答えるが、彼女はそんな事には気づいてか気づかずか楽しそうにそういつて先ほど置いたドーナツの下に『5』と書く。

「じゃあ、次はどれ食べます？」

釈然としないまま、残り四つから適当なものを一つ指さすと、彼女は再びそれをピックで刺して先ほどのドーナツの隣に置いた。

「今回は四つから一つ選んだよね」

どうせ同じ質問が来るのだろうと先手を打って答え、新しいドーナツの下に『4』と自分で書く。

「そうですそうです！ さて、今マキ先輩は一つ目を五つの内から一つ選んで、二つ目を四つの中から一つ選んだわけですが、これは言い換えると二十通りの中から一つ食べ方を選んだわけです」

「ん？ ……ああ、そっか」

一瞬五と四を足して九なんて考えてしまったが、最初の五つで他の物を選んだとしてもやっぱり二つ目は四つから選ぶことになるのだから、最初の選択肢五つに対してそれぞれ四つの選択肢を掛けて二十通りだ。

「そこが分かるなら後は簡単です、じゃあ次三つめは何個から選んでここまでの選び方は何通りですか？」

適当なドーナツをさらに選ぶとあかりが『3』と書き、それに遅れないようその下に式を書いて計算する。

「……六十通り」

「オーケーです、そして四つ目と五つ目も同じようにやっていくと……」

「待つて待つて！ 2、1で……百二十通り、百二十通りか」

ドーナツ表を完成させて改めて全体図を見たところで思いついたことを口にする。

「要はn個のものを並べるときに順に掛けるのって、一個一個をこーやって選んで並べていく過程を式で書いたらそうなるって事？」

「ばつちりです！ なんだ、マキ先輩分かってるじゃないですか！」

「え？ そうかな？」

勉強に関して生まれて初めて褒められたマキは相手があかりであることも忘れて思わず相好を崩す。

「さて、では改めてなぜ円形に並べたときに並べた個数で割るかって話ですが……」

ドーナツ箱からもう一つミニドーナツの入った船を取り出してあかりは別の紙ナプキン上へ徐にドーナツを並べ始める。その並び順は、丁度先ほどマキが並べた順のひとつ目を二つ目に、二つ目を三つ目に……そして五つ目をひとつ目にとひとつづつずらした順番であった。

「さて、この二つが違う並び順つてのは見ればわかると思います。でも、この最初と最後をつなげて円順にするとすね……さあどうですか?」

「一つずれてますけど、これって回転させたら同じものつてことですよね?」

ゆかりの確認に頷くあかり。

「こんな風に直線状に並べたものを一つずらしても円にすると同じものになる訳ですけれど……。ではマキ先輩、同じようにずらしていつて直線状に並べたとき回転させて同じものになる並び方はどれだけあります?」

突然の指名に教室で当てられた時を思い出して動揺してしまい思考が空回りする。

「えっと、今みたいにならしたのが同じになるからもう一つずらしても同じで、さらにもう一回ずらしても同じだから……」

「マキちゃん、何回ずらしてつて考えるより最初の並びの何個目からスタートつて考えたらいいんじゃないでしょうか?」

「ああ、そっか！　じゃあえっと……………並んでる個数と同じ五つで合ってるよね？」
「そうですそうです！　そして円形に並べたときの解き方っていうのはまさに、今やったことをそのままにしたわけです。言い換えれば一回直線に並べてからそれを円にする、その時今マキ先輩が答えてくれたように、並んでいる個数分同じ円になつてしまふ並びがあるのでその重複を無くすために割っている、と。この説明で伝わりますか？」

マキはぼんやりとした記憶でしかなかった式が、頭の中でパズルのピースがはまるように収まるのを感じ、感嘆のため息を漏らした。

「あー、そういうことだったんだ……………」

「なるほど……………でも同じものを含む場合は単純に割らないですよね、あれってどうやればいいんでしょうか？」

「あ、その前に何だっけ……………ブレスレット？　あれを2で割るのってどうしてか説明できてるっ。」

「ちよ、ちよつと！　二人同時に訊かれても答えられませんから！　えーつと順番的に今のとつながら強いマキ先輩のから説明していきますけど……………」

年上二人組は相手が中学生だということも忘れてその後も質問を重ね、それがひと段落したときには既に初夏の空もすっかり茜色に染まっていた。

「あかりちゃんありがとう。お陰で疑問だったところは大体解決できたと思う」

「おねえちゃん役の役に立てたなら良かったです。分からないところがあつたらSNSでいいんでいつでも聞いてくださいね！ あ、何だったらまたこうやって勉強会でもいいんですよ！」

結月ゆかりにお礼を言われ、尻尾が生えていたならきつとブンブン振っているだろう喜びようなあかりに対し、マキは浮かない表情だ。

「あ、勿論マキさんもありがとう——」

「いや、いいんだゆかりん。今日僕はお礼を言われるような事は出来てなかったし……」
あかりの説明と比べれば自分の説明なんてただ参考書を中途半端に暗記しただけだし、それに途中からはゆかりの為の勉強会だということも忘れ、勝手に自分の気になったことを質問してばかりだったし、更には……

「中学生のあかりさんだけじゃなく、ゆかりんに教えるどころか逆に教えられることまであったし……」

そう、あろうことかあかりの説明を先に理解したゆかりに教えられる場面も何度かあ

り、そのせいで彼女はすっかり意気消沈していた。

「あー、でもあかりちゃんんは普段からクラスメイトに勉強を教えてるし、教えなれてたつてのも大きいんじゃないですか？」

「え？ そんなことしてるの？」

初耳な情報に弦巻マキが紺星あかりのほうを見ると、彼女は「大したことはしてませんけどね」と頬を掻きながら答える。

「最初は授業後にちよつと隣の席の人に聞かれるくらいだったんですけどね……その人が噂好きだったせいでいろんな人から質問されるようになって、それだったらいつそ纏めて教えちやおうと放課後に図書館でちよつと……」

ああ、本当にゆかりんを待つために放課後図書館で時間をつぶしてたんじゃないかって、そんなことをしていたのかと、彼女の事も大して知らないのに思い込みで言ってしまう。た先日の言葉をマキは後悔する。

「あー、あかりさんごめん！ 昨日は図書館で時間つぶして待ち伏せしているなんて適当なこと言つて」

謝られた紺星あかりは一瞬何のことか分かっていないようだったが、少ししてちよつと気まずそうに

「いえ、まあ……そういう下心がゼロって訳でも無かったですし、別にそんな謝られるこ

とはないんですが……。それに謝るといえば私のほうが、ちよつとですね……。実は今回の勝負、私にとつてあまりに有利というか……。その、ズルしてるといいうかですね……」

「???」

疑問符を浮かべる二人に対して彼女はほつりほつりと言葉を紡ぐ。

「実は私、アメリカで一応大学を出てまして……」

さらつとあかりが言つてのけた衝撃の事実に、二人は身を乗り出して詰め寄る。

「え!!?」じゃあメールに書いてた『学校がキリいいところなので日本に帰ります……』つてあつたあれつて大学卒業してたつて事だつたんですか!?!」

「はあ!?!」じゃあなんで中学校なんて通つてんのさ!?!」

至極尤もな弦巻マキの質問に、継星あかりは気まずそうに人差し指を突き合わせながら小声で

「その……だつて、ゆかりお姉ちゃんと一緒にの学校生活を送りたかつたんだもん……」

「ええー……」

あまりにあまちな理由に結月ゆかりは頭を抱えるが、弦巻マキはきつと自分でも同じようにしていただろうと頷いた。

「でも、だとしたら授業とか退屈じゃありません? もうとつくに分かつている所をやっているんですよね?」

「数学とか理科とかは確かに今までやったところですけど、国語とかはそもそも言語が違って……ほら、古典なんか言語の変遷が垣間見れて楽しいですし、歴史は日本と向こうのを対比出来て面白いですよ？」

「じゅ、授業が面白い……？」

カルチャーショックな発言にしばしマキが絶句していると、あたりは再度気まずげに口を開く。

「ともかく、そういう訳で今回の勝負フェアなものとは言い難いですしマキ先輩が納得できないって言うなら——」

だがそれ以上あかりが言葉をつづける前に、正気を取り戻したマキが手で制した。

「いや、それを言うなら僕だって本当は授業でやったところなんだからフェアでしょ。その……僕が教えれなかったのは僕自身があまり勉強できないってだけで。だから今回は明らかにあかりさんの勝ちだよ」

その言葉に「まあ確かにどっちが教えるのが上手かったかと言われれば……」とゆかりも言外に同意する。

マキが納得していて今回の審判であるゆかりもそういう以上、あかりも結果に関して「わかりました」とそれ以上勝負結果について言うことはなかった。

「でもですね、一つ言うならマキさんは教えて全然勉強ができないって感じじゃない

んですけど」

「え？ あー、いいんだよ別にそんな慰めは……」

手をひらひらと振って気にしてないと伝えるマキだったが、あかりは至ってまじめな表情で続ける。

「いえ、別に慰めなんかではなくてですね。最初に具体的な状況さえ思い浮かべれば、あとの説明は多少抽象的でもちゃんと理解出来てましたし、質問するポイントも結構いいところをついていましたし、勉強が全くできないというより、苦手意識が強すぎて出来てないという感じがするんですよ」

「えー……そんなことはないと思うけどなあ。それに結局僕は一夜漬け以外の勉強法なんて知らないし……」

「それですよ！ 一夜漬け以外の勉強法を身に着ければ、だいぶ変わると思うんです」
「それじゃあ、これから三人で集まってまたこんな風に勉強会でもしませんか？」

そんなゆかりからの突拍子もない提案にあかりは間髪入れず賛意を示す。

「流石ゆかりお姉ちゃん！ いいアイデアじゃないですか！」

「いや、でも……それだったら僕が居ないほうがはかどるんじゃないかな？ ほら、さつきも言ってみたに僕がゆかりんに説明させちゃって、迷惑をかけるなんてことになる可能性もあるわけだし」

「それは違いますよ、説明するっていうのは説明する側にとつても勉強になりますから。……それとも何ですか、マキ先輩はゆかりお姉ちゃんのことをあきらめて私に譲ってくれる気になりましたか？」

まだ意気消沈気味なマキだったが、いつもみたいなあかりの挑発に段々調子を取り戻す。

「な!? そんな訳ないじゃん! いいよ、三人で勉強会やろう! その内二人でやらなかったことを事を後悔させてやるから! 先ず手始めに明日の勝負は絶対勝ってみせる!」

「ふふん、そうは行きませんよ! 今日に続いて明日も二連勝してお姉ちゃんが一番が私だつて認めさせてやります!」

マキに対抗してあかりも胸を張り、いつものような言い争いが始まるかと思われた所で、突如二人の間に静かな声が割って入った。

「どうやら今日の勝負は決まったみたいですね」

「わあ!?! あ、葵先輩?!」

「うわあ!?! な、なんでいるのさ!?!」

「ちよつと!?! どうやって私の家に入ったんですか!?!」

三者三様に上がる悲鳴を涼しい顔で聞き流しながら、いつの間にか三人の後ろ、ゆか

りのベッドの上で正座している葵は淡々と

「なぜいるのか——それはスポンサーとして結果を知るためと、新聞用の写真を撮るためです。それからどうやって入ったか——簡単な話、ゆかりさんの部屋の窓のカギが閉まってなかったからです。二階だからと言って鍵を閉めないのは防犯上の観点から危険だと忠告しておきます。お陰で侵入は楽でしたけど」

堂々とした不法侵入の告白に「一言声をかけてくれればちゃんと玄関の鍵を開けますから！」と抗議するゆかりを半ば無視しながら、葵は二人に向かって続ける。

「では、まず継星あかりさんの一勝ということで。それでは、明日の勝負について説明させていただきます」

二戦目―あかりの弁当は肉飯増し

「はあー…何でお姉ちゃん二人になれる時間を作れそうだったのに、自分からそのチャンスを潰しちやったかなあ……」

勉強会の帰り、近所のスーパーでカートを押しながらあかりはため息をつく。

考えているのは先ほどのマキとのやり取りで、わざわざ向こうのほうから今後の勉強会の参加を断って来たというのに、それを挑発するような形で参加させるようにしてしまったことだ。

「でもマキ先輩はそこそこ理解力があるっぽいし、それなのに一夜潰けしかしないで赤点ギリギリなのはもったいない気がするんですよ。一先ず今回の小テスト範囲はそこそこ理解してるはずなので、それで少しでも見方が変わってくれば……って！ あくまでマキ先輩はおねえちゃんのついでだから！ そう、ついで!!」

自分の悪い癖ではあるが、ついついゆかりより教える余地の多いマキの事を考えてしまっていることに気づいて自分に言い聞かせる。

「っていうか、何だったらマキ先輩は別で教えればよかったんじゃない……」

いつまでもぐちぐち考えていたせいか、今更そんなことまで思いつく始末。

だが、教えた相手の成長度合いに育成ゲーじみた楽しみを覚えるあかりにとつて、マキは現在値が低い伸びが大きい大きな非常に期待の持てる存在であることに違いはなく、ついあんな風に言ってしまったのだ。

……いや、それだけでなく自分だけ勉強で先行していることに引け目を感じていたというのも、あんなことを言ってしまった原因の一つかもしれない。

あかりだつて勝負が決まった時には「よし、一戦目は貰った」と心の中でガッツポーズをとつたし、ゆかりお姉ちゃんの為ならば手段は選ばないと確かに思つてはいた。

思つてはいたのだが、実際にマキとケンカではなくああやつて話してみても……ワンサイドゲームを決めるにはあまりにもマキは素直すぎたのだ。

まるで普段の確執など無かったかのように純粹な興味で質問してくるその姿に、つい自分も相手がマキ先輩であると、お姉ちゃんを巡つた宿敵であるという事を忘れてしまうほどに。

「あー！ もう!! もう少しマキ先輩が嫌な奴だつたらこんなもやもやした気分にならずにすんだのに！」

またそんな八つ当たりじみた愚痴をついてしまつてから、ハツとこれではいけないと考え直す。何せもう次の勝負は始まっているのだ。

パンパンと両頬を叩いて気合を入れる。

「よし！ 次の勝負こそ気持ちよく、バシツと勝つ！ そして私の方がゆかりお姉ちゃんにふさわしいことをマキ先輩に見せつけてやるんだから」

……なんて勢いよくこぶしを天に掲げたはいいものの、冷静になってみればここはスーパーの中。周囲を往く主婦の何事かという目に気づいて、あかりはさつき力をいれすぎたせいでヒリヒリする頬をさらに赤くしながら、そそくさと野菜売り場から精肉売り場へと逃げていった。

「…………ふう、それじゃあ改めて明日のお弁当だけど、どうしようかな……」

周りを見渡し、自分に注意を払う人間が居なくなつたことを確認して、あかりは葵に伝えられた勝負内容を思い出す。

——「明日の勝負はお弁当勝負となります。ルールは簡単、両者これだと思う弁当を作ってきてゆかりさんに食べて貰い、よりゆかりさんが美味しいと思つた弁当を作つた方の勝者です」

葵がしゃべっている途中、腰のベルトにつけられたトランシーバーから「葵ー！ 勝負名を忘れとるでー、ほら一緒に決めたやんか『ハートを掴むのは胃袋から！』嬉し恥

「ずかし愛妻弁当バ——」と胡散臭い関西弁が聞こえた気がしたが、彼女の表情は微動だにしていなかったしきつと混線か何かなんだろう。

現に隣で聞いていたマキもそのことには一切触れずに

「お弁当って見た目も大事だと思っけど、今回は味一本で勝負ってこと？」
などと質問しているし。

「そうです。確かに昨今弁当も美しさが求められる風潮があることは事実ですが、ゆかりさんの好みはこのようなんです」

そう言うが早い、葵はポシエットから昨日のICレコーダーを取り出して再生ボタンを押す。流れ始めたのはゆかりの声だ。

「…………どちらかといえば、料理は見た目より味だと思えますよ。見た目はあくまでおいしさを盛り上げるためのフレーバーですし、それに見た目だけよくて味がまいちだったらちよつとガツカリじゃないですか」

「…………ちよつと。この間録音した音声は消してくださいって言ったじゃないですか」
「ええ、ちゃんと消去しましたよ。この間のものは」

何だかゆかりと葵が口喧嘩を始めていたが、そんなものは（なるほどゆかりお姉ちゃんも私と同じで見た目より味派なんだな）と共通点を見つけて喜んでるあかりの耳には入っていないかった。

——「うん。やっぱりお姉ちゃんも味が大事って言ってたし……」

一通り先ほどのやり取りを思い出して、少し安心したようにあかりは頷く。

というのも勝負が決まった昨日、一戦目には自信があつた彼女はあらかじめ第二の勝負に備えて色々情報収集をしていたのだ。

しかし「お弁当」で画像検索をかけると出てくるのは色とりどりで見た目も美しい弁当ばかり、弁当の作り方を書いたホームページにも「食欲を掻き立てる色合いが」と書かれているではないか。

これにあかりは大いに頭を悩ませた。何せ向こうで弁当といえばピーナツバターとジャムのサンドイッチと洗っただけのレタスにサイコロチーズを入れたお手軽サラダ、あとは食後のフルーツが入っているだけというのが普通だったのだ。

そりゃあ確かに凝った弁当を持ってきている人がいなかったわけではなかったが、そんなのは絶滅危惧種並みの超少数派であり、日本の弁当も同じような感じだろうと思つていたあかりにとつてそれは大きな衝撃だった。

一応色合い入れる方法を調べなかつたわけではないが、お手軽な方法はミニトマトやらブロッコリーやらのあかりが嫌いな野菜を入れるというもので、あまり気乗りしな

かったのだ。

だが愛しのゆかりお姉ちゃんは味が大事だと、つまりそんなものは入れなくてもいいと言っていた。

「……つまり、美味しいおかずを中心にガツンといけばいいんだよね！」

確かに弁当に関しての自信は無いあたりだったが、それは料理が出来ないということではない。日本に来て以来一人暮らしだった彼女はお弁当こそ学食で済ましているものの、家でのご飯は完全自炊派である。むしろ料理に関しては自信があるといつてもいい。

「所詮弁当なんて、家でのご飯を外でも食べれるようにただ弁当箱に詰めただけだし、大丈夫大丈夫」

勝負の前に緊張しないようそう自分に言い聞かせるあかりだったが、だからと言ってマキの事を侮っているわけではない。確かにマキがどれだけ料理が出来るのかなんて知らないが、知らないからこそ軽く見積もってはいけないとあかりは思っていた。

それは油断をしないためという理由もあったが、それ以上に「人間は均等ではないが平等だ」と彼女が考えているからというのが大きく影響している。簡単に言えば何かが苦手ということはその分他の何かが得意であるという考え方であり、それをマキに当てはめるなら勉強と運動がダメな代わりに音楽が得意……苦手が二に対して得意が一。

ならば他の何かが、それこそ料理が得意な可能性もある訳だ。

「だからマキ先輩が料理は得意で私より上手だと仮定するなら、何か差をつけるための手を考えないと……」

そう頭をひねるあかりの目にふと止まったのは、加工肉コーナーのハムに書かれた宣伝文句。『朝食をしっかりと食べて、朝から元気』

別にとりわけ目立つわけでもないポップだったが、そのワードにあかりは対戦相手の弱点を思い出す。

「そうだよ！ マキ先輩は朝がすっごくい苦手じゃんか！」

それはつまり朝起きて作らなければいけない弁当に対して多くの時間が割けないということで――

「――いろんなものを作る時間的余裕は無い筈。だったらこっちは種類を増やして美味しいものを盛りだくさんで差をつければ……」

例えばメインのおかずを一品ではなく二品にして。

そう思いついた瞬間、あかりの唇がニヤリと持ち上げられる。

「むふっ……ふへっ、へへへへ……」

「ママー、あのお姉ちゃん何か変な笑い方してる……」

「しっ！ 聞こえたらどうするの!? ほら、行きますよ」

隣を通り過ぎた親子からの痛々しい目など、勝利を妄想し自分の世界に入り込んでしまったあかりは気づかず、陳列棚に並んだお肉のパックに手を伸ばす。

「メインディッシュはハンバーグにしようか唐揚げにしようか迷ってたけど、どっちも作るんならそんなことで悩む必要もなくなるし一石二鳥だよね！」

あかりは上機嫌で一キロ超えの鶏肉のパックに続いて一番大きいミンチのパックをかごに入れた。だが、流石にこれだけではいりどりを気にしないとはいえあまりに茶色過ぎる気がする。

「うーん、何か野菜以外でいい感じの色したおかずは……」

少し考えて、さつき調べた弁当の画像には大抵黄色い卵焼きが入っていたことを思い出す。

「卵焼き……作ったことはないけど、スクランブルエッグを崩さずに丸めるだけだよね？ それなら簡単に作れるんじゃないかな」

一応さつとスマホのレシピ動画を調べてみるが、これなら自分でもできそうだ。

「これなら黄色が入るし……そうだ！ ハンバーグにケチャップをつければ赤色も入るしケチャップは野菜。よし、これなら完璧じゃないかな」

弁当の内容は決まった。ハンバーグも唐揚げもよく作っているから大丈夫、後は明日の朝しつかり起きてちよつと卵焼きを練習すれば——そう考えてあかりはグツとこぶ

しを胸の前で握りこむ。

「明日は絶対勝つ！　そしてマキ先輩に私がゆかりお姉ちゃんが一番だって教えてやるぞ！　おー！」

——と、気合を入れすぎたせいで再び衆目を集めてしまい、あかりはそそくさとカートを早足で、レジに向かって押していくのだった。

「本当に、あの双子姉妹は何でこんなものまで持つてるんですか……？」

翌日の昼休み、今までは珍しかった、だが最近はよく見せるようになったげんなりとした表情をしたゆかりは「づぼらや」のフグ看板を模したキーホルダーのついたカギを目の前でプラプラと揺らしていた。

それは高等部の屋上ドアの——昔は精華学園の屋上も生徒の出入りが自由だったらしいのだが、ゆかりやマキが中等部に入学した時点で既に、貯水塔の陰で喫煙していた生徒がいたせいで立ち入り禁止となってしまうていた場所の——カギである。

当然鍵も他の教室の鍵とは違うキーロッカーで厳重に保管され、点検の時を除いて開けられることが無いという噂がある程だったのだが……。

屋上のドアはあっさりと言鍵を飲み込み、ゆかりが手をひねると同時にカチリと軽快な音を立てて開いてしまった。

「ああ……そうですよ、やっぱり本物ですよ……。はは……」

「ゆかりおねえちゃん生徒会役員だし、校則違反なのを気にするのも分からなくはないけど、あの双子先輩方の言う通り今回は仕方ないんじゃないかな？」

鍵が本物だったことに乾ききった笑い声を上げながら肩を落とすゆかりを、あかりも苦笑しながら励ます。

今回の勝負にあたり茜から「マキやんときずつち、二人とも学内では有名人やからな、そんな二人の手作り弁当なんてそこら辺で開いたら学内の男どもがわらわら群がって来て味わうどころやなくなるでー」と渡されたのがこの鍵だったのだ。

「ああいえ、それもあるんですけどそれ以上にあの姉妹を止める方法がまるで思いつかなくて……」

「確かにそういわれると……」

ゆかりもあかりもどこか遠くを見るような目で押し黙る。どうやっても二人にはあの自由人姉妹を止める方法が想像できなかった。

いや正確に言うなら一時的には止められるだろう、例えば今ならこの鍵を押収すればそれでいい。だがそうしたら今度はまた思いもよらないような方法で再び鍵を手に入

れそう……むしろ悪化してマスターキーみたいなものを作ってしまうような気すらする。

そんな風に二人してしばし黄昏ていると、パタパタと駆けてくる足音が近づいて来る。意識を屋上へ続いている階段に向けたところで、息を切らせた弦巻マキが踊り場へと現れた。

「ごめん！……遅れてっ！　はあ、はあ……まだ、勝負始まつてないよね？」

「私たちもさつき来たばかりですし大丈夫ですよ。それより、そんなに息を切らせて大丈夫ですか？」

「良かった……息は、ちよつとしんどい、かな……」

息も切れ切れないマキの顔色は少し酸欠気味な蒼さが見える。運動が苦手な彼女なりに精一杯急いでやってきたのだろう。

「でも、寝過こして……不戦敗とか……ハア、それはちよつと……」

「あー、もう。しゃべらなくていいですから、しばらく静かにして落ち着いたらお茶飲みましょう？」

溶けかけのアイスみたく、べつたり壁に張り付くマキの背中をゆかりが摩る。苦しそうながらもちよつと嬉しそうな彼女に、あかりはお姉ちゃんに背中をさすってもらえるなんてとうらやましげな視線を向けながらも、ちらりとマキの手元に目をやった。

持っていたのは小さめの四角い蓋つきバスケット。予想していた通りの展開に、継星あかりは内心にやりとほくそ笑んだ。

(眠そうだしお弁当入れも小さいし、やつぱり思った通り朝しつかり作る時間はなかったっばいかな)

対する自分の弁当箱は風呂敷に包まれたお重のような見た目通りのずっしり感。重くて持ってくるのは少々手間だったが、今はその重さが自信になっているような気さえる。

その後マキが落ち着いたところで屋上の扉を開け、これもあの姉妹が用意したのだから海の家とかにありそうな白いプラスチックのテーブルとイス(おしやれなパラソル付き)に再度ゆかりが頭を抱えたところで、改めて昼ご飯が、そして二人にとっての勝負が始まった。

「……まあまあゆかりん、あの二人がこれを用意してくれたおかげでコンクリートの上に座らなくていいんだから、今はありがたく使わせてもらおうよ」

「……納得しかねるところもありますけど、確かにそうですね。それじゃあおなかも減っていることですし、どっちのお弁当から頂きましょうか？」

ようやく気持ちを切り替えたゆかりの言葉を皮切りに、あかりはマキへと鋭い視線を飛ばす。何せ空腹は一番の調味料だと普段から身をもつて理解している彼女は、マキも

同じように考えるだろうと予想し、どちらが先行を取るかという試合前の勝負が起ころものだと思っていたからだ。

しかしそんなあかりの視線に気づいたマキは、たははと笑ってそつと自分の包みを端に押しやる。

「僕のは小さいし、軽食みたいなものだから後でいいよ」

予想に反してあつさり先行を譲ってきたマキにたたらを踏んだあかりだったが、折角チャンスをつかんだ以上昨日の二の舞でそれを逃すつもりはない。

「じゃあ私の弁当からですね」

立ち上がってあかりがお重の入ってそうな包みを解くと、現れたのはドン！ドン！と積まれた二段の大きなタツパー。そのインパクト満点な見た目にゆかりもマキも苦笑気味だ。

「なんというか……包みの時点で分かってはいましたけど改めて見ると大きいですね」

「？ 三人分なんだしこんなものじゃないですか？」

「いやいや、三人分にしてもこれは多くない……？」

二人の言葉に疑問符を浮かべながらもあかりが上の段の蓋を開けると、そこに入っていたのはぎゅうぎゅう詰めに押し込まれた唐揚げと、それに圧迫されるようにして端に押し込められた少し茶色い卵焼きが姿を現す。

「……これはすごいですね」

「……うん、すごい」

控えめに言つて運動部……いや、力士の弁当かと言わんばかりの威容に、二人の苦笑が若干ひきつる。発する言葉もどこことなくぎこちない。

だが二人の変化にきづかないあかりは軽々と唐揚げまみれな二段目を横にずらして、徐に二段目の蓋に手をかける。

果たして二段目にはどんな光景が待ち構えているのかと緊張した面持ちで彼女の手を見つめる二人だったが、半分ほど蓋をはがしたところで真っ先に声を発したのは、他ならぬあかり自身であった。

「あっ！」

慌てたようにパタンと蓋を閉めてしまったあかりに二人は疑問符を浮かべる。

「どうしたんですか、あかりちゃん？」

「その、ちよつと見た目が……朝は大丈夫だったんですけど……」

「あー……持ってくるときに寄ってしまったんですね」

「うう……これは家に持って帰って一人で食べますよ……」

「ちよつと待った」

見た目より味の勝負とはいえこのタッパー内の惨状では……と二段目をあかりがし

まおうとしたところでその手を止めたのはマキだった。

「折角作つて来たのにそれでいいの？」

思わぬ勝負相手からの言葉にびっくりして一瞬言葉に詰まったあかりだったが、眉をハの字にへたらせながらも何とか笑みを浮かべる。

「仕方ないですよ。それに今日の夕食を作る手間が減つたと思えば、悪いことでもないですし」

「でも、ゆかりんの為につくつてきたんでしょ？」

それはそうなのだが。

あかりが葛藤していると、マキは今度はゆかりに話しかける。

「ゆかりん、もともと味で勝負つて話だったけど、改めて見た目は気にせず味だけで評価するつて約束してくれる？」

「！ ええ、勿論です」

マキの意図を理解したゆかりはにっこりとあかりにほほ笑みかけた。

「うー、でも……」

それでも尚割り切れないでいるあかりに、マキがこつそりと耳打ちしてくる。

「あかりちゃんは『ゆかりお姉ちゃん』の言葉が信じられないの？」

さすがにあかりもそこまで言われては大人しく引き下がれない。それに味に関して

は朝試食して間違いないと確かめている。

「わかりました。じゃあちよつと見た目が悪いですけど……」

遠慮がちに開かれた二段目には丸々太ったハンバーグとおにぎりが入っていた。そしてあかりが気にしていた見た目だが、なるほどハンバーグが大きすぎたために潰されて割れていたり、上につけられていたケチャップソースと肉汁が流れ出してしまい、それをおにぎりが吸って変色していた。

「なんだ、これくらいなら全然気にならないし大丈夫ですよ」

唇を横に張り詰めて戦々恐々とゆかりの反応を待っていたあかりは、その言葉にほうと息を吐いた。

「ほ、本当ですか？」

「本当ですって、それじゃあ頂きますね」

「あ、さつき三人分って言ってたし僕ももらっていいよね？」

「はい、どうぞどうぞ」

持ってきた割り箸を手渡したあかりは緊張した面持ちで、手を合わせてハンバーグを切り分ける二人の様子をまじまじと見つめる。

「……うん！ 美味しいですよあかりちゃん」

「本当ですか!? よかったー……」

味見していたとはいえ、それがゆかりお姉ちゃんの方に合うかは分からない。一先ず審判であるゆかりの反応が悪いものではなかったことに安堵しながら、ちらりとマキの様子を伺う。

「繋ぎが少なめからガツンとお肉の味を感じるね。ふわつとしたハンバーグが好きって人もいるけど僕もこういうタイプのほうが好きかな」

マキもうんうんと口角を上げて頷いているし反応は悪くなさそうだが、それよりも一口で自分のハンバーグがレシピより繋ぎを少なくしていることにはやはり警戒度を上げる。

（マキ先輩は料理上手いと想定していて正解だったかな。でも、唐揚げもすっかりカラツと揚がってたし大丈夫なはず……）

それに今更できることはもうないのだ。半ば開き直るようにしてあかりは唐揚げの入った一段目を手に取りゆかりのほうへ押し込めます。

「ささ、唐揚げもどうぞ」

ゆかりとマキは頷いて唐揚げに箸を伸ばし、一口かじった。だが、あかりの自信に反して二人の表情は微妙な感じだ。

「うーん……味は悪くないと思うんですけど、ちよつとべちゃつとしてるのが気になりますかね」

「え、嘘!？」

朝試食したときはカリッとジユワツといい感じに揚がっていた筈だ。ゆかりの思わぬ言葉にあかりは慌てて箸すら使わず唐揚げを一つつまんで口に放り込んだ。

「……ホントだ」

ゆかりお姉ちゃんか嘘をついているとは思っていなかったが、自分で口にするとなればど確かにべちやつとしている。

食べれないという程ではないのだが、自慢のご飯が進む箸のニンニク醤油のパンチがある味がベタつとした衣のせいで嫌なしつこさを感じてしまって、自分でも美味しいと評する気にはならなかった。

何がいけなかったんだろうか、という疑問と後悔の混じった感情に足元から飲み込まれていくようにあかりの表情が暗いものになる。

「じゃあ最後、卵焼き貰いますね」

そんなあかりの分かりやすい表情変化に気づいたのか、ゆかりはいそいそと卵焼きに箸を伸ばして口に運ぶ。

「あー、卵焼きは甘いやつなんです。やっぱり弁当のは甘いのに限ります」

ぱあ、と好物に嬉しそうな表情を浮かべるゆかりに引つ張られて、あかりも少し気をもち直す。

「そ、そうですか？ どつちにしようか迷ったけど他のおかずが塩っ気のあるやつだから甘いのにしてみました。でも、何回か作ったんだけどすぐ焦げて写真みたいなきれいな黄色にならなくて……」

「わかります、甘い卵焼きって難しいですよ。私も自分の好きなものだからきれいに作りたいと思うんですけど、いつともうまくいかないんですよ」

「そうだよね！ やっぱり焦がさずに作るのって難しいんだ……」

どうしてもきれいな色にならなくてずっと気がかりだった卵焼きだったが、ゆかりお姉ちゃんも気にしてないどころか難しいと認めているし、そこまで気にしなくても良かったのかもしれない。

まあ実のところ、焦がす焦がさない以前に卵焼きを卵焼きの形にすること自体が難しく、卵パック分ほど失敗して近所のコンビニに卵を買いに走ったのだが、それは言わなくてもいいだろう。

あかりが少しだけ安堵しているうちにゆかりは卵焼きを食べ終わり、あかりの弁当にもう他の種類のおかずが無いことを確認してから口を開いた。

「これであかりちゃんのお弁当のおかずは一通り食べましたし、おにぎりまで食べちゃったらおなか一杯になっちゃいそうなので、先にマキさんのお弁当に移っていいですか、あかりちゃん？」

「うん、大丈夫だよ」

その提案は、見た目を気にしなとは言ってくれたとはいえ、ケチャップや肉汁を吸ってしまったおにぎりは流石にマイナス評価だろうと思っていたあかりにとつても渡りに船で、二つ返事に同意する。

二戦目「マキさんは料理上手」

「オツケー、次は僕の番だね」

何気ない感じでマキがバスケットを開けると、テーブルの上に数個の何か入った手のひらサイズの白い紙袋と、あかりと同じような（ただしそのサイズは二回りほど小さかったが）タッパーを並べていく。

「え、これで全部……？　小さくないですか？」

小さなバスケットだとは分かっていたものの、それでもやっぱり出てきたものの少なさに、あかりはついバスケットをのぞき込んでもう何も入っていないことを確認してしまう。

「そうだね、今日はあかりちゃんも弁当を作ってくるって話だったから、食べ残しが出たり、おなか一杯になって美味しく食べれないなんてことがないように少し小さめに作って来たんだ」

マキの気遣いを聞いたあかりはそこまで考えを回す余裕があつたのか、と言葉に詰まる。自分は弁当を作るといっただけで精いっぱいだったのに。

そして当然、そこまで考えているマキの弁当が小さいからと言って、あかりが事前に

予想していたような品数の少ない手抜きの手抜き弁当ではなかった。

「わあ………！」

現にマキがタツパーの蓋を剥がした瞬間、真つ先に感嘆の声を上げてしまったのはあかりだった。

タツパーの中に広がっていたのはまるで小さなビュツフエ会場。それぞれの大きさは控えめながら、ベーコンで巻かれたアスパラや、ミニトマトの器に盛られたポテトサラダ、可愛らしく咲くウインナーの花、蜜たつぷりのサツマイモのレーズン煮……様々な料理が美しく詰められていたのだ。

「はい、あかりちゃん」

唯々見とれているあかりにマキはヒヨコのついたピックを差し出してくる。これで食べられるように小さ目なのだろうかとゆかりの方を確認すると、丁度ゆかりがピックに刺した竹輪のチーズと大葉巻きを口に運び、幸せそうに咀嚼している所だった。

大葉は刺身についているやつを前食べたら苦くて美味しくないと思っていたのだが、ゆかりお姉ちゃんがそんな表情をするなんてと、興味本位で同じものを口にする。

「！」

（全然大葉が苦くない……。それにあの独特の匂いもチーズのしつこさを上手く打ち消して、旨味だけを引き出してくれて、しかもそれが竹輪の旨味と凄くマッチしてる

……！)

「ついてもう一つ食べたくなるが、残念なことに残りは一つ恐らくマキ自身のものだろう。」

「マキさんのお弁当に毎回入ってるコレ、美味しいのでもう一つくらいあってもいいといつも思ってるんですけど、何か一つなのは理由があるんですか？」

「どうやら物足りなさを感じていたのはゆかりお姉ちゃんも同じであつたらしい、あかも答えを聞こうとマキの顔を覗き込む。」

「それは飽きが来ないように、かな。どんなに美味しいものでもおんなじのばっかり食べてたら飽きがくるじゃん。そうしたら次からは美味しく食べられなくなっちゃおうし、そんなのもつたいないじゃんか」

「それは食べ放題に行くといつも好きなものばかり取って、最後後悔するのが定番となつているあかりにとつて耳の痛い話だった。」

「密かに次からは気を付けようと決意を固めていたあかりだったが、突然ゆかりの方から聞こえた音に意識を現実へと戻される。」

「それはサクジュワツという軽やかで齒切れよく、同時にジューシーであることを主張する、美味しい揚げ物の音。」

「見れば、ゆかりの手にあつたのは自分のより小さな唐揚げだ。慌ててあかりも一つ唐

揚げをつまんで口にする。

(私のと全然違う……)

自分の朝食食べたときよりも衣が軽やかで、衣の油が少ない分鶏肉のおいしさをより感じる。

「マキ先輩！ これってどうやって作ったんですか?! 私唐揚げはどうすればこんな感じにできますか!」

気づけばかじりつくようにしてマキに詰め寄ってしまったっている自分がいた。

あかりの庄に若干気圧され、のけぞりながらもマキは丁寧に答えていく。

「ちよ、ちよつと落ち着いて。まず一つ聞きたいんだけどあかりちゃんもしかして、唐揚げを熱々のままお弁当箱に入れて、すぐ蓋を閉じちゃわなかった?」

「……? はい、確かそうしたと思いますけど……」

少し記憶をたどり、卵焼きに時間をかけてしまった為、唐揚げは最後揚げたてを入れてすぐに蓋を閉じ家を出たと思ひ出す。

「やつぱり。そうするとき、水蒸気がお弁当箱内に籠っちゃってお弁当全体が湿気ちゃうんだよね。だから揚げ物を入れるときはしっかりと粗熱を飛ばしてから入れるだけで大分変わると思うよ」

「そうだったんだ……。でも、そもそもマキ先輩のは私の揚げたてのよりもなんだかさ

クツとしてる気がするんですけど」

「ああそれは多分、僕のは揚げずに作ってるからだね」

「?」

何を言っているんだ唐揚げは揚げるから唐『揚げ』なのだろうと、怪訝な表情を浮かべるあかりにマキは続ける。

「衣をつけるところまでは普通の唐揚げと一緒になんだけど、そのあと油を少しだけ回しかけてオープンとかで焼くんだけだ。そうすれば衣が油をほとんど吸わないから軽い食感になるし、お弁当向きなんだよね。それに揚げるための油もたくさん使わなくていいし」

「そんな方法が……」

そういえばスーパードでも揚げない唐揚げ粉なんてものがあつたような気がする。あの時はなんだこのキワモノ商品と思っていたが、お弁当にはそっちの方が良かったのか。

同じものを作つたはずなのに、とその差に心は苦いものを覚えるあかりだったが、それでも舌が感じる美味さには逆らえない。

他のおかずたちも気になるところではあつたが、最初に出されてからずーっと気になつていた白い包み、その中にはどんな美味しいものが入っているのだろうか、手近

な一つに手を伸ばしてしまふ。

「これは——!」

白いワックス紙の中に入っていたのはサンドイッチ——だが、あかりのよく見知ったジャムとピーナツバターあのサンドイッチではない。

ハムとチーズと一緒に黄色いペーストが贅沢にぶ厚く挟まれたそれに食欲を刺激されるがまま、あかりは一思いにかぶりついた。

「ん—— おいしい! これなんのサンドイッチなんですか?」

ほのかな甘みとまったりとしたコクがパンによく合う。

「ああそれ? カボチャのサラダを挟んでみたんだけど、美味しいならよかった」

「かぼ……ちや……?」

これは是非とも自分で作れるようにならねばと、興奮気味に発された質問に対する答えは思いもよらないものだった。

「かぼちやつてアレですよ? ジャック・オ・ランタンの……」

「うん。つて言っても日本じゃあんまり見ないけどねー。そういえば、あかりちゃんつてアメリカにいたんでしょ? やっぱ向こうではハロウィンとかになるといっぱいあつたりするの?」

「まあ、そんな感じですね……」

というかあかりとしてはかつて食べたパンプキンスープが不味かったせいで、カボチャと言えば完全に飾るためだけの鑑賞物だと思っていたのだ。それがこんなにおいしいなんて……

まだゆかりはどつちが勝者か判断を下していないが、既にあかりは自分の敗北を察していた。

自分の弁当より品数が多くて、自分の弁当よりおいしそうな見た目で、自分と同じものを作っても敵わなくて、ついには自分の苦手なものまで美味しく食べさせられてしまった。

(マキ先輩のお弁当と比べたら私のなんか……)

晴れた初夏の空とは対照的にどんよりと心が曇っていく。

これ以上自分の稚拙な弁当を晒しても気が重たくなるばかりだと、二人に気づかれないようにそつとタッパーの端に手をかけて自分の蔭へと引つ張つていこうとした時。

「あ、あかりちゃん。これ貰ってもいいかな？」

「あ……」

マキの言葉は疑問形だったが、気落ちしたあかりがその問いを認識した時にはすでに、あかりのハンバークがひよいと持ちあげられているところだった。

タッパーから出されて陽光の下にさらされたせいで、さつきまで気にならなかった小さな焦げや、肉汁の溢れすぎでテカテカしているのが丸わかりだ。自分の稚拙さをさらされているようで、あかりの頬に羞恥の赤が浮かぶ。

（確かに私のなんてマキさんと比べたら……いや、比べ物にすらなりませんけど、別に晒さなくていいじゃないですか……!）

やり場のない憤りにあかりは俯いて手を握りしめた。

「はい、ゆかりんこれでちよつと食べてみて」

「え、でもこれって……」

「いいからいいから」

しかしマキはそんなあかりの様子に気づいていないのか、ゆかりに何か別のを手渡し
たらしい。俯いていてもそんな会話が聞こえてしまい、あかりは人間に瞼があるのに耳
を閉じる器官が無いことを呪った。

「あ……おいしいい!」

「でしょ! 一口食べて絶対これはこうした方が美味しさを引き出せるなって思ったんだ。それにこうすれば、あかりちゃんに気がして見た目も気にならないでしょ?」

何だかマキ先輩のお弁当を食べてるにしては会話が不自然だとあかりが思い始めたとき、横からスツとサンドイッチの包みが一つ視界の中に差し込まれる。

「ほら、あかりちゃんも食べてみて」

またこれを食べたらマキ先輩と自分の差を見せつけられることになるのだろう。だけれども断る気力も起きず、あかりはのろのろとした動きでサンドイッチを口に運び、はむりと一口。

「……美味しい」

悔しいけれどやっぱりマキが作ったものは美味しかった。

今までマキが出してきたのはさっぱりした料理が多かったが、これはBLTサンドに厚いハンバーガーが挟まれていた豪快なもので、アメリカでの行きつけだったステーキハウスのハンバーガーを思い出させるちよつと懐かしい味。

こんなものも作れるんだと、改めて叶わないなど、また気持ちが沈みかけた所でマキの嬉しそうな声が入った。

「でしょ？ あかりちゃんのハンバーガーはお肉のインパクトが強めだから、こうやってパンに挟んでも存在感がしっかりあるし、これならちよつと見た目が悪くても気にならないでしょ？」

「え……？」

あかりが改めて今自分が食べているサンドイッチを見ると、そこに挟まっていたのは確かに自分のハンバーガーだった。

あかりの顔から影が取れたのを確認して、マキはわざとらしく空を見上げるようにして話し始める。

「あー、なんかあかりちゃんさつきから暗い顔してたけどさ、僕はそんな悲観するような程料理下手って訳じゃないと思うよ」

「でも……唐揚げもべちゃべちゃだったし……」

「味つけはしっかり醤油とニンニクの効いてておかずになりそうだったじゃん。後はちゃんと冷まして入れることを知ってるか知ってないかってだけだよ」

「でも、それを知ってるか知ってないかが——」

「あーもう！ こんなこと言っちゃあれだけど、僕は料理で負けるわけにはいかないんだよ」

あかりがぐちぐちと続けようとしたところでマキはそれを遮り、ガシガシと金髪を乱暴に掻く。

「ほら、昨日あかりは大学卒業してるから勉強ができてアンフェアだって言ってるじゃんか。僕も料理に関してはそのとあんま変わらないんだよ」

「それってどういう……？」

「その、なんとというか……」

と、肝心なところで詰まったマキの言葉を続けたのはゆかりだった。

「マキさんはお父さんの喫茶店で料理を担当しているんですよ」
「へ？」

素つ頓狂な声を上げるあかりと、もう言われてしまったのなら仕方ないという風にため息をつくマキ。

「まあ、そういう事だから……」

「ちよちよ、ちよつと待ってください！ 何ですかそれ知りませんよ！」

「普段マキさんはそのこと隠してますからね」

そう何でもないことのようにゆかりは続ける。

「昔は特に隠してゐるってわけではなかったんですけど、あれは中学二年生くらいの時でしたかね。マキさんをやっかんてる人がマキさんが喫茶店で働いてるのを見つけて、先生に報告したんですよ。ほら、うちの学校って原則アルバイト禁止じゃないですか」

確かにそんな校則もあつたような気がする。

「それでマキさんも何というか……普段の授業態度がいいわけではないので先生もちよつと強情になつちやつて、マキさんのお父さんが学校に呼ばれたりと色々あつたんですよ」

その時のことを思い出したのか、ゆかりは苦笑しマキは再度ため息をついた。

「ま、そういう事。だからそもそも前提として、僕の方が圧倒的に有利な勝負だったんだ

よね。だからもし——」

「まさか、それを私が卑怯だとかフェアじゃないとか言うつもり？」

マキの言葉を掻つ攫つたあたりは、先ほどの前かがみに沈んでいたのから一転、椅子にどっぴかり倒れ込んで如何にも文句があるという風に腕を組んだ。

「そんなこと言ったら昨日の勝負も経験の差でフェアじゃないのにマキ先輩だけ私の勝利を認めて、逆に私は認めない卑怯者になるじゃないですか！」

「いや、別に僕はそんなつもりは……」

「いや、そうなるんです。同じ時間を私は勉強に、マキさんは音楽と料理に投入して、それで一回ずつ勝って負けた。それ以外の結果を私は認めないですからね！」

偉そうに自分の負けを認めるあかりに対して、ゆかりがおずおすと声をかける。

「あの、私はまだどっちが勝ってるか判定してないんですが……」

「何言ってるんですかゆかりお姉ちゃん。見た目、技術、知識、そして何より今回の主題である味。すべてにおいてマキさんの方が上だったじゃないですか。はつきり言つて私の完敗です！——ですから、私に料理を教えてくださいマキさん！」

椅子に寄りかかっていたのから一転、あたりはマキの方に向かって頭を下げる。

「ええ?! 何でそうなるのさ!？」

「決まっています！ ゆかりお姉ちゃんにマキ先輩以上のお弁当を作るため、そして私自

身の日々の食生活向上のためです！」

前者も大事だが、美味しいものが好きなあかりとしては後者も同じくらい大事な理由だ。だが、言われる方としてはいきなりそんなことを言われても困る訳で。

「そう言われてもな……僕のやり方は結構我流だしもつとちゃんとした人に教わった方が——」

「いーえ！ 私はマキ先輩に教わりたいんです。まあマキ先輩にそんな時間が無いって言うなら勿論無理は言いませんけど……」

「いや、まあ時間的にそんな無理って訳じゃないけどさ……」

「因みにその場合は、マキ先輩の喫茶店に入り浸って食べて技術を盗んでいくつもりなので」

「えー……」

あかりのあまりの熱意にちよつと引いているマキに対して、ゆかりが口添えをする。

「できればあかりちゃんに教えてあげてくれませんか？ 今あかりちゃん、一人暮らしてなんですよ」

「あれ、そうなんだ。てつきり両親と一緒に暮らしてるものかと……」

「お父さんもお母さんも向こうでの仕事で忙しそうですから、仕方ありません。それに向こうに居たときも大抵どこか飛び回ってたので、今と大して変わりはしなかったです

し」

「そうだったんだ……」

あかりとしては慣れ切ったことだし大して気にしていなかったのだが、それを聞いたマキは神妙な顔で少し考え込んで

「わかった。連休中とか忙しいときは無理だけど、時間があるときは週一くらいで教えるよ」

「本当ですか?! ありがとうございますごきますマキ先輩! じゃあ早速今週は……勝負があるから駄目だから、来週の何時にします?」

あかりはガシツとマキの手を両手で握りしめて目を輝かせる。

「ちよ、ちよつとあかりちゃん落ち着いて。来週の予定なんて覚えてないから確認しないと分かんないし、それにもしウチでやるなら厨房使っていいかお父さんに確認しないといけないから……」

そんな前のめりなあかりと、ちよつと後傾気味なマキの二人を楽しそうに眺めていたゆかりだったが、ふと何か思い出したように、両手を合わせてその後ろからウインクした顔をのぞかせる。

「良かったですね、あかりちゃん。……ところでマキさん。物は相談なんですけど、ついでに私にも一緒に教えてくれませんか」

「え、いきなりどうしたのさ？ そりやあ一人に教えるのも二人に教えるのもそこまで変わらないし、ゆかりん相手なら喜んで教えるけど——」

「すごくいいじゃないですか、それ！ それだったらゆかりお姉ちゃんにすぐ味の感想を聞けますし！ 逆にゆかりお姉ちゃんの手料理も食べられるって事ですよね?!」

「ゆかりんの手料理……。よしゆかりん！ ゆかりんも強制参加だからね！」

マキは突然のお願いに多少疑問を持ったようだったが、それを遮るようにはかき言ったゆかりの手料理というワードを前にして、些細な違和感などきれいさっぱり忘れてしまったらしく、そんな無茶苦茶なことを言い出していた。

「え、ええ〜?」

困惑するゆかりを置いてけぼりにして勝手に意気投合した二人が早速計画を立てようとした丁度その時、例の胡散臭い関西弁が割り込んだ。

「ちよつと待ちいな！ 盛り上がるんは結構やけど、勝負の結果ははつきりさせて貰わんと困るでー」

三人が声の方へ視線を向けると、琴葉茜がペンを持った手でビシイとこつちを指さしていた。

完全に勝負の事を忘れていたらしい二人はさつきまでの息ピッタリだったのから一転、距離をとって互いに不敵な笑みを浮かべる。

「マキ先輩……認めましよう今日の勝負は完敗だと。ですが、明日の勝負で私こそゆかりおねえちゃんが一番だって教えてあげます!」

「何言ってるのさ、勝負の流れに乗ってるのもゆかりんの一番も僕なんだから、明日はその事を思い知らせてあげるよ」

いつものように火花を散らし始める二人を見て茜はにやりと嗤う。

「そうや、その意気やで! ほら、ゆかりも今日の結果をバシッと言ったってな」

「え、あ……つと、あかりちゃんが負けを認めてますし、マキさんの勝ち……つてことでもいいんですよ?」

「本人らが納得しとるんやからもつとハッキリ言ったらんかい」

「ま、マキさんの勝ちです!」

茜に言われるがままゆかりがジャツジを下すと、茜は「うむ」と満足そうに頷いて

「ほな、これで勝負は一勝一敗、明日のゲーム勝負で運命が決する訳やけど、二人とも勝負内容を聞く準備はOKか?」

マキとあかりは瞳に闘志を灯したまま首肯する。

「おっしや、それなら発表するで勝負名——ふぐおっ!」

勿体付けて茜が続けようとしたその瞬間、彼女は突如泡を吹いてそのまま顔面から床にぶつ倒れた。そしてその後ろから手刀をさつきまで茜の首があつた高さに構えた葵

が現れる。

「ネーミングセンスのかけらもない勝負名をつけない、という約束も守れないバカ姉が失礼しました。不肖の姉に代わって、私が明日の勝負内容をお伝えします」

「いやそれどころじゃないですよね!? 茜さん、茜さん! 生きてます?!」

ゆかりの絶叫が屋上に響き渡った。

三戦目_ゲーセンでの決戦（前半戦）

「…………おはようございます、マキ先輩」

「！…………あかりさんか、おはよう」

昨日の勝負から一夜明け、場所は繁華街の一画にあるゲーセンの前。丁度同じタイミングでそこに現れた二人は互いの姿を認めると、いつものように競争心を燃やしてぶつきらぼうに挨拶を交わす。

二人の間に流れるピリピリとした空気に、ナンパだろうか何も知らず二人に声をかけようと緩んだ笑顔を浮かべていた男たちが、ギクシヤクしながら慌てて去っていく。

だが一昨昨日、一連のゆかり争奪戦が始まる前に比べると、二人とも敵愾心を剥き出しにするでもなければ、互いに煽るようなことも無い。

そんな変化は二人自身も感じているようだった。

「ゆかりんがいけない割に今日は大人しいじゃん」

「それはこっちのセリフですよマキ先輩」

互いにそこで押し黙って剣呑な視線を交わすが、以前のように睨みつけるようなことはしない。

と、ややも経たない内にあかりがはあ、とマキから視線を逸らせてため息をついた。

「な?! 何さ! 人の顔見てため息つくなんて流石に失礼じゃない?!」

「ああいえ、すいません。そういう事ではなくて」

「あ、ああうん。まあ、それならいいんだけど……」

意外にも素直に謝るあかりに氣勢をそがれたマキも、多少どもりながら気まずげにあまりから視線を逸らす。

二人してゲーセン前にあるファストフード店の白いタキシードのおじさんをぼんやり眺めながら、どちらとなく会話を続ける。

「二つ確認したいんですけど、マキ先輩は昨日料理教えてくれるって言ったじゃないですか? あれって勝負の結果に依らず、ですよね」

「まあ約束しちゃったからね。それに、ゆかりんも来るのにやめるって選択肢はないですよ」

「ですよね、ゆかりお姉ちゃんが来ますし。ということは同じく勉強会も、どっちが勝つてもやる訳じゃないですか」

「うっ、勉強会かあ……」

勉強と聞いて露骨にいやそうな顔をするマキに、あかりは呆れたように

「何ですか、来ないなら来ないで私とゆかり先輩の二人で勝手にやりますよ」

「いや、そりゃゆかりんがいるならいかなって選択肢はないけどさあ……」

ですよね、とあかりはマキがそう答えることが分かっていたというように天を仰ぐ。

「そうなるよ、勝負が終わった後もこうやって顔を合わせるが増えて……なんかその時までピリピリしてるのもちよつと馬鹿らしいというか、そんな状態で教えたり教えられたりするのまあ、と思っただけですよ」

「あー、なるほどね……」

言われてマキも納得する。確かに今まで互いに対抗意識を燃やしていたのは、どつちがゆかりと一緒に昼ご飯を食べるかとか、どつちがゆかりと休日でかけるかとか——二人のうちどちらかだけがゆかりのそばにいる想定で、その一枠をかけて争っている感じだった。

それが今やいつの間にか三人で定期的に集まる機会が出来ていて、気づかぬうちに二人が思っていた形とは違えど、目的を達成してやるような状態になっている。

マキはそう少し考えて、そっけないふりをしながらもあかりに手を差し出して——

「ま、まあそういう事なら少しくらいあかりさんと仲良くしてあげても——」

「だからと言ってゆかりお姉ちゃんが一番が私だつてことに変わりはないんですけどね」

「は？ ははは、冗談きついよあかりちゃん。ゆかりんの一番は僕に決まってるじゃん」

ものすごい勢いで手を引つ込める。

例えゆかりと一緒に過ごせる時間ができたといつてもやはり、共にゆかりの一番を自称する以上、相手が不倶戴天の敵なのに変わりはない。

互いに龍と虎の鬪志を背負うようにして再び二人が向き合い、まさに戦いがはじまろうとした丁度その時。

「遅くなつてすいません！ マキさん、あかりちゃん！」

ゲーセンの中からという思わぬ方向から聞こえたゆかりの声に、二人は慌てて仲たがいを止めて振り返る。

「大丈夫、全然待つてない（です）から！」

喧嘩しているところをゆかりに見せまいと焦っていたせいで息ピッタリになつてしまいなから、慌てて笑顔を浮かべる二人に、ゆかりは不審なものを感じて眉根を寄せる。

「……二人とも、私がいなくて喧嘩とかしてませんよね？ もしそんなことしてたら前も言いましたけど、今回の話はなかったということ、私も帰りますからね」

二人はぶんぶんと首を振る。

「大丈夫だよゆかりん！ 全然そんなことないって！」

「そうですそうです！ あ！ それより、お姉ちゃんはゲーセンで何してたんですか？」

「え？ 私ですか？」

誤魔化すためにあかりの口をついた質問に、狙い通りゆかりが気を取られたようで二人は安堵する。そんな二人の内心など知らずに、ゆかりは少し恥ずかしそうに頬を掻いた。

「その……ちよつと子供みたいで恥ずかしいですけど、マキさんと一緒にゲーセンに来るのは久しぶりで、あかりちゃんとは初めてじゃないですか。それで朝起きてからじつとしてられなくて……先に来てちよつとウォーミングアップをですね」

「あー、なるほど。それでそんなことなってる訳ね」

何かを得心したマキの視線の先をあかりが追うと、ゲーセンの中から幾人かがこちらを見ながら囁きあっていた。

「あの紫髪の何者なんだよ……五戦連続ノーダメ完全試合でKOって……」

「貴公『紫髪の悪魔』を知らないとは余所者か？　ここらで紫髪と言えば名の知られたバケモノよ……」

「待つのです。『紫の天使』たるゆかり様に悪魔などと何たる暴言、即座に悔い改めなさい」

「ふ……。貴公かの御仁と硬貨を交えたこともない軟弱者か。我ら上を目指す者にとつて、強さとはそれだけで尊敬の対象であり、誰も勝てぬ事を表した悪魔とは敬称なるぞ」
「それはいいけどよ、紫髪と知り合いつぽいけどもしかしてあの金髪と銀髪の子もヤ

ペー奴らなのかよ……!」

「ヒエツ……これはますますここの魔境化が進みますねえ……（絶望）」

聞こえてきた不穏な会話に、初めてゆかりとゲーセンに来たあかりはそつとマキに尋ねる。

「ゆかりお姉ちゃんって、もしかして有名人だったりしますか?」

「……まあ、有名といえば有名かな。この店のハイスコアを一人で独占したり、クレインゲームをしないでくれって店員さんに泣きつかれたり、対戦ゲーで無双したり……悪名って言った方がいいかも」

「ええ……外で何やってるんですかお姉ちゃんは……」

確かにあかりの幼いころの記憶でも、ゲームに関しては一切容赦がなく何度も泣かされた記憶はあるが、周囲の反応とマキの諦めたような表情を見るに、そのころから変わっていない……いやむしろ悪化しているようだった。

二人の会話が聞こえず、いきなり二人から「うわあ……」と言わんばかりのドン引いた眼を向けられたゆかりは「な、なんなんですか!？」とショックを受けていたが、自業自得である。

と、そんなやり取りをしている三人に向かってパシャツという音とともにフラツシユが炊かれた。

「みんなおはよーさん。ちゃんと時間通りに集まっとつて偉いでー」

驚いて振り向くとペンを挟んだメモ帳をひらひらと振る茜が立っていて、そのあとには相変わらず無表情な葵がカメラを構えていた。

「あ、茜さん。昨日は大丈夫だったんですか?」

「ん?。昨日?。何のことや?」

昨日の勝負の後「バカ姉は頑丈さだけは折り紙付きですから」と、気絶させられた後で葵にズルズル引きずられていったのを見ていたゆかりが尋ねるが、当の茜は首をひねる。

まるで昨日のことなど覚えていないかのような茜の後ろから、葵がシー、と唇に人差し指を当てていた。

「いえ、覚えてなくて体に不調が無いなら別にいいんですけど……」

「おお、そら元気よ!。ウチは元気なのが取り柄やからな!」

からからと笑い飛ばす茜、確かに頑丈さは相当なものようだ。

「んじゃそろそろ始めよかー。昨日は何か知らんけどルールを言い忘れとつたからな、改めて今日のゲーム勝負はずばり!。よりゲームのうまい方が勝ちや!。単純明快明朗会計ありがとさんってやつやな!」

あつはつはと一人だけ笑う茜の後ろで葵がそつと手刀を構えたのを見て、慌ててゆか

りが尋ねる。

「待ってください、ゲームって一口に言っても色々種類があるじゃないですか。人によつて得意不得意もありますし、そこら辺はどうするつもりなんですか?」

「ああ、それはウチも考えとつてな。で、公平を期すために三本勝負つてことでどうやるか? 二人がそれぞれ自分の得意なゲームを一つずつ、それからゆかりさんが最後の一つをチョイスで三本勝負。どやろか?」

「それだと私の選択で勝負結果が決まっちゃいませんか? 二人ともそんなのでいいんですか?」

「僕はそれでいいよ、ゆかりんはそういうところフェアだしね」

「私も異議なしです! 同じくゆかりお姉ちゃんの選択なら文句はありません」

心配そうなゆかりに対し、二人は即答で了承する。

先ほどはゆかりにドンびいた目を向けた二人であったが、やはりゲームの事に関しては何間違ったという信頼はあるのだ。

「おっしゃ、二人がオーケーなら問題ないな! んじゃ先にゲームを選んで流れに乗るのはどつちや?!!」

「私は後でいいですよ、マキさんお先にどうぞ」

「そう? じゃあ遠慮なく」

煽るような茜の声に過剰反応することなく二人は互いに目配せし、あっさりともキが先手を取るといふことで話がまとまる。茜はそれが予想外だったのか、ちよつとつまらなそうに

「なんやひと悶着あるかと思つたけどあっさり決まりよつたな。んで、マキやんは何のゲームできずつちに挑むんや?」

「そうだね、ここはゆかりん仕込みのクレインゲームで……つていきたいところだけど、それだと単純なスコアとかで競えないしな……」

「せやなー、ほなら決まつた額を使って何個商品取れたかで勝負……つてなところやろか?」

「それなら、二千円でとれた商品の重さで競うというのはどうでしょうか?」

マキと茜が考え込んでいるところにゆかりが案を出す。

「ほお、何で分かりやすい数じゃなくてあえて重さなんや?」

「単純な商品個数だと、小さなプライズを如何に取れるかというその一点だけを競うことになってしまふと思うんです。ですが取れた重さを競うなら、大物を狙つて一発逆転、みたいに戦略が広がるんじゃないかな、と」

それを聞いた茜とマキの口からおおー、と感嘆の声漏れる。

「さすがゆかりん、伊達に『ゲーセン潰し』と呼ばれてた訳じゃないね」

「うっ！ その呼び方はやめてくださいよ……本当にあの時はやりすぎたと反省してるんですから……」

「まあ、過去の話は今は置いてや。それよりきずつちはどうや？ 今のルールで問題ないか？」

自身の黒歴史に悶絶するゆかりを見て、往時はどんな感じだったんだろうと想像していたあかりは、茜の声で現実に引き戻される。

「ええ、それで大丈夫です」

「オーケー、それなら勝負開始や！」

茜の掛け声でマキとあかりは整然と並ぶクレインゲームの森に飛び込んでいく。

「そろそろいいかな……さて、どれを狙いますか」

あかりはマキに自分が何を狙うか見られないよう、逆方向にしばらく進んでから改めてあたりを見渡す。

いくつものガラスケースの中には、ぬいぐるみやフィギュア、スピーカーみたいなちよつとした電気製品から巨大なお菓子まで様々な商品が並んでいた。

「へえ、結構いろんな商品が置いてるんだ……」

あかりは感心したように辺りを見渡す。実のところ、そんなにゲームセンターなんて

来ることが無かったし、その中でもクレーンゲームなど興味が無かったのでこうやってきちんと見るのは初めてなのだ。

多様な景品を興味のひかれるままにぐるりと一通り眺め終え、改めてあかりは戦略を考える。

「今回はとつた景品の重さで勝負だから、ちまちま小さいのを取っていくより、やっぱり大きいのを狙った方が良さそうかな——っ！」

と、大きそうな商品に目星をつけて歩いていたあかりの目が、一つのケースに釘付けになる。

「か、可愛い……」

あかりが走り寄って、両手と額を押し付けたケースの中に鎮座していたのは、やる気のないなような寝ぼけ眼の大きなサメの大ききぐるみ。

「……うん。これ大きいしいいんじゃないかな」

一応作戦通りの獲物ではあるが、それ以上にぜひとも家にお持ち帰りしたい衝動に駆られるがまま、あかりは勝負用の予算が入ったジッパー付きの袋から百円玉を二枚取り出し硬貨投入口へ滑らせる。

それを合図にシャリシャリした電子音が鳴り響き、ゲームが始まった。あかりは点灯したボタンをタイミングを見計らって押し、慎重にサメの上へとクレーンを移動させ

る。

「なんだ、思ってたよりも簡単じゃん」

ミュイミュイとUFOチックな音を出しながら下りていくクレーンを見ながらあたりは独り言ちる。

そしてクレーンはしつかりとサメの胴体をホールドし、ゆつくりと上へ上り――

「あー!？」

ちよつとサメの胴体が浮き上がったところでクレーンが重さに耐えきれず、べちやつとサメは再びやる気なくアクリルの床へ寝ころんだ。

「ぐぬぬ……」

ここでいつもの冷静なあかりであればアームが思っていたほど強くはないことを察し、別のもつと小さなもの狙いに切り替えたのかもしれない。だが、サメ君に魅了されたあかりはムキになって五百円玉を投入した。

「絶対持ち帰ってやりますからね！」

――五分後――

「サメ……」

そこには失意のどん底に沈んだあかりがふらふらと歩いていた。

手には何も持っておらず、勝負資金の入ったジツパー付き袋はすでに百円玉すら入っ

ていない。

結局あの後何度もサメにチャレンジしたのだが、最初の一回できれいにつかめたのはどうやらビギナーズラックみたいなものだったみたいだ。

クレーンの位置がズレていたせいで、サメのお腹を爪が押しただけで終了というのが何回も続き、偶然にもしつかりサメを挟めても、やっぱりクレーンが弱いせいで滑り落ちる。そんなのを繰り返すうちにいつの間にか資金は底をついていた。

そんなわけで手持ちぶさたになりフラフラと勝負相手のマキはどんな様子かと探している訳なのだが。

「あ、いた」

ようやく見つけたマキは、真剣な表情で一つの台の前や横を行ったり来たりしているところだった。

「何してるんですかマキ先輩」

もしかしてマキももう予算がないのに何もとれていないのだろうか？ そう思っって声をかけると、マキもあかりに気付いたようだった。

「あれ、どうしたのさあかりさん。……もしかして敵情視察？」

ちよつと怪訝そうな目を向けるマキに向かって空の資金入れを見せる。

「違いますよ、こっちはもう終わったので様子を見に来たんです。別にやり方をマネし

て——なんてせこいマネはしませんから安心してください」

「ああ、成程ね。僕は後これだけなんだ」

マキは指でつまんだ百円玉二枚をこすり合わせる。台に書かれた一プレイの値段も二百円、つまりこれが最後のチャンスという事だろう。

「よしー」

マキが提案してきた勝負内容にもかかわらず残り一回で景品を持っておらず、予想外にもイーブンで終わりそうなのにあかりがしめしめと思っていると、マキが気合の入った掛け声と共に二百円玉を投入した。

マキの邪魔にならないように後ろに回り、何を狙っているのかと台の中をあかりは覗く。置いてあったのは箱モノの景品で、『わあ？ 癒される!? ゆれてしゃべる人面草』という商品名の下のプラ窓から、可愛いとキモいのラインをぎりぎり超えたような顔が覗いていた。

そして何より箱の上に引っ掛けやすそうなフックがついている上、アクリル板からちよつとだけはみ出すようにして置かれている。

(しまった、こんな取りやすそうなのもあつたんだ)と一瞬後悔したあかりだったが、よく見ればアクリル板の上には滑り止めの透明なゴムシートが敷いてあつた。これならばさつきのアームの強さを考えると、単純に押した所で落ちないだろう。

一体どうやって取るつもりなんだろうかと考えている内に、マキ先輩はボタンに手を乗せたままひよい、と台の横から台を覗き込み、クレーンが奥へ下がっていく。

（ああ！ そうやって奥行き調整すれば良かったんだ！）

こうして見せられれば単純な話だが、全然さつきは思いつかなかった。これを先に知っていれば、何度か惜しいときがあったのに……！ 悔しがるあかりの前でクレーンが下りていく。

しかしそれはフックにはかかりもしないどころかそれよりさらに手前、かろうじてクレーンの片爪が箱の角に引つかかるだけの位置だ。

マキ先輩が自分から提案してきたのに案外下手じゃないか、とあかりが引き分けを予感して安堵したその時だった。

「えっ!？」

「よしっ!」

角をぎりぎり掠るか掠らないかといった所に下ろされたクレーンが閉じられる時の動きで、箱の角の隙間に爪がねじ込まれてそのまま箱が押され、くると回転する。景品箱はもうクレーンとアクリル板の角だけで支えられている状態だ。

そしてそのままクレーンが上がると当然その支えの一つがなくなるわけで――

ゴトン!

重そうな音と共に景品が取り出し口へと落ちていく。

「多分前の人途中であきらめてくれたのかな？ いい感じに回ってくれて良かった良かった」

「な、なんですか今の取り方?!」

しゃがんで満足そうに商品を取り出したマキに、あかりは食って掛かる。

「あれってフックを引つ掛けて取るんじゃないんですか?!」

「いやいや、あれは下に滑り止めついてたし、フックも倒れてて引つ掛けずらいようにされてたし、こうやって取るもんだって」

素晴らしいながらマキがあかりの後ろへ向かって手を振る。誰かいるのかとあかりがちよつと横に避けつつ振り返ると、まったく気配がなかったがゲームセンターのロゴが入ったビニール袋を持った葵が立っていた。袋を受け取ったマキはそのままそれをおかりに手渡す。

「じゃ、僕が取れたのはこんなもんだけど、あかりさんはどんな感じ?」

「え……? これ全部二千円ですってんですか?」

袋の中の巨大なお菓子や小さめのぬいぐるみなど、四種類ほどの商品が入っていた。

「欲しいものじゃなくて取れそうなものを狙ったし、こんなものじゃないかな? ま、最後の最後でカワイイのが取れたけど」

そういつてマキは先の人面草をじゃーん、と見せつける。

「かわ……………いい……………」

可愛いつて何だろうとちよつと哲学しそうになってしまったあかりだったが、それよりも一つ確かなことは

「……………今回私は一個も取れなかったの、マキ先輩の勝ちですね」

「え？　一個も取れなかったの？」

「……………マキさんみたいな技術もないのに取れそうなものじゃなくて取りたいものを、しかも大物一点狙いでやってしまいましたからね」

それを聞いたマキはしみじみと頷いた。

「ああ……………それは仕方ないよ。僕だつて大きいぬいぐるみとかをベースポジションから取ろうと思つたらやつぱり千円、二千元はかかることもざらだし」

「え、今の見てるとマキさんも結構上手そうですね、それでもそんなものですか？」

「そりやそうだよ。だつてゲームセンターもそんなポンポン取られたら大赤字じゃん、取れそうで取れないように工夫して置かれてるんだよ、こういうのは」

確かにそう言われれば尤もだ。

ということとは取れそうなものではなくて取りたいものを二千元という予算内で狙つたのは、作戦の時点で失敗だったという事だつたらしい。

「でも、勝負とか抜きにしてあのサメ君は欲しかったなあ……」

「サメ？ あかりちゃんを狙ってたのってどんなのなのさ？」

「結構大きな可愛いサメのぬいぐるみだったんですよ……あ！ そう、アレですアレ！」
サメ君との優しい出会いと別れを思い出していると、向こうの台の向こうを袋に詰められて、顔だけぐてんと覗かせているサメ君が通っていく。

「どれどれ……ってデカっ！ 置き方にもよるけどここの店の設定だとあれはちよつと私でも無理そうだなあ……」

「そんなに難しそうですか？」

「だねえ……あれ、ビーズクツションでしょ？ あれだと片方だけツメをかけて押そうにも変形するだけで動かないだろうし……タグを狙うしかないんじゃないかなあ……いや、それでも重そうだし動くかなあ……」

手を顎に当ててマキは難しい顔をする。

最悪プライドを捨ててマキに取ってもらおうと思っていたのだが、それも難しそうだ。あかりはふらふらとさまようサメの袋詰めを名残惜しそうに眺めた。

「でも、袋に入ってるってことは誰か取ったことですよね、いったい誰が……」

と、ちょうどサメはあかりとマキがいる列のところに来て、その後ろからひよこりと見知った顔が現れる。

「あー！ やつと見つけました！ 勝負はマキさんの勝ちですかね？」

茜に追行されて、両手でサメ入り袋を体の前に抱きかかえたゆかりはこちらに歩いてくると、その袋をあかりに渡す。

「え？ お姉ちゃんこれって……」

「はい、あかりちゃんどうぞ。それ欲しかったんですよね？」

いまいち状況が呑み込めないながらも、あかりはゆかりの体温がほんのり残るサメを受け取る。

「あかりちゃん、一目散にそれに向かって行って、お金が無くなった後も何度も名残惜しそうに見てましたから」

どうやらマキに墓がついていたように自分には茜とお姉ちゃんがついていたらしい。あかりはギユッとサメを抱きしめてゆかりに微笑みかえす。

「ありがとうお姉ちゃん！ これ、ずっと大事にするから……い！」

もしここにあかりとゆかりだけだったなら、従姉妹水入らずのほほえましい空気が流れたことだろう。だが、ゆかりからのプレゼントなんてイベントをマキが看過出来るはずもない。

「ちよ、ちよつと待った！ なにそれズルい！ なんだか僕勝ったはずなのに負けた気しかしらないんだけど!？」

「あかりちゃんは一つも取れなかったし、金魚すくいで取れなかった時のおまけみたいなものですよ。マキさんにも昔色々取ってあげたじゃないですか」

「うう、そりやそうなんだけどさ……」

「それにマキさんはもう自分で欲しいの取れるようになりましたしね」

「そうだけどそういう問題じゃないんだってー!」

結局その後、マキもゆかりに欲しい景品を手に入れてもらってから、ようやく次の勝負に移ることが出来たのだった。

「あ、あのさあ……ほんつとーにこれやらなきやダメ?」

「何言ってるんですか、このままだとマキ先輩不戦勝になりますよ?」

「いやー、もうこの際一勝してるんだし不戦敗でもいいかなーって……」

「ダメに決まってるじゃないですか! そんな勝ち方じゃ私が納得できないです!」

二戦目を選んでゲームの前で、及び腰なマキをあかりが筐体の方に引っ張る。

「僕こういうのほんとにだめで——ひゃうつ!」

マキが抗議しようとおかりの方に向けたタイミングで、ゲームのデモ画面にゾンビが

突然バァン！ と張り付き、マキは普段のかつこいい感じからは想像もつかないような可愛らしい悲鳴を上げる。

そう、あかりが選んだのは出てくるゾンビを次々打ち倒すガンシューティングゲームだった。

「なんちゅうか意外やなあ……マキさんの弱点がホラーやったなんて、まったくのノーマークやったわー」

そんな様子を見守っていた茜はからからと笑いながらペンを走らせ、その隣で葵がシャッターを切る。マキの味方は実質心配そうに様子をうかがうゆかりだけだった。

「あかりちゃん、あんまり無理強いはしちゃだめですよ？ マキさんは負けでもいいって言ってるんですし……」

「むう……」

「ゆ、ゆかりくん!!」

お姉ちゃんの言葉を無視するわけにもいかずあかりの力が緩み、マキは拘束を振りほどいて、流される川の中で浮き輪を見つけたような表情でゆかりに抱き着く。

「あー！ 何お姉ちゃんにくつついてるんですかマキ先輩！」

そんなあかりの激昂も、ゆかりの胸に顔を埋めて頭を撫でられるマキには届かない。

「よしよし、マキさん怖いのがダメですもんね……あかりちゃんも納得はできないかもし

れませんが、マキさんの不戦敗を認めてあげてくれませんか？」

「うう……まあ、お姉ちゃんがそういうな——むぐう?!」

ゆかりに言われてはと不承不承ながら提案を認めようとした所で、あかりの口を背後を取った葵が塞ぎ、その前に茜が立ちはだかる。

「ちよい待ち！ 残念やけどそういうわけにはいかんのやな——一度始まった以上勝負はきつちりつけて貰うで」

新たな敵にぶるぶる小動物ちつくに震えるマキを一際強く抱きしめながら、ゆかりは凜とした表情で告げる。

「……茜さん？ 二人が傷つくようなら今回の話協力しないって言ったはずですけど？」

「ゆかりん……」

そんなゆかりの腕の中にあるマキの瞳は、王子様に抱かれるお姫様のように潤んでいた。

「むぐーっ！」

嫉妬心を爆発させたあかりが、茜に口をふさがれて声にならない怒号を上げながら目くじらを立てる。

が、茜はそんな三者三様の反応などどこ吹く風でゆかりに近づくと、一番近くに

マキにも聞こえないような極めて小さな声で、その耳元に何かを吹き込む。

「……………」

それを聞いたゆかりの表情が少し曇り、その後しばらく目を閉じ眉根を寄せて考え込んでから、仕方ないという風にマキの方へ視線を向けた。

「ゆ、ゆかりん…………？」

何があつたのだろうと恐々と見つめるマキに対してゆかりは慈母のように笑み掛けながら言う。

「マキさん、マキさんはホラーがっついていうより、お化けとか霊とかが怖い、そうですね？」

「え？ う、うん。だって一度出会ったら最後、理由が無くても襲ってくるじゃんか……………」

「そうですね、理不尽に悪意を向けられるのは怖いですよ。でも、ゾンビが襲ってくるのはウィルスに脳が侵されているから…………ほら、ちゃんと理由がありますよ」

「うん…………うん？」

一瞬疑問符を浮かべたマキだったが、ゆかりの優しい気な笑顔に再び気を緩める。

「それに、お化けとかつてすごくしつこいじゃん…………。封印とかされてもまだ恨んでるぞーとか、次はお前の番だみたいな終わり方ばかりで…………」

「ああ、日本ホラーだとよくあるやつですね。確かにあれは私も背筋が凍える時があります」

「ゆかりんもそうなの？」

「ええ」

お母さんを見上げる幼児のようなマキの頭をなでながらゆかりは続ける。

「だけどゾンビは銃で撃てば倒せます、ヘッドショットなら一撃ですよ？　ほら、そう考えるとゾンビは怖くないですよね？」

「う、うん？　あれ……？」

「こつちを襲ってくるのは菌にやられて狂暴化しているというただの症状、元が生物だからちゃんと物理で倒せる……大丈夫、ゾンビは怖くないですよ」

「そ、そうなのかな？」

「ほら、マキさんも言うんです。ゾンビは怖くない、ゾンビは怖くない」

「ゾ、ゾンビは怖くないゾンビは怖くない……」

何度かマキがそう繰り返したところで、ゆかりは手をパン！　と打ち鳴らす。

「はい！　これで大丈夫！　さあ、マキさん頑張ってくださいね！」

「うん！　任せてゆかりちゃん！　さあ、あかりさん始めよつか！」

さつきとは一転、いつもの凛々しい表情になったマキは躊躇なく銃を握る。

「うんうん、まさに愛の力って感じやなあ……」

「姉さん、あれは愛の力というより洗脳ですよね?」

何だかマキの目はぐるぐる回っている気がするが、気持ちよく勝負ができるならいいかと、あんまりあかりは考えないようにして自分も銃を握った。

「よし、それじゃあ改めて第二戦スタートや! シンプルにスコア勝負でええよな?」

「おっけー!」

「異議なし!」

掛け声と同時にチャリン! と硬貨が子気味良い音を立てて投入された。

「ゾンビは銃で撃てば倒せるゾンビは銃で撃てば倒せる……」

短いオープニングの後路地の角から次々と現れるゾンビの全身に、ちよつと目のハイライトが消えながらもマキは立て続けにトリガーを引き絞って銃弾を乱射する。

「やるじゃないですかマキさん!」

多少無理やり引つ張り込んだ引け目を感じていたあかりもその様子を見て、視線をマキから画面に向けて、ゾンビの群れに銃口を突き付けた。

「さあ! 行きますよっ!!」

……ゲームが始まってから十分ほどたったころだろうか、マキはステージがひと

段落ついたところで構えを解いて、あかりに視線を向ける。

「あかりさん、なんていうかさ……さつきはありがと」

今はローディングを兼ねたエレベーターでの移動シーン中であり、隙だらけでも問題ないはずだが、あかりは画面から視線を外さずぶつきらぼうに答える。

「さあ……？ お礼を言われるようなことはないと思います」

「ほら、さつきいきなり目の前の段ボールからゾンビが出てきて、僕が驚いて固まった時だよ。その時、あかりちゃん自分の方のゾンビよりも先にこつちを排除してくれたじゃんか、そのせいでダメージも受けてたし」

マキの指摘するように先ほどまで二だったあかりのライフは一になっている。だがマキのライフはそのだいぶ前から一になっていて、さつきあかりの支援が無ければゲムオーバーになっていただろう。

あかりは別に……と小声でもにもよる口ごもってから一つ咳払いして

「……今回はスコア勝負だからマキ先輩からポイントを奪っただけです。文句を言われたとしてもお礼を言われることじゃないと思いますけどね」

そう頬をわずかに赤くしてつぶやいた。

「何、あかりちゃん照れてるの？」

そんな普段見ないあかりの様子に年下らしさを感じて、無理やりホラーをさせた意趣

返しだと少しからかうようにマキが笑みを浮かべた瞬間。

ガラスの割れるような音がスピーカーから鳴り響き、マキが画面に振り返った時にはすでに、ゾンビの腕がこちらへ伸びてきていた。

慌てて銃を構えなおそうとするがそれよりもゾンビの方が早い、今度こそゲームオーバーかと思つた刹那、パン、パン、と短い破裂音が続いてそのままゾンビがスコアへと変わる。

「油断しないでくださいよ、マキ先輩！ そろそろボスなんですから、ここまで来たら最後までいかないと！」

「あー、ごめんごめん」

確かにあかりに助けられて、ここまで来てからの油断してゲームオーバーは気まずすぎる。マキは意識と表情を引き締めて、意識を画面に再度向けた。

「……それから今のは貸し一ですからね」

「了解っ！」

エレベーターの扉が開くとあかりの言うように最後のボス、ゾンビ物では割と定番な巨大化した不気味な肉塊が現れた。そして某冒険的紳話にでも出てきそうな肉塊が口？らしき部分をパカリと開けると、そこから蜂のようなものが飛び出してくる。どうやら口が弱点であり攻撃手段らしい。

「あかりちゃん！ あれやっぱ撃ち落さないとダメージ食らうよね？」

「ですねっ！ にしても軌道が面倒くさいなあもう！ ……マキ先輩ここは役割分担で行きましょう、マキ先輩はあの化け物が口を開いたらひたすら撃つてください。私はあの羽虫を迎撃します！」

「おっけー！」

そして二人で撃ちまくること約一分、肉塊がやたら深い研究所の奥底へと落ちていき、爆発が起こってエンディングが始まる。

「あー、終わったー。もう指が痛いよ」

マキは銃を台に戻すし額の汗をぬぐうと、手をプルプルと振る。最初から乱射気味で疲れてはいたが、最後のボスはそれに輪をかけて連射したのもう力が入らない。

あかりも狙って撃っていたのでマキより負担は少ない筈だが、それでも汗ばんだ手を握ったり閉じたりしていた。

「やりましたねマキ先輩」

エンディングを感慨深げに眺めながらあかりが呟き、スツと手のひらをこちらに向ける。

「？ ああ、成程ね」

少し戸惑うが、それがハイタッチを求めているのだと察したマキは自分も手を上げて

パン！

小気味良い音が周囲に響く。

「こういうゲームはホラー苦手だから今までしたことなかったけど結構楽しかったよ。ま、勝負は僕の負けみたいだけど」

「そりゃあ私が選んだゲームで私が負けたらどうしようもないじゃないですか。あ、それより見てください！ 二人プレイでのスコア、この店で一位みたいですよ？」

エンディングが終わった所でスコアが表示される。

「おおー！ 僕たち結構上手かったん……」

と、そこでマキはスコアボードの順位がおかしな動きをしていることに気づいた。

具体的に言うならば十位にあったスコアが九位に上昇したかと思えば、すぐさま八位、七位……とその順位をグングン上げていく。最近増えてきたプレイ中のスコアがリアルタイムで反映されるランキングシステムなら、順位がこういう風に上がっていくこと自体はおかしくないのだが、問題はそのスピードだ。

「ねえあかりちゃん、これって多分あれだよね……？」

「ええ、ですよね……」

あつという間に二位へ食いついた『（アンダーバー三つ）』の正体を二人が察し

た所で、隣の筐体の周囲をいつの間にか取り囲んでいた群衆からおお！とざわめきが始まる。

二人がちよつと離れた階段からその中心を確認すると、やつぱりというかだろろうなというか、その中心にいたのはゆかりだった。

彼女は二丁拳銃スタイルで銃を構え、次々と迫りくるゾンビの波をヘッドショットだけで殲滅していく。その動きはハリウッド俳優すらかくやと言わんばかりで、流麗さと合理性を伴った舞いのような動きに、長いもみあげが体操競技のリボンのように宙を走った。

二人はその動きと、いつもの優し気な瞳と違うゾクリとするようなゆかりの冷たい瞳に、言葉を失ってただ彼女を見守る。

そしていよいよ最後のエレベーターを抜けてボスが現れた——と同時。

ガガガガガガ！

あまりにトリガーを引く速度が速すぎるせいで、ガトリング砲みたいな音が鳴る。

そして恐らく本来ならボスの攻撃を全部迎撃するのがこちらの攻撃チャンスが生まれる条件なのだろうが、ゆかりの殲滅速度が上回ってしまつてボスが常時弱点をさらけ出していた。そしてそんな状態でガトリング砲と化したハンドガンの乱打を受けきれはらずもなく。

おおー！！

ものの十秒足らずでボスを撃破したゆかりに群衆がざわめいた。

そしてリザルトにノーダメージボーナスと残タイムスコアがガリガリと加算されていき——あつという間に二人の記録が抜かれて二倍差近い差が生まれた。一対二で二倍差スコアなので実質四倍差である。

「あ。マキさんとあかりちゃん、二位になってるじゃないですか！ 流石ですね！」
銃を戻したゆかりは、沸き立つ群衆の向こうから飛び跳ねなてこちらを視認し、涼しい顔でこちらへと手を振る。

二人は手を振ってこたえながらも小声でささやきあう。

「なんかもう、ここまで差があると悔しくすらないんだね……」

「ええ、というか薄々思っていましたけどゆかりお姉ちゃんって本当にゲームが関わると頭おかしいですよね……」

それぞれ一勝したはずなのに、全く勝った気のしない二人であった。

三戦目「ゲーセンでの決戦（後半戦）」

「というわけでここまで一勝一敗や！　っちゅー訳で運命を決する三戦目！　さあ結月っちゃんは何を選ぶんや?！」

まるで司会者のように大げさな身振りの茜は、マキとあかりの真剣な眼差しを向けられているゆかりへとエアマイクを向ける。

「え、えー……。皆さん、そんなに見られると私の方が緊張してしまうんですが……」

カメラ越しの葵も含めて四人の視線を受けて、ゆかりは苦笑する。

「何言ってるんですか！　絶対私の方が緊張してますから！　だってお姉ちゃんの選んだゲームで結果が決まっちゃうんですよ?！」

「そうだよゆかりん！　それで、一体何で勝負すればいいのさ」

意図していたのとは逆にずいっ、と二人に近づかれてゆかりは両手を上げて仰け反る。

「えーと、それはですね……………」

「……………まさか結月っちゃん、今まで時間あつて決めてないとかはないよな?！」

「い、いやーまさか二人が楽しそうにゲームしてたらいてもたってもいらなくなつて

自分もゲームに熱中して全然考えてないとかそういう事は全くないんですよ？」

茜の指摘にゆかりは一瞬固まって露骨に目を逸らす。

しかし、その視線を先回りするように葵が素早く割り込んだ。

「わあ、久しぶりに私以上の棒読みに出会えて感激しますね」

「いや！ 葵さんの方が絶対棒読みですって——あ」

ゆかりは思わず葵に突っ込むが、そこでようやく自分に向けられているどんよりとした四つの目に気づいた。

「ゆかりくん……。まさか本当に何も考えてなかったんだ……？」

「……ちよつとだけ、ほんのちよつとだけでですけど、お姉ちゃんに対する敬意が下がった気がします……」

いつもは自分に対して好意以外を向けることのない二人のどろつとした視線に、ゆかりも反省したらしい。

「うう……。すいません、二人が真剣に勝負してたのに……。分かりました！ 最後の勝負こそ、二人の雄姿を最後までしっかり見守ります!!」

「言うて自分、またどうせじつとしとれんで、ふらーつとゲームしに行くんちゃうんか？」

割とマジトーンな茜の突っ込みに頷くマキとあかり。

「うっ………そうだ！ それなら最後の勝負、あれなんかどうでしょう！」

追い詰められたゆかりが指したのはゲームセンターに一台しかないエアホッケーの台だった。

「なるほど。これなら一台しかありませんし、お姉ちゃんがじつとしてられなくても大丈夫ですね」

「だね、何だったら茜さんにでも捕まえて貰ってればいいし」

だが、それを聞いたゆかりはチツチツチと指を振る。

「違いますよ二人とも。今回エアホッケーをするのは、私とマキさんあかりちゃんペアの三人です！」

「？」

それだと勝負にならないのではと首をかしげる二人に対して、一人その意図を理解した茜がくつくつくと笑う。

「なるほどな、確かにそれやったら嫌でも二人の雄姿を最後まで見守ることになるわな。勝負内容は、どっちがより多くゆかりさんからポイントを取れるかってところかいな？」

「そうですそうです！ さあ二人とも行きますよ!!」

マキとあかりに確認もとらず、ゆかりは軽快な足取りで一人先にホッケー台へと向

かつて行く。

残された二人は視線を交わし、思わず何方ともなくくすりと笑ってしまふ。

「ふふっ、お姉ちゃんゲーセン大好きで強引なのは昔から変わらないですね」

「ふっ。やっぱあれ、昔からなんだ」

「ええ、私がアメリカに行く前だって、思い出作りにくとか言つて徹夜で付き合わされたからね？」

「もう！ 二人とも何話し込んでるんですか!! 早く早く!」

もう勝負なんか覚えてなさそうな結月ゆかりに急かされるまま、二人は彼女と反対側に立ちスマッシュヤーを握る。

そしてそんな三人を遠巻きに、ゆかりのガンシューティングを見ていた群衆が「次はホツケーか」「今度はどんな試合が見れるんだろうな」「いや流石にホツケーで魅せるよなプレイなんかできっこないだろ」と勝手なことを言いながら囲んだ。

「それじゃあ行きますよ……第三勝負よーい、スタート!!」

「あつ！ それウチのセリフや!!」

群衆の最前列に陣取るのに手間取つてタイミングを逃した茜の叫びと共に、ゆかりの陣地へパックが滑り出る。ゆかり先行かと緊張して構えを取るあかりとマキだったが、ゆかりはそれをスマッシュヤーで上から押して捕まえ、ふんわり二人の陣地へ投げ込ん

だ。

「そちらからどうぞ」

いつも通りののにこやかな笑み。だがその背後に浮かぶオーラは、某野菜っぽい星人がスーパーなモードになるときのアレである。

「じゃあどつちからいきみますか——つてあ——」

「ごめんねあかりちゃん、でもどう考えてもこれはこつちに来たから……ねっ！」

あかりより長い腕を活かして攻撃権を得たマキは、ゆかりのゴールへ真つすぐパックを打ち込む。だが、僅かに彼女が横へ動かしたスマツシャーにより得点を阻まれ——

「ああっ?!」

横壁の間を跳ね回るように返されたパックが、マキの握るスマツシャーを薄皮一枚裏側を掠るようにして二人のゴールへ飛び込む。

「直撃狙いは奇策としてはありますが、ホツケーの定石は壁での反射ですよ?」

うぐぐ……と言葉に詰まるマキに代わり、次はあかりがフィールドへと滑り出てきたパックを打ち込んだ。

「そういう事なら……!」

あかりの打ったパックはカカツと二回反射し、的確にゴールへ走る。が——

「甘いつ!!」

「またも少しだけ動かされたゆかりのスマツシャーにゴールを阻まれたパックは、潰れた四角を描くよう四辺の壁を跳ね回り——」

カコーン！

「わわっ?!」

「あかりがゴールをブロックしようとしたスマツシャーとの反射でオウンゴールしてしまう。」

「ふふ、焦りすぎですよあかりちゃん。今のは下手に動かしてなければ入っていませんでしたよ?」

「本場にただただ純粹に楽しそうに微笑みを絶やさないゆかりに群衆が唸る。」

「すげえな。今の口ぶりからすると、反射させてからゴールまでの軌道を完全に読んでたって事だろ?」

「まっさかあ。あんなのいくら紫のでも、あんな何度も反射させた軌道まで読めるかよ。俺らだって適当に打てばあんな感じで跳ね返るだろ?」

「いやでも——」

「だが、そんなざわめきにも二人の耳には入っていない。」

「そんな余裕すら二人にはなかったのだ。」

「視線すら合わせず……否合わせる余裕すらもなく、二人は短く言葉を交わす。」

「……マキさん。勝負を捨てるわけではないですが、協力できる限りは協力しませんか？」

「うん、確かにそうしないと一点すら入れられなさそうだしね……」

マキVSあかりからマキ&あかりVSゆかりとなった勝負が幕を開けた。

力強くマキによつて打たれたパックが派手な音と共に壁で跳弾し、狙いすまされたあかりのショットが反射によつて複雑な幾何学模様を描く。

時に正面から時に裏側から、奇策と言われた直撃狙いや自陣地へ帰ってくるようなフェイントを入れた反射、二人はありとあらゆる手でゴールを狙った。

——だが。

おおおっ!!

二人のゴールにパックが叩き込まれると同時に、観衆から得点を知らせる電子音をかき消すほどのざわめきが起こった。

「やつぱまぐれなんかじゃ無えって！　だつて今まで全部一撃だぜ？」

「……ま、マジかよ」

そう、一撃。二人の攻撃をすべて一撃で返した上で確実に一点入れるというリターンエースでゆかりはパーフェクトゲームを演じていた。

「あの二人も戦いの中でガンガン成長してるけど……あれは相手がなあ」

「ふふ、フハハハハ！ そうだ、自らの友にすら容赦のないその苛烈な攻め、残酷なまでの技巧ッ！ やはり結月殿は悪魔の名を冠すに相応しい……」

未来予知に迫る弾道予測と、スナツプを効かせた最小の動きで最大の威力を出す独自の打ち方、更には擦らせるようにして回転をかけられた変則ショット。

精密機械が如きゆかりのパック捌きによって、スコアボードの表示は二十対ゼロ。二人はゆかり一人相手にいまだ一点すら入れられてなかった。

「嘘、でしょ……」

「やっぱりお姉ちゃんはゲームが絡むとおかしいですね」

大ぶりなせいで息の上がってきたマキと、反射を考えすぎて知恵熱で額に汗を浮かべるあかり。それに対しゆかりは汗一つ浮かべず呼吸一つ乱さない。

その光景はまさに――

「なんか負けイベントで魔王に挑む勇者の構図だよな、これ……」

「だ、だれが魔王ですか!!」

「今っ!!」

群衆からの突っ込みにゆかりが抗議のために後ろを振り向いたのに合わせ、あかりが最短距離でゴールへ向かってパックを放つ。

カコーン!

だが軽快な音と共にパックが入ったのは、マキとあかりのゴールだった。

「な、何で……?」

後ろを向いていたはずなのにと絶望に表情が染まるあかりに対し、ゆかりはにこりと笑う。

「昔ゲームをしたときあかりちゃんの『あ、UFO!』で騙されてから、不意打ちには特に気を付けてますから」

「あ……」

言われてそんなこともあったなと思いついたあかりは、次いでまさか子供時代のいじらしい一度限りの反撃を覚えていて、しかもそれに対して今日まで警戒していたのかと、ゆかりのゲームと勝利に対する恐るべき執念に唾を呑んだ。

そしてそれと同時に残り三十秒のブザーが鳴り響き、真のワンサイドゲームが始まる。

『クアドラプルタイム!』

ホッケーの機械音が宣言すると同時に三つの追加パックが滑り出て、盤上を四つのパックがちよろちよろと動き回る。

それは本来僅差を覆すためのチャンスモードにして、大負けている側でもゲームを楽しんでもらうためのお祭りモード。

……の筈だった。

「さあ、それじゃあ本当のホッケーを始めましょうか！ マキさん！ あかりちゃん！」
おい待てじやあ今までののは何だったんだと、誰かが突っ込む間もなく、ゆかりは残像が尾を引くような高速で四つのパックを弾く。

パックは今までのように壁で反射し直線的な軌道を描き——そして今までと違って回転を加えられたパック同士でぶつかることで、まるで風に舞う花卉のように有機的な動きを見せる。

「奥義ッ！ 乱れ桜花!!」

カカカカコーンと、幻惑するような軌道で盤上を舞うパックが続けざまに二人のゴールへ雪崩こんだ。

おおおおお!!

今日一番の群衆のざわめきと熱狂。

そしてそれをかき消す勢いで二人は叫んだ。

「こんなのどうしろっていうのさ（んですけど）!!」

……悲鳴で声だけでなく思いもそろった二人はその後も必死の抵抗を繰り返した。

もう勝負など関係ない完全な協力的体制での抵抗、だがその努力も虚しくタイムアップを迎えたとき、スコアボードには非情かつ非常な六十二対ゼロという表示が輝いていたのだった。

「はーい……つちゅー訳で、どこぞのアホがワンサイドゲーム繰り広げよったんで、延長戦やるでー」

見ていただけの筈だがそれでも疲れたように元気がない茜の声で、ゆかりが申し訳なさそうに人差し指を突き合わせる。

「すいません……つい熱中してしまって」

「本当だよ……。まあ、ゆかりんらしいといえはゆかりんらしいけどさ」

「ですね。熱中すると周りが見えなくなるんですから、次はお姉ちゃんとの対戦形式はやめてくださいよ?」

「うう、本当に面目ありません……」

流石のマキとあかりも今回ばかりは味方せず、ゆかりはしょぼーんと肩を落とした。

「ほれほれ、落ちこんどる暇はないで。改めて今度こそちゃんと勝負になりそうなのを選んでや?」

「痛たたた?! わ、分かりましたからちよつとは手加減してくださいよ!」

バシバシと遠慮のない茜の励まし(?)に、ゆかりは顔を上げて周囲をぐるりと見渡す。

「うーん、そうですねえ……だとするをやっぱりスコアが出るものが分かりやすい

ですかね？ だけど二人とも得意なものは違うし、なるべくフェアな勝負にするには……」

考えが煮詰まって来たのか、独り言というには少し大きな声でつぶやいていたゆかりの視線が一点で止まる。

「そういえばあかりちゃん、確かドラムマスタープレイヤーでしたよね？」

「え？ うん。 あ！ でも最近プレイし始めただけだからそんなうまくはないからね?!」

「分かってますよ。……それでマキさんはバンドのギターボーカル、と」

「いや、それはそうだけどさあ。リアル楽器ができるからってゲームができるわけじゃないよ?」

ゆかりの視線が、ギター&ドラムマスター、通称ギタドラと呼ばれるセッション可能な音ゲーに向いているのに気づいたマキは、そう釘を刺す。

しかしゆかりは「だからこそです!」と音量を上げた。

「あかりちゃんはゲームプレイヤーだけど初心者、マキさんはゲーム未経験者だけど実楽器経験あり。条件は違いますが、実力としてはいい感じのバランスだと思いますよ?」

やたら自信満々なゆかりに二人は顔を見合わせる。

「……あかりちゃんは本当に初心者なんだよね？」

「うん。……そういうマキさんこそ本当にプレイしたことないんですよ？」

「まあ別にゲームじゃなくて本物が弾けるしねえ……」

同じ曲をプレイするとは言えギターとドラム、ゲーム性は違う訳で無条件にいい勝負とは言えないが、リアル未経験のゲーム初心者とリアル熟練のゲーム未プレイ。考えてみれば、確かにこれ以上に結果が予想できないフェアな勝負は無いのかもしれない。

そう結論付けた二人は、いまだ三人十二人を緩やかに取り囲む群衆を割って、決着をつけるためセッション用のゲーム筐体をはさんで向かい合った。

「そういうえば、曲選択はどうするんですか？」

ステイックをくるりと回して、手ならしにドラムを叩きながらあかりが尋ねると、操作を確認していたマキが答える。

「あー、こういうのって二プレイ二曲とかなんでしょ？　じゃあ一曲ずつ選ぶ？」

「ふふ、そこは私がチョイスさせてもらいます！」

ゆかりの声に二人が振り向くと、ゆかりはギタドラから少し離れたところの、太鼓の音ゲーの陰に置かれている少し古そうなゲーム筐体の前に腰掛けるところだった。

「えー……。ゆかりんがゲーム見るとじつとしてられないのはもう諦めてるけどさ、それでも最初くらい見ててくれてもよくない？」

「ふふふ、まあまあマキさん、大丈夫ですよ。しつかり二人の勇姿は最後まで見てますから」

マキの不満そうな声を歯牙にもかけず、ゆかりは硬貨を投入してゲーム画面へ向かう。

と、二人のギタドラの画面に『セッションプレイヤー参加』と表示された。

「え？ 何これ？」

初心者とは言え経験者のあかりですら初めて見る表示に戸惑っていると、群衆の一人が興奮したような声を上げる。

「おお！ あれはキーボードマスター！ って事はマスターシリーズのフルセッションじゃねえか！ 初めて見たぜ！」

「キ、キーボードマスター？」

思わず振り返って尋ねたあかりと興味深そうに筐体裏から身を乗り出すマキの視線を受けて、彼は頷く。

「そう、かつてマスターシリーズは今のギターとドラムの他にキーボードがあったんだ。俺は下手だったけど、上手い奴がプレイすると本当に演奏してるみたいでカッコ良く、見るだけでも楽しくてな……。だが、実際のキーボードを模したことによる圧倒的なキー数と、それによる高すぎる難易度。それらのせいでプレイヤーがほぼおらず、

僅か三代、一年でほとんどのゲーセンから姿を消してしまった幻の音ゲーよ。まさかその筐体を、そしてプレイをまた見ることが出来るとは思ってなかったぜ……」

「そんなものがあつたんですね……」

説明を聞いたあかりが視線をゆかりへ向けると、ゆかりは振り向いてとっておきのおもちゃを取り出す子供のような満面の笑顔を浮かべた。

「まさか私も知ってる人がいるとは思いませんでしたね……。一番大好きな音ゲーでしたから、オーナーに頼み込んで残してもらったんです。残念ながらも新曲の更新が来ることはありませんけど……」

そこでゆかりは胸を張ると右手を胸に、左手を先ほどの彼に向ける。

「折角なので、そこのお兄さん！ 元プレイヤーのよしみで何か曲のオーダーはありますか？」

「お、いいのかい？ じゃあ嬢ちゃん他のゲームを見るに結構な腕前そうだし、例の最高難易度と言われたアレとかいけるかい？」

「ああアレですね！ 勿論です！ このゆかりさんにお任せです！」

「ちよ、ゆかりん！ 僕これやったことないって言ったじゃん?！」

「わ、私だつて初心者なんですからね?！」

最高難易度と聞いて焦る二人の制止も届かず、画面には「Ready?」の文字が浮

かんだ。

「ああもう！ こうなったらぶつつけ本番でやってやる！」

「ぐ、マキ先輩までやけに……それなら私だって、散々お姉ちゃんに引つ張りまわされた実力見せてやりますよ！」

やけくそ気味に二人はギターとスティックを構えた。

「さあ！ あかりちゃん、マキさん！ 行きますよ！」

——「なあ葵、これはもうゲーム勝負じゃないやんな。全く、ウチらは一体何を
見せられとるんやろなあ」

三人を取り囲む群衆から少し離れて、茜はもう何曲目か忘れてしまった三人のプレイングを眺めながら、同じ光景をレンズ越しに見る妹へ声をかける。

「そうですね、強いて言うならライブもどきでしょうか？」

マスターシリーズの特徴である、実際の楽器に近く作られ、音符以外でもちゃんと音が出るという仕様。それを利用しゲームの譜面をしっかりと押さえながら追加でアレンジまで加えて弾いているゆかりと、それにヒイヒイ言いながらも楽しそうに合わせる二人。最初は最高難易度に手も足も出さず地を這うようだったスコアグラフも、今やクリア

ラインを超えていて、聞けるプレイングは出来ている。

周りを取り囲む群衆ももうゲームを見に来ているというより、ゲリラライブに出くわしたファンのごとく、あるものは聞き惚れ、あるものは曲の合間に歓声を入れ、あるものはスマホを構え、と各々盛り上がっていた。

「やよなあ……全く、折角の計画も誰かさんの暴走で台無しやで」

「と、いう割には随分楽しそうに見えるのは私の気のせいでしょうか？」

葵の言葉通り茜は隠すでもなく、くつくつと笑っていた。

「いやいやいや。そら楽しくない訳があらへんやろ？ 自分の計画や予想通りにしか動かん現実なんてつまらんモンよ。しかもきつちり二人は勝負の事なんか頭から吹っ飛んでそうやしなあ」

「そう言いつつ、一番この状況を面白がって一番最初に勝負を忘れてたのは姉さんですけどね」

「う。し、しゃーないやろ！ 確かに結果をあやふやにするっていう手筈やったけど、まさかこんな形で回りまで巻き込んでしてくるとはウチだって思つたらんかったんやから！ 第一そういう葵はどうやねん、勝った方負けた方確認しとるんか？」

「ええ、それはもう……」

と、何気なくデジタルカメラを確認して最初のプレイ時のスコアを確認しようとした

葵だったが、不意を突いて伸びてきた茜の手に液晶を隠されてしまう。

「勿論、カンニングはなしやでー」

むう、と僅かに唸った葵だったが、にやにや顔の茜に降参する気にはならなかったのかしばらく考え込んだ後、口を開いた。

「勝った方は置いておいて、負けた方ならわかりますが」

「ほん？」

負けた方が分かるなら勝った方もわかるやろ、と茜が突っ込む前に、姉だけがわかる程度にいつもより早口で葵は続ける。

「昔から言われているじゃないですか『惚れた方が負け』だと」

「はっはっは、つちゆう事は二人とも負けって事か！なるほどなるほど、葵も苦し紛れにしては的確な事言うやんか」

「……別に、苦し紛れなんかではありません」

「なんやん、そんなむくれんでもええやんかあ」

茜はぷい、と無表情で顔をそむける葵の頭を捕まえひとしきりぐりぐり撫でまわし、それからニヤリとした笑みを三人へと向けた。

「まあ、ウチらとしては本当に百点満点の展開よ、なあ？」

「ええ、全く」

勝負の終わり

……結局、今日の勝負は一体どうなったんだろうか。

先ほどからベッドの上で落ち着かなく転がりながら考えるのは、その事ばかりだ。

音ゲーがひと段落ついた時に、ふと結果はどうだったんだろう？ と確かに疑問には思ったのだ。

……だけど、自分が負けていたらと思うと怖くて、そんなときに「さあ、次はレースゲームをプレイしに行きますよ」という楽し気な声に引つ張られ、結果を聞くのは後でもいいかって先延ばしにしてしまつて……そして三人でその後もいろんなゲームをしている内に、頭の中から勝負の事なんかすつぽ抜けてしまつていた。

「でも、楽しかつたなあ……」

今日みたく以前のように——といつても二人つきりではないのだけど——一緒に時間を過ごしたのは随分と久しぶりだ。

考えてみれば、最近はずつと二人で争つてばかりでまともに話せてすらいなかった。それなのに今日は——否、今日だけじゃない。

ここ三日、勝負が始まつてからずつと楽しかつた。久しぶりに一緒にいれて、話して、

笑顔が見れて、そして……。

……そして、それと同時にずっと邪魔者とか思っていなかった存在が、思っていたほど意地悪でも性格が悪い訳でもない知ってしまった。

顔を思い出ししても、以前のように嫌な気持ちにはなれない。

まあ確かに、これから教え教えられの関係になるからそんなじや困るんだけど。

少し前までは考えもしなかった関係に少し笑ってしまう。

……だけど。

「……い。だけどそうだからといって、やっぱり自分が一番の存在だという気持ちに変わりはない。」

「あー、なんで思い切って聞かなかったんだらう……」

自分のつぶやきだけが妙にしんとした部屋に木霊する。

もしちゃんと聞いていれば、もっと今頃すつきりした心持でくれたのに。

……否、それはあくまで自分が勝つていれればという願望の混じった予想でしかない。

もし勝っていれば、こんなことで悩まず明日の遊園地の為の服を選んだり、アトラク

ションを確認したりと、少し落ち着かないながらも心晴れやかに過ごしていることだら

う。

「……ただ……もし、もしも自分が負けていたら。」

想像するのも怖くなって、もう一度スマートフォンをロックを外すが、新着を知らせる通知はやはりない。

そりやそうか、だってもし連絡が来たらずぐわかるようにと音量最大に先ほど設定したばかりなのだから。

ため息交じりに携帯を元に戻す。

そもそも、こんな風に連絡が来るものなのだろうか。

いつも通りならあの姉妹が勝負終わりに出てきてなんらか連絡をくれるはずなのに、今日はいつの間にか消えていて、これからの事はさっぱりだ。

だけど、勝者には明日ペアチケットで遊園地デートに誘って貰うと言っていたし、勝っているならやつぱりなんらか連絡があってもよさそうなものだが……。

もしかしてやはり自分は負けていて、だから連絡が一切ないのだろうか。

そうだとしたら、週明け楽しそうに日曜の事を話しているだろう二人に対してどんな顔をすればいいんだろうか。否そもそも――

思考が無限に負の方向への螺旋に迷い込みそうになったその時だった。

大音量のSNSの通知音が耳元で鳴り響き、思わず体が跳ねる。

緊張に震える手で取り落としそうになりながらなんとかロックを外すと、現れたのは結月ゆかりからの新着メッセージがあるという表示。

ごくりと乾いた喉に唾液がひっかかりながら、震える指を『開く』に近づける。

指が画面に接し、閉じそうになりそうなる目を何とか薄目にかけてその内容を脳へと送り。

「やっつたああっ!!」

スマートフォンを残し、ベッドから飛び起きた。

明日の服を選ばなければならぬし、待ち合わせ場所までの電車も調べないといけなし……：：：：そういえば、今日はまだお風呂にも入っていない!

慌てて着替えをもって彼女は部屋から飛び出した。

暗い部屋の中、まだ煌々と光るスマホの画面には短く一文『明日遊園地前まで来てください』と、そう表示されていた。

ゆかりの選択

「……やっぱり少し早すぎたでしようかね？」

結月ゆかりはちらりと遊園地前の噴水の中央に立つ時計塔を見上げ、それからここに来ればすぐ自分の姿が分かるようにと、駅へ続く道路側の噴水の縁に軽く腰掛ける。

日向ゆえに少し暑いのが、その分さらさらと背後で流れ落ちる水音が心地よい。

約束の時間まではまだ随分とあるが、待ち合わせ相手が早く来ないとも限らない……否、性格を考えればほぼ間違いない早く来るだろう。

時間を持て余すという考えてしまうのは、やはり昨日の連絡の事だ。

「結局、はつきり伝えられませんでしたね……」

本来なら昨日の夜の時点で二人にはつきり伝える予定だったのだが、ここ三日間でちゃんと正々堂々と相手に勝ちたいという二人の勝負に対する真摯さを見てきて、こんな出来レースじみた結果など言うことが出来なかったのだ。

だけどどちらにしろあともう少しすれば、二人とも何も知らずにここにきてしまう。そうすれば結局言わなければならぬ。

少しでも不安な気持ちを落ち着けようと胸に手を押し当ててるけど、もやもやとした心

の黒雲は晴れそうにもない。

……だけど、不安感で言えば二人の方が上なはずだ。

思い出されるのは初日の悔しそうなマキの顔や、二日目の肩を落としたあかりの姿。

真剣に勝負して、負けた時のその不安を私はどれだけ分かってあげられているのだろうか。

それだけじゃない、昨夜自分が結果を伝えることを躊躇したせいで、二人とも家についてから随分と不安な時間を過ごさせてしまったんじゃないだろうか？

考えれば考えるほど、真つすぐな二人に対して自分の選択の卑怯さが際立つ。

「全部私が考えたんじゃない……つていうのは、あの誘いに乗った時点で言い訳ですね。よし！ 私も覚悟を決めないと……！」

決意を口に出してはみるものの、不安感は未だ泥濘のように足元へとへばりついてくる。

自分の選択の結果、もしかしたらどちらかに、否二人に嫌われてしまうかもしれないという不安感が。

「怒られるとか呆れられるぐらいで済めばいいんですけどね……」

それくらいなら全然いい。だけど樂觀視しすぎればしすぎるほど、現実が違ったとき落差に打ちのめされることになるのだと、手をぎゅつと握りこむ。

……ただ一つ最悪の状況が現実になったとしても、私が二人から嫌われることになったとしても、尚そこに希望を見出すならば、おそらく今の二人なら仲良くできそうだという事だろうか。

勿論勝負を通してお互いの事を知り、少しでも仲良くなるきっかけになったらいいなという思いはあつたが、実際にそうなのはやはり二人自身の性格によるものだろう。

それに比べて自分と来たら……。

雲が陽光を遮り下を向いたゆかりの背中を陰で覆う。

そのまま深い自責の沼へ落ちていきかけた時だった。

「ゆかりん！」

「ゆかりお姉ちゃん！」

ハモつた呼びかけに顔を上げると、二人がこちらに向かつて駆けてきているのが見えた。

やっぱり指定した時間より随分早い、早く来ていて正解だったと現実逃避に毒にも薬にもならないことを考えてから、よしっ！ と気合を入れて立ち上がると、いつものように笑顔を浮かべる。

「おはようございます、マキさん、あかりちゃん」

二人はよほど急いでいたのだろうか、ゆかりの前で立ち止まると膝に手を突き、荒い息を整える。

息を切らせながらも先に口を開いたのはあかりだった。

「あの、おねえちゃん！ いったいどういう事なんですか、二人ともここに来るようになって連絡が来てるんですけど……」

「そうだよ！ ここの駅で偶然あかりちゃんにあつたと思つたら、自分も遊園地前に来るように言われたつて言いだして、スマホ見せてもらつたら本当だし……」

「えっと、それはですね……」

覚悟を決めた筈とはいえやっぱ二人に嫌われたら、と考え言いよどんでしまったゆかりに対してマキが尋ねる。

「……もしかしてあれつて、最後の結果発表をここでするからここに集合つて意味だった？」

「え?! ……でも、そつか。二人とも呼ばれてるつて事はそうだよね……」

途端、二人の表情が暗いものへと変わつてしまう。

……ああ、まただ。

また自分のことで頭がいっぱいになりそうだったけど、少し考えてみれば二人の方が不安に決まっていた。

散々結果を待たせた挙句に選ばれたと期待させて、そして今また選ばれていないかもと思わせる。

本当に、自分が自分のことしか考えなくて嫌になりそうだ。

だけど目の前で恐々こちらを見つめる二人にそんなことは関係ない、私はシヨルダーバッグに入れていた二枚の紙ををそれぞれの手に握り、二人へと差し出した

「二人とも、御免なさいっ！」

思い切り頭を下げながら。

「えっ……えっ？」

二人とも同じ気持ちだったのだろう、まずは唐突に謝られたことに対する驚きが、そして私が二人に差し出した『それ』を受け取つての困惑が続く。

「えっと……ゆかりおねえちゃん、これってペアチケットだよね？」

「でも、どういう事？ 私たちに二枚渡しちゃったらゆかりんの分がないじゃんか」

そう、私が二人に渡したのは一組のペアチケット、勿論あの時茜さんが掲げていたアレだ。

と、そこでタネ明かしもせずいきなり謝っても二人には何のことか分からないではないかとうやくく思い至り、そそくさと頭を上げ、少し早めに来た最大の目的である当日券を鞆から取り出して二人に見せる。

「私の分はこれです」

「それって当日券だよな？ ゆかりんにはペアチケットがあるのにわざわざ何で……」

ここからが今回の計画の核だ。

不思議そうなマキさんに対して、私はセリフを確実に一つ一つ確認しながら口に出す。

「そうですね、そもそも二人とも初日に茜さんが語った今回の勝負についての詳細は覚えてますか？」

「え？ どっちがゆかりんにふさわしいかってのを決める三本勝負じゃないの？」

「改めてそう言われるとちよつとアレですが……今はいいでしょう。確かに勝負内容はそうでしたが、では結果発表はどうするか、茜さんが言った内容を覚えてますか？」

「え……えーつと……」

「確か、今日お姉ちゃんが一緒にいて楽しかったか、これからも一緒にいたい相手に対してペアチケットを使って遊園地に誘……う……つて！ あーー!!」

思い出そうと考え込んだマキに代わって答えたあかりは途中で気づいたのだろう、大きな声をあげた。

「え？ 何？ どゆこと？」

混乱と興奮冷めやらぬあかりは、まだ理解できてないマキの腕をつかんで説明をはじ

めた。

「何って、言葉の通りじゃないですか！ 茜先輩が言った、この結果発表はお姉ちゃんが一緒にいたい相手をペアチケットで遊園地に誘う……この一文のどこにも勝者を誘う、なんてことは言っていないですよ」

「……あ。で、でもどちらにしろ一緒にいたい方をペアチケットで誘うなら……ああつ！！」

手にしたペアチケットと、目の前のあかりが握りしめるペアチケット。その二つを見比べたマキもどうやら気づいたようだ。そうなれば後は——

「そうです！ 別にペアチケットはゆかりお姉ちゃん一枚使ったうえで、私たちのうちどちらか一人を選んで渡さなければならない、とも言っていないですよ！」

「た、確かに……。え、でもじゃあ、あの三回戦勝負は……」

「——そうです。ごめんなさいマキさん、あかりちゃん。あの勝負自体の結果自体がどうあれ、私は茜さんがあの勝負の条件を口にした時からこうやって二人にペアチケットを渡すつもりでした」

二人が理解したところで、私は再び頭を下げる。そこには確かに二人が抱く自分への気持ちをかけた、真剣な勝負を踏みこむような決断に対する申し訳なさもあった。

だが、同時に今から言う事に対しての二人の反応を見なくて済む、と安堵してしまっ

てもいる自分が恨めしく情けない。

「二人が今回の勝負にどれだけ真つすぐだったかは、一回戦目と二階戦目でそれぞれ負けたときの顔を見て、十分分かつている……つもりではあります。だからこそそれに対して、私がこんなあいまいな結果を出した事については誠実じゃないと思われても仕方がないでしょう。……そして、それに失望されたとしても」

「……………」

二人は何も言わない。私は息詰まりそうな胸に手を押し当てながらも続ける。

「でも、私にとつて二人とも本当に一番大切な人なんです！ あかりちゃんは小さいときに本当の姉妹みたいに一緒に過ごして、いろいろ遊んで、その中には振り回しちゃったりしたこと何度もありますけど、それでも『お姉ちゃんお姉ちゃん』って慕ってくれて。マキさんはそんなあかりちゃんがなくなつて、私が沈んでいた時に気にかけて手を差し伸べてくれて、最初はぶつきらぼうに断つてしまいましたけど、それでも何度も誘つてくれて、元氣が出るようにって色んなところに連れてつてくれて……」

もつと詳細に語りたい二人との思い出はまだまだ沢山あつて、話し始めると止まらなくなりそうだったけど、何より伝えないといけないことを思い出してぐつと堪えた。

「……今の私がこうして居れるのは、二人のおかげなんです。二人の片方だけじゃなくて、二人それぞれとの時間がかけがえのないもので……だからマキさんと一緒に学校に

通えて、しかもそこにあかりちゃんが入り込んでくるって聞いた時は、すごく嬉しかったんです。これでやつと大好きな二人と三人でいられるって……！」

ここ一か月ずつと押さえていた気持ちが一掃された。視界がじんわりと熱く歪む。

「だけど、二人とも争ってばかりで全然三人で集まることなんてなくて。それどころかだんだん二人から避けられてるみたいにあう時間自体が減って……凄く、寂しかったんです。だから茜さんがあの条件を出してきた時に、つい考えてしまったんです。いつそのことこの勝負を使って三人で遊べるようにしてしまおうって」

それを聞いて思い当たるところがあったのか、あかりちゃんが訊いてくる。

「じゃあ三人での勉強会を提案したり、私がマキさんに料理を教えてもらおうと頼んだ時口添えしてくれたのは……」

「はい、そうです。出来れば三人で定期的に集まれる機会なんかがあったらいいなって」
そう、もし二日目の勝負の後あかりが自分から教えてほしいと言いつき出さなければ、その時は自分からそういう方向にもっていく予定だったのだ。

「……真剣に勝負をしていた二人の努力を無碍にするような決断でごめんなさい。でも……それでも、二人ともやつぱりかけがえのない存在で、どっちがどっちより上だとか下だとかなんて私には決められないんです。本当に……ごめんなさい」

その後が続く沈黙はどれほどだったのだろう。十秒？ 一分？ あるいはそれより

もつと長く？ 否もしかしたら一瞬だったのかもかもしれない。 だけど私にとってはどこまでも続くような長い時間だった。

「ゆかりん」

「ゆかりおねえちゃん」

二人から不意にかかった声に、思わず肩を震わせてしまった。

「……はい」

審判を受ける罪人のようにゆっくりと顔を上げる。一体二人はどんな表情を浮かべているのかと。

自分勝手な結論に呆れている？ それとも怒っているのだろうか？ いや、軽蔑されていても……

頭を上げさせまいとヘドロのようにまとわりつく不安に押さえつけられながら、だが。ようやく顔を上げた私の目に映ったのは

「なーにそんなことくらいで泣きそうになってるのさ」

「本当ですよ。泣き虫な所は変わったと思ってたけど、気のせいだったみたいですね」

笑顔を浮かべた二人だった。

「何で……。二人とも勝負に真剣だったのに、それが無かったことにされて、その、怒ったり……。愛想つかしたりしないんですか……。？」

「あー……まあ100%納得してるかって言われたら、今までの勝負は何だったのさって、ちよつとまだ小骨が引つかかったような感覚はあるけど……。だって数学勝負の前日、すつごく頑張ったんだからね?! 人生で初めて参考書だって買ったし!」

「う……それは……」

「そうですよ! 私だって焦がした卵焼きとか揚げそこなつた唐揚げとか朝食べて、しかも帰ってからお弁当の残りも食べたせいで体重が——! いや、全然問題ない範囲ではあるんですよ? 問題ない範囲ではあるんですけど、それでもやっぱりちょーっただけ増えちゃいましたし」

「いや、それは……はい……」

少しだけ言いたいことがないでもないが、やはり二人とも思うところはあるようだった。

だが腕を組むマキと頬を膨らませるあかりに、ゆかりの頭が再び下がりそうになった所で二人の口調が柔らかく、そして少しだけ悲しげなものへと変わった。

「……ですけど、ゆかりお姉ちゃんの話聞いてて思ったんです。ああ、こつちに来てから全然お姉ちゃんの事を考えてなかつたなって」

「……え?」

「うん、そうなんだよね……。言われてみれば、確かに僕ら二人でゆかりんをめぐるって

争ってはいたけど、肝心のゆかりんは置いてけぼりだったな、ってさ」

「マキ先輩の言う通り、相手が羨ましいからって自分たちで勝手にお姉ちゃんに抜け駆けしないよう、なんてルールを作って、そのせいでお姉ちゃんに寂しい思いをさせてたんだなって……」

「うん、ゆかりんがさみしがり屋だつてすっかり忘れてたよ。確か初めて会った時も人見知りして人を避けてたのに、それと同時に誰かに話しかけたそうに様子を伺つてて……：：：：：そういえばそれで放っておけなくて話しかけたんだつたかな」

「へえー。マキ先輩とお姉ちゃんが出会った時つてそんな感じだったんですね……。まあ、私がお姉ちゃんの誘いを断つた時も凄くわかりやすく落ち込んでたりしましたし、やっぱりお姉ちゃんは今から変わつてないですね」

「なんていうか、ウサギ？　みたいだよね」

「あー！　そうどうそうです！　まさしく寂しいと死んじやうウサギつて感じですよね！　」

あれ？　なんだか話が変な方向に行つてませんか？

「でもその割に頑固な時は凄く頑固なんだよね」

「それつてもしかして、何か欲しいものがある時か、勝負ごとに関してじゃないですか？

そういうところはすごく貪欲で頑固でしたよ……：：：：：年下の私に対しても」

「ああー……確かに言われてみれば……って、子供のころからそうだったんだ」

「そうですね。昔私が運良くゲームに勝ちでもしたら、それこそお姉ちゃんが勝つまで絶対逃げられなかったんですから……」

「あ、あの……ちよつと二人とも……？」

不安になって声をかけたところで、ようやく二人とも私の存在を思い出してくれたらしい。

「あーつと、まあゆかりんの昔の話は『今は』置いておくとして……ともかく言いたいの
はさ、別にゆかりんが出した結論に対して怒ったりしてない、つてこと」

「でも……」

「あーもう、ぐちぐち考えない！ 僕らだって、寂しがりやのゆかりんを放置してた訳だし、それでおあいこつてことで」

びしつと人差し指を突き出すマキさんに圧されて、あかりちゃんの方を見る。

「そうですね。それに、勝負だつて一勝一敗一分けみたいな感じでしたしね。……それに決着をつけようにも、今から改めて勝負つて気分にもなれないですし」

あかりの視線を受けたマキはおどけたように首を傾けて同意する。

「だね。何ていうか今回の一件で色々あかりちゃんのことを知って、もうただの邪魔者、つて感じには思えないしね。それよりさ！ 改めて確認だけドペアチケットをくれたつ

て事は、ゆかりんは僕とこれからも一緒にいたいってことでいいんだよね？」

「もちろん私もそうですよね？」

ニヤリとどこか自信ありげにチケットをひらめかせるマキと、キラキラした瞳で両手にしつかりチケットを握り締めるあかり。

さつきまで不安と恐怖で全身を拍動させていた心臓が、今は違う意味で体中を熱くさせるように血液を送り出す。

「勿論です！ 私にとつて二人は一緒にいて時間を忘れるほど楽しくて、これからも一緒にいてほしい大事な存在なんです。だから——」

私はずつと言いたかった願いを口にする。

「——だから、どうか。そんな大事な二人と仲良く三人で一緒にいたいって、色んなところにいったり経験したりして色んな思い出を作っていくたいって……そんな私の我儘を聞いてもらえませんか？」

それを聞いた二人は息もピツタリにニツと笑った。

「勿論！ っていうか僕も最近ずつとゆかりんと話せてなくてゆかりん欲がたまってるから、むしろこつちからお願いたいだし！ これからはまた中学の時みたいに、学校帰りにふらつとどつか寄つたりしようよ。それで……あー、何か何話したかこんな風に思い出せないくらいどうでもいい話したりさ。あ、もちろんあかりちゃんも一

緒にね?」

「ちよつと! なんですかその私のハンバーガーのピクルスの扱いは?! 私だつてこつちに帰つてようやくお姉ちゃんとまた遊べるぞー、と思つてたのを今までずつと押さえてきたんですからね! というわけなので、色んなところに今度は私が引つ張りまわしますからね? こつちに帰つてくるつて決まつた時からずつと一緒に行きたいところをいっぱい調べておいたんですから、覚悟してくださいよゆかりお姉ちゃん? あ、マキ先輩は来たかつたら一緒に来てもいいですよ?」

「うがー!! 何で僕だけソーサーに乗つてる砂糖みたいな扱いなのさ?!」
「ふーんだ! 先にマキさんがそういう扱いしたのが悪いんですから!」

またそんな事でいつものように、だけど以前みたいな険のある感じではなくどこか冗談めかして争い始める二人に。そして、自分の覚悟を決めた筈の一言をあつさりを受け入れた二人に、自分が色々思い悩んでいたのは何だつたんだと力が抜けて、可笑しくなつて

「…………ふふつ」

つい笑つてしまつた私を見て、二人はピタリと争いを止める。

「…………お姉ちゃん、ようやく笑つてくれましたね」

「ほんとだよ、朝から思いつめたり泣きそうだったりさ……。やつぱりゆかりんは笑つ

てるのが一番可愛いつて！」

「もう！ 勝手なことばかり言わないでくださいよ、ずっと不安だったんですからね？
もしかしたら嫌われるかもしれないって」

「それは絶対ない（です）から!!」

食い気味にそろった二人の声が響いた。

「もう！ ゆかりお姉ちゃんは心配しすぎです！ 私がお姉ちゃんのことを嫌いになる
ことなんて絶対ないですから！ ま、マキ先輩はどうだかわかりませんけどね？」

「ふーん。ま、あかりちゃんがどう思ってもいいけど、そうやって露骨なアピール
ばかりしてる人ほど、いざっていう時には手のひらを返したようになってっちゃうんじや
ないかな、って僕は思うけどね？」

「む、マキさんにしてはちよつと知的な返し方をして……!」

「ちよつと、人を馬鹿みたいに言わないでよ!」

相変わらずちよつとしたことで争う二人に、ゆかりは眉を八の字にしながらもついつい
口角を上げて独り言ちる。

「寂しく思ってた理由の一つには、何だかんだ二人とも息ピッタリに争ってて、ちよつと
だけ羨ましいなって、妬いてるところも多少はあったんですからね？」

勿論好んで喧嘩をしたいわけではないが、喧嘩するほど仲がいいという言葉もあるく

らいなのだから。

「え？ ごめんゆかりん、今何か言った？」

少し遅まきに、ゆかりが何か言っていたのに気づいた二人が、手を止めてこちらを見る。

「いいえ？ 何でもありませんよ？」

「嘘です！ そういう風に言うときのゆかりお姉ちゃんは、大抵何か言いたいことがあるときじゃないですか」

「もう、本当に何でもないですから！ ほら、折角来たんですから話してるだけで時間を潰すなんてもつたいたないじゃないですか！」

まさか二人とケンカしたことが無いから、二人のケンカが羨ましかったなんて言う訳にはいかななくて、私は二人の間に割り込んでそれぞれの手を握って遊園地へと駆け出す。

「わわ?! 待ってよゆかりん！」

「つと、相変わらずいきなりなんですからっ！」

たたらを踏みながらもなんとかついてくるマキさんと、やれやれといった感じを出そうとしながらも口元が緩んでるあかりちゃん、二人を引っ張って入口へと向かう。

「さあ！ 今日乗る物全制覇しますよ二人とも！」

いつの間にか影を落としていた雲は消え、初夏の日差しが私たちを照らしていた。

勝負の裏側と小さな一歩

「ふう……流石にちよつと疲れましたね……」

ゆかりはフードコートの一画にある白いプラスチックのテーブルセットに腰掛けて、空を仰ぐ。

昼ご飯の時間帯は空いてるからとアトラクションを回るのが優先した為、時刻的にはおやつとの時間といった方がいいだろうか。席に座っている人影もまばらで空きテーブルは探すまでもなく見つかった。

「あかりちゃんはまたご飯買いすぎたりしてないでしょうか……マキさんが止めてくれるでしょうし、大丈夫ですよね？」

あかりとマキは現在買い出しに向かっており、ゆかりは場所取りで先に座っている為一人である。

本当は食べ物になると見境のなくなるあかりに席取りを頼みたかったのだが「それだと、マキ先輩だけゆかりお姉ちゃんと一緒にいる時間が長くなるじゃないですか！」との抗議があり、公平を期すため二人に行ってもらうことになったのだ。

「……何というか、二人がいないとやっぱり静かですよね」

二人のうち片方と一緒にいた時も十分賑やかだったが、こうして二人ともと一緒にいるとやっぱり賑やかさというか姦しさが違った。

さして二人と別行動しはじめてから時間が経っているわけではないし、近くにいても分かつているのに、それでも多少しだけ寂寥感がこみ上げてきてしまうほどには。

「なーんや結月ちゃん？ もしかして寂しいんか？」

「!!……もう、いきなり話しかけないでくださいよ。びっくりするじゃないですか」

不意に背後からかかった声にびくつとして振り返ると、ひらひらと手を振る茜が立っていた。

「はっはっは。悪い悪い。話しかけるつもりはなかったんやけど、結月ちゃんが随分黄昏とったからなあ。つついっい声、かけてもうたわ」

「そんなに、ですか？ それより茜さんは——ああ、例の校内新聞ですか」

的を射た指摘を受けて照れくさくなったのをごまかそうと、ゆかりは茜の方へ話を振る。

「せやせや。初日の勝負から今日の結果までまとめて明日発行やからな、今日が山場よ」
茜は片脇に挟んだノートパソコンを指でコンコンと叩くと、わざとらしいほど大きなため息をつく。

「ふふ、頑張ってくださいいね？」

「お？ 最初はあんなに抵抗してたのに、応援してくれるんか？」

「だって、あんなこと言われたら協力しないわけにはいかないでしょう？ 『二人を仲良くさせたくないか？』なんて言われたら」

茜はふっ、と軽く笑む。

「うちはそこまで言つてへんで。ま『二人を仲良くさせれるかも』とは言つたけどな」

「そうでしたっけ？ でも、結果としてこうして上手くいった訳じゃないですか」

そう、勝負が決まったあの日、双子に連れていたゆかりが最初に茜から言われたのがその言葉だった。

「とはいえ最初、茜さんからそういわれた時は何を言ってるんだって思いましたけどね」
「ま、あれだけ二人を煽つた後でこんなこと言われても、すんなりとは信じてもらえんやろなど自分でも思うからなー。だからその分計画はしっかり説明したつもりやっただけ？」

「ええ、だからこうして協力したんじゃないですか」

続いて茜が語つた計画の概要はこうだ。

二人の争いがエスカレートしていつている原因には、お互いの相手に対する嫉妬も確かにある。だが、それ以上に二人で勝手にルールを作り、相手のせいでゆかりに会えないと思ひ込んでいるのが最大の原因なのだ。

——『ならばその思い込みを壊して、相手がいても、いやむしろ相手がいるからゆかりに会える状況を作ってしまえばええんや!』と。

故にゆかりが一戦目の後に三人での勉強会を提案したのも、二戦目の後にあかりに料理を教えてあげてほしいと口添えし、自身も参加するように話をまとめたのも全て計画通りだったのだ。

「まあ、三戦目で結月ちゃんが暴走した時はちよつと焦ったけどな」

「それは……あんまり言わないでくださいよ。確かに浮かれ過ぎてしまったのは事実ですけど、結果として上手くいったわけですし」

「ま、確かに計画以上に上手く行ったのは事実やけどな」

誤魔化すように笑むゆかりにつられて、茜もニヤリと口角を引き上げる。

本来の計画ではゆかり対二人のホッケー勝負に持ち込んだ後、二人に適度に点を取らせながらも決着をつけさせず、引き分けという形での幕引きを考えていたのだが……実際どうなったかは昨日の通り、二人……否三人とも勝負の事すら忘れるといふ事態になった訳だ。

「記事にする分にも、無難に引き分けでしたーってより盛り上がるよろしな」

「……それに關してなんですけど、良かったんですか? こんな風に決着がつかなくて」「なんや、結月ちゃんはどっちが一番、二番って順番つけたくなかったんちゃうんか

「？」

「いやそれはそうなんですけど……あんなに周りの人たちを煽っておきながら決着がつきませんでしたー…なんて、納得してもらえらるんですか？」

「ああ、なるほどな。……巻き込まれとるのに、随分優しいんやな？」

「あ、いえ。ただちよつと気になったといえますか……」

慌ててそう付け加えるゆかりだったが、茜がからかうような笑みを浮かべているのに気づいて言葉を止める。

「くく、安心しいや結月ちゃん。ウチら新聞部としても決着がつかん方が助かるんやから。だって考えてもみいな、学園のアイドルマキやんと中等部の新星きずつち、確かにどつちかが勝ったーってなった方がセンサーショナルな見出しは書けるわ。でも、盛り上がるのはその一度きりでしかないからなあ」

「……なるほど」

「という訳でこれからもちよくちよく話題提供頼むでー、学園が誇る三美少女がいちやいちやしとるとか、それだけで十分記事になるし、それにウチとしても……ぐえっへっへ」

「うわぁ……」

欲望に忠実に涎を拭う茜に、流石のゆかりも露骨に引いてしまう。

「おっと、すまんすまん。でも、結月つちちゃんもなんだ言つて二人の事好きやったんやろ？ やからウチかて今回の作戦が成り立つかもーって思つたわけやし」

「どういうことですか？」

茜はゆかりの肩に手を回すとグイッと顔を近付けて

「態々言わせんでもええやん？ あのボイスレコーダーでの会話で上げてた最初の二つ、あれつてきずつちとマキやんを想像して言つたんやろ？」

「いや、あれはそういう訳ではなくて……」

困つたように口ごもるゆかりに対して、茜は目を輝かせる。

「まさかそう意識すらしとらんかつたつて事か！ ちゆう事は、もしかして深層意識で二人の事を思い浮かべとつたんやないやろか。そうやとすると……あー、うん。ええやん、めつちやええ!!」

勝手にそんな結論を出して一人で興奮している茜に、ゆかりが何とも言えない苦笑で合わせていると、突然冷たい声が割り込んでくる。

「ねーえーさーんー？」

「……げ」

茜は一瞬にしてピキリと固まって、それからギギギと後ろを向く。

「あ、あー。どないしたんやー？」

そこには相変わらず眠たげな、だが言い知れぬ圧を纏った琴葉葵がデジカメ片手に立っていた。

「どないしたもこないしたありません。記事の進捗はどうなんですか、姉さん？ それとも、ゆかりさんと楽しそうに話している余裕があるって事はしつかり書き終わつてると考えてもいいんですか？」

「う、いや……あとちよいちよいで完成つて所だな……？」

「姉さんがちよいちよいと言う表現を使う場合、これまでの経験から半分終わつていないと認識しているのですけれど？」

「う……」

先ほどまでのつかみどころ無く飄々としていた茜はそこにはいない。そんな姉にも容赦なく、葵は淡々と続ける。

「まだ今日の事はおろか、昨日の事も書き終わつていませんよね？ 新聞つて言つても今日日メインはホームページなんですから、期限は今日の十二時までなんですよ？ それにページの編集や確認も入れたらもう時間はないという自覚は無いんですか？」

「で、でもやな……！ 人間疲れすぎるとパフォーマンズが落ちるつて話もあるし、ちよーつとぐらい息抜きしたつて——あ、ちよ。痛たたたた！？ か、堪忍や、堪忍してや！」

茜の言葉の途中で静かに彼女の肩へと手をかけた葵は、むぎゅむぎゅという音が聞こえてきそうなくらいに力強く、そこを揉み始めた。

「何言ってるんですか茜姉？ 葵は疲れてるといふ茜姉がすぐに作業に戻るよう、献身的に肩をお揉みしてるだけですよ？」

「ま、まあまあ葵さん。茜さんも少し休んだらきつとすぐに作業へ戻ってくれと思ひますよ？」

話を聞く限り自業自得とはいへ見えかねたゆかりが仲裁に入るが、葵は手を止めたもののスンとした表情のまま

「この姉は目を離したらすぐ休もうとするナマケモノ姉ですので、あまり甘やかさないでください、ゆかりさん」

「何やその動物園にある餌をあげないでください的注意は——つて！ わ、分かった！ 今すぐ記事書く作業に戻るから！ だから許してや葵ー!!」

こんな状況でもしつかり突っ込みを入れる茜だったが、葵が軽く肩に乗せたままの手に力をいれた瞬間あっさり和白旗を上げる。

言質が取れたことで一先ず納得したのか、葵は手を止めふうとため息を吐く。

「全く……ページ編集は私も手伝いますから、早いところ一区切りつけてくださいね、姉さん。折角遊園地に来たのに、記事書いただけで帰ったら入園料が勿体ないですから」

「うう、善処するわー」

茜はゆかりに「ほなまたなー」とノートパソコン片手に、肩を回しながら人気の少ない木陰のテーブルへと歩いていく。きっと集中できるところで記事の続きを書くのだろう。

しばらく茜の後姿を見送っていた葵とゆかりだったが、茜が席について再びパソコンを開いたのを確認したところで、葵はゆかりの向かい側へと腰を下ろして口を開いた。

「……さて。ゆかりさんの事ですので大丈夫だとは思いますが、姉に約束の事を漏らしてはいませんか？」

「ええ、大丈夫ですよ」

ゆかりが頷くと、葵は再度ふうとため息を吐く。

「それなら良かったです。再度の事になりますが、くれぐれもあの約束の事について、姉には内密をお願いします」

「あかりちゃんとマキさんが仲良くなれるような機会を作るから、新聞部の公認に賛成して欲しいって約束ですよね？ 分かってますよ」

茜が勝負を宣言した日に提案した計画そっくりの、だが、新聞部の公認という条件付きの約束。

それは茜の計画より二日前に葵がゆかりに提案してきた取引だった。

葵は茜が移動してないことを確認してから頷く。

「それなら結構です。……それで、私としては十分約束を果たしたと思うのですが……ゆかりさんから見てどうでしょうか？」

「そんな回りくどい聞き方をしなくても、ちゃんと賛成はしますよ。ただ他の方の説得とかはできないと思うので、私一人の意見だけで部活に昇格できるかは……」

「それについては心配に及びません。必要な票数の確保は出来ていますから」

「……恐ろしいほどの手回しの良さですね」

平然と表情を変えずにそんなことを言う葵に対して、ゆかりは咎めるように目を細める。だが葵はそんなゆかりの視線を涼し気に受け流して、逆に尋ねる。

「必要だったから行ったままでです。それより私としては、ゆかりさんがこうもあっさり契約に賛同してくれた事の方が、今でも意外ですけれど？」

「……確かに、葵さんから提案された時はとても驚きましたし、最初は裏工作みたいで気が進まなかったですけどね」

「……それでも、あの二人に仲良くしてほしかった、ですか？」

「——二人とも影響力というか、人を引き付ける力がありますからね。あのまま二人がエスカレートしていったら、二人だけの争いでは済まなかったでしょう。そんな状況、生徒会の一員として放置するわけにはいきませんでしたから」

「……それは、一番の理由ではないのでしょうか？」

ゆかりは口元をわずかに弛緩させ、静かに頷く。

あかりが学校に転入してくると聞いて誰よりも喜んだのはゆかりだった。ああ、これで長らく夢見ていた大切な二人と学園生活が送れるのか、と。

だが実際あかりが転入してきてみると、二人はゆかりをめぐって衝突してばかり。そうすると生徒会の一員であるゆかりとしても二人に注意せざるを得ず、思い描いていたのとは逆にマキとの時間まで減ってしまっていた。

その一方で、生徒会役員としての義務感が『この状況を何とかしなければ、二人が争わないようにしなければ』とひたすらゆかりを駆り立て続ける。

……最悪、自分が原因なのだから二人と距離を置くことも考えなければならぬだろうかと考えたこともある。

だけど――

ゆかりは指を絡ませた両手にギュツと力を籠める。

「――やっぱり私自身が、どうしても二人にはそばにいて欲しかったですから」

そう、琴葉葵が今回の約束を持ち込んできたのはそんな時だった。

『弦巻マキと緋星あかり、二人の仲違いを解く方法があるとすればどうしますか?』と。

「……それにしても、ですよ? やっぱり最初に概要ぐらいは教えてくれたって良かった

たんじやないですか？ そのせいで、茜さんが突然勝負を始めようとした時は本当にどうしようかと思っただからですから」

当然ゆかりだっていきなりそんなことを言われて安易に信じた訳ではなかった。しかもどんなに聞いても、葵は頑なに詳細は明かせないとの一点張りで、どうするつもりかも全くわからない。……改めて今考えてみると、なんと怪しい口約束だろうか。

「それに関しては申し訳ありません。ただ計画上どうしても、あの妙なところで鋭いところのある姉を巻き込む必要があつたので、万全を期したかつたのです」

葵はいつもと変わらない口調で、だが本当に申し訳ないとは思っていたのか頭を下げ

る。「いえ、結果としてこうして上手くいったので別に謝る必要はありませんよ」

ゆかりはいえいえと横に手を振る。

結局のところ、最終的にゆかりが怪しいと思いつながらも葵の提案に乗つたのは、彼女は出来ないことを出来るというようなそんな不誠実な人間ではないと、こういうった風

言動の端々から感じ取つた為だった。「ですけど、承諾するなりいきなり演技をしてほしいと言われた時はびっくりしましたけどね。後、葵さんの変わりようにも」

そう、あのボイスレコーダーでの会話は、ゆかりが話しているのをこっそり録音してい

た訳ではなく、最初から葵が用意したプロット通りにゆかりと葵で読み合わせたものを録ったものだった。

その時の葵の様子、本当に友達とガールズトークを繰り広げているような姿——尤もあくまで演技であるのだが——を思い出して、懐かしむようにふふつと笑う。

それに対して葵はよほど嫌だったのだろう、珍しく僅かではあつたが眉を八の字に曲げて抗議する。

「……それはあまり思い出さないでいただけると嬉しいのですが。……それが無理ならせめて、他言だけはしないで頂きたいです」

「わかりました、葵さんの頼みですから絶対他の人には言いませんよ。……といっても、茜さんすらあの声が葵さんの物だと分かっていなかったですし、私がそうだと言っても信じてはもらえないと思いますけどね」

「だといいんですが。先ほども言ったように変なところであのバカ姉は鋭いですから、念には念を入れて、です」

そうは言つたものの、葵もゆかりが秘密を誰かに漏らすような性格ではないと分かっているのだろう、テーブルに手を掛けてゆつたりと立ち上がる。

「それでは、私はこれで——」

「あ。 葵さん」

葵が茜の方へと一歩踏み出したところで、ゆかりが立ち上がった彼女を呼び止める。「はい、何でしょうか？」

彼女が足を止めて振り返ると、居住まいをただしたゆかりが丁寧な仕草で深く頭を下げる。

「今回は、本当にありがとうございます」

「……別に、お礼を言われる必要はありませんよ。あくまでこれはギブアンドテイクな契約なんですから」

そつげなく返す葵に、ゆかりはですけど、と続ける。

「葵さんが居なければ、こんな風に二人を仲良くさせることはできなかつたでしょうから。……もしそうなら、私は二人から距離を取るという選択を取っていたかも知れません」

「私はただ、きっかけを提供しただけです。それに私の計画は姉さんが言った通り、二人にそれぞれ自分の優位な点を相手に示しながら、ゆかりさんに会う機会を提供してフラストレーションを発散させる、そこまでしか考えていませんでしたので。正直言ってあの二人がここまで仲良くなったのは完全に計画外ですし、何より二人の性格によるものでしょう」

それを聞いたゆかりは少し嬉しそうに、そしてそれ以上に自慢げに胸を張った。

「それは勿論、私の親友と従妹ですからね！」

「……成程」

それは何の理由にもなつてはいなかったが、葵にはそれでゆかりの言いたいことが伝わつたらしい。表情は変わらなかつたが、いつもよりその一言は優し気な響き含んでいるように聞こえた。

しかしそれも一瞬の事で、葵はコホンと一つ喉を整えきつぱりと言う。

「何にせよ、私としては約束さえ守つていただければ礼は不要ですの」

「そうですね……。なら！　せめて茜さんにはありがとうと伝えてくれませんか？　先ほど伝えそこなつてしまいましたし、茜さんはこの約束を知らないんですよね？」

少し寂しそうなしたものの、すぐに気持ちを切り替えて続けられたゆかりの言葉に、葵は思い出したように頷いた。

「おっと。確かにそうでしたね。分かりました、姉さんには伝えておきます」

そんな姉に対する相変わらぬのそっけない様子に、ゆかりはここ最近思つていたことを口にするにしました。

「それと——もう少し、茜さんに優しくしてあげてもいいんじゃないですか？」

「それは出来かねます。言つたでしょう、姉さんは甘やかすとナマケモノになる、と」

「——でも、もう少し素直にならないと茜さんに、嫌われてるって誤解されてしまいま

んか？」

ゆかりがそういった瞬間、葵は振り返った状態からはつきりとゆかりの方へ向き直る。その目には猛禽類を思わせるような鋭い光が帯びていた。

「何ですかその言い方は？　まるでそれだと私が姉さんの事を——」

「好きなんですよね、お姉さんの事」

だが、そんな葵の全力の威圧を受けながらも、ゆかりは柔和な笑みを浮かべて断言した。まるで葵の態度が照れ隠しなんでしょうといわんばかりに。

「……………因みに、何を根拠にそんな冗談みたいなことを？」

無言にも一切揺るがないゆかりに対して、葵はようやく口を開く。

「そうですね、見て何となくそうかなってというのが主な理由ですけど……。強いて理由を上げるなら、さつき葵さんの言った『折角遊園地に来たのに、記事書いただけで帰ったら入園料がもつたいたくないですから』ってところででしょうか？　ああ、お姉さんと色々回りたいんだなって。あ、今思えば新聞部の公認ももしかして茜さんの為に？」

ゆかりの言葉を聞き終わったところで、葵はどうとう観念したという風のため息をつく。

「何となくって、これだから妙に鋭い人間っていうのは……。それで？　私はゆかりさんにそれを秘密にしていたたく代わりに何を要求されるんでしょうかね？」

葵は普段の無表情で抑揚のない声からは信じられないほど、身振り付きのおどけたような大仰さで、だがどこか諦めたようにそう言った。バレてしまつては仕方がない、煮るなり焼くなり好きにしろとでも言うように。

そんな葵の変わりように少し驚いたようなゆかりだったが、すぐにその意図するところを理解して、慌てたようにわたわたと手を振つた。

「違いますから！ そんな葵さんを脅そうなんて考えてませんから！ そうじゃなくて今回やつぱり葵さんの手伝いがあつてのこそだと思つたので、私も何か葵さんにお返しできればな、と。それでお節介かなとは思つたんですけど、つい——」

「——ふふっ」

そんな風に早口で弁明を述べるゆかりに葵はしばし固まつて、それから可笑しそうに笑つた。

「え、えつと……？」

「すいません。ちよつとした冗談だったのですが、ゆかりさんが思つたよりいい反応を返してくれるもので、つい。ですがその気持ちは有難く受け取らせて頂きます。もし手伝いが必要な時が来たら、その時はお願ひします」

葵のころころと変わる反応に少し戸惑つていたゆかりだったが、それを聞いて安心してたように頷いた。

「わかりました、いつでもお手伝いしますから！ ……でも、葵さんの場合そもそも茜さんにもう少し優しく、というか素直にしてあげてもいいんじゃないかな、とは思いますが」

「……そうですね、少し考えてみましょう」

葵は最後にそうふつとほほ笑んで、それから瞬きをした後にはいつものように眠たげな無表情へと戻っていた。

「では、また学校で」

「はい、葵さん」

茜の方へと歩いていく葵の背中を見送りながら、ゆかりは自分が先ほど言った言葉を反芻した。

「素直に、か……」

それは特に深く考えず口から出た言葉だったが、果たして私は自分で言っておきながらそうあれたんだろうか。

否、そうではなかったからこそこんなことを考えてしまうのだろう。

今思い返してみると、二人が争っていたあの時の自分は、生徒会の一員として何とかしようという気持ちばかりが強かったのではないか。

学内の風紀が——とか、二人のケンカが周りに影響を及ぼしたら——とかそんな事ば

かりで、だから二人と会ってもいつも注意させず、そればかりか形だけでも仲良くなってくれたらなんて名前呼び合うことを提案したりして。

本当はそんなかしこまった建前などいらなくて、ただ二人と一緒にいたい、二人が仲良くしてくれると嬉しい、そんな単純な思いだったというのに。

もしも最初からそんな気持ち素直に伝えていたら——生徒会役員としてではなく、マキの一友人として、あかりの従姉としてそう伝えていたら、もつと早く解決してこんな風に三人で遊びに行けるようになっていたりしたのだろうか。

……いや、あとから「もしも」を考えるのは簡単だ、なぜなら結果を知っているのだから。

結果が分かっているから安心してこうすればよかった、ああしておけば良かったと自分の事でもどこかシナリオでも読むかのように他人事で悔やむのだ。

今回で言うなら、私の二人と一緒にいたい、二人のどちらも選ばないという選択を二人が受け入れてくれたからこそ、そんなことを考えられる。

だけど、もしそうじゃなかったら。

二人のどちらかに、或いは両方にその選択が受け入れられなかったとしたら。

今朝二人に伝える前心配していたようにそんな中途半端な選択をするならと、嫌われてしまっていたら。

きつと真つすぐに伝えた分、言い訳のしようもなく傷ついて……そして、変わらないと思つていた関係も変わってしまうんだろう。

……いや、変わらない関係なんてないことはとつくの昔に、あかりが突然引越すことになった時に分かつていた筈じゃないか。

一緒にいるのが当たり前だと思つていたのが、ある日突然離れ離れにならなければならなくなったあの日、世界は容赦のない変化を強要してくるものだと思ひ知つた。

砂浜に時間をかけて作り上げた砂の城が、寄せ返す波になんの感慨もなくただ溶かされて行つてしまうような、絶対的で抗いようのない淡々とした変化を。

……私はずつと変化を恐れていたのかもしれない。

抗いようのない変化をどこかで諦観しながら、それでもやつぱり変わっていくのを恐れて。

だから自分の選択で変わってしまうのを恐れて、素直にこうしたいと伝えられなかったのだろう。

そうして生徒会の一員としての立場を守り、二人に関わるけど踏み込みはせず、あくよくば二人が何かのきつかけで仲良くなつてもらえればと思つているだけだった。

そしてもしダメだった場合は、二人から距離をとるといふ逃げの選択肢まで用意して。

自分のあまりの卑怯さに、自嘲気味に空を仰ぐ。

よくこんな自分に二人とも好意を寄せてくれるものだ、と。

……それでも結果として、二人は私の我儘なお願いを受け入れてくれた

だったからそれに対して私が出るのはこの今を大切にすることだ。

あの姉妹の助力があつたからとはいえ、自分の選択で少しだけいい方向へと変わった

この三人での時間を。

確かにいつか、あの日のように今は重なっている三人の軌跡が分岐を迎え、散り散り
になってしまふ時が来てしまふのかもしれない。

だけでも……いや、だからこそ。

その時に後悔しないようにするために、もう少し素直に——

「どうしたのゆかりん？ そんな難しい顔してさ」

「もしかして、どこか体調悪いんですか？」

そこまで考えたところで、トレーを持ったあかりちゃんとマキさんが心配そうに自分
の顔を覗き込んでいるのに気がついた。

「ああいえ別に——」

何でもありませんよと答えようとして考え直す。

こういう小さなところから素直になつてみようかと。

「もしかしてお姉ちゃん、私達が居なくて寂しかったんですか?」

「まさか、こんな短い時間でさすがにそんな訳ないじゃん」

冗談めかしたあかりの言葉に笑みを浮かべる二人に、私は真つすぐな視線を向ける。

「——そうですね、最近ずっと二人と一緒にでしたし、今日は朝から一緒にでしたからね。こんな短い時間でもちよつと寂しかったです」

「はは、ですよね——っ?!」

あかりは食べようと手にしていたハンバーガーの包みを取り落とし、ついでに顎も落ちた。

「ちよ! ゆかりんどうしたのさ?!」

マキさんはまるで熱を測るみたいに私の額に手を当ててきた。

「……二人ともなんですかもう」

折角素直に伝えていこうと決意したばかりなのに。

でもまあ——

わたわたと慌てる二人を見てくすりと笑う。

「こーやって三人でいられる時点で一歩前進、ですかね?」